
戦国BASARA ~ 白き鬼姫物語 ~

紺碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国BASARA ～ 白き鬼姫物語 ～

【Nコード】

N0964Q

【作者名】

紺碧

【あらすじ】

とある小国に、一人の武将がおりました。

髪は白く、

目は赤く、

着ている服も変わっています。

しかし、一度戦場に立てば、一匹の鬼。

人はいっしか、『鬼姫』と呼ぶようになりました。

1 鬼姫、現る！

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 《

*

* 1 * 鬼姫、現る！

*

何だろう、もう嫌になるなあ・・・。

「何奴！？」

「いやいや、何奴じゃないって。見て分かるでしょーよ？敵さんです。」

ドゴッ！

コレで何人目だろう？

疲れたんだけど・・・。

「ただ殴るだけってのも、なあ・・・。」

「お、おおおおーーーーっ！！！」

「せいや！」

ザシュッ！

「油断は禁物だ！亜鬼十！」

「敏春兄！いや、俺もう面倒ですよー・・・。」

「面倒って・・・。」

「ついことで・・・、できたらおさらばしたいなあと思ったんだけどね。・・・そうもいかないわけ、だッ！」

今度は蹴り倒してやった。

てか、鎧壊れた！？

「あ、相変わらずの馬鹿力・・・！？」

「こっちだってビックリなんですよね。」

「こ、この男・・・！人か・・・！？」

「残念！まっこと残念ながら、人間なんですよねー。」

つーことで、と体勢を低くし、駆け走る。

「いざ、勝負！」

「敏春兄ィー！暇ですよー！あっそびつましょ！」

「……はあ……。」

呆れました。

「悪いが、俺は政で忙しい。」

「分かってる。でも、俺が暇なんで遊ぶ。」

「・・・普通自分の主にそんなこと言うか？」

「仕方がない。敏春だもん」

グッ！と親指を出して笑う彼、亜鬼十。

「・・・、なあ亜鬼十。いい加減、「STOP!その話はNOTH

ING!」・・・お前どつかの武将みてえ・・・。」

「竜ちゃんね。」

「友達みたいに言ってるじゃねえ。」

「でもさ、友達だったら良いのにねえ。皆皆友達だったら、戦なんてないのに・・・。」

「・・・亜鬼十・・・。」

「ああー、でも友達でも喧嘩ぐらいするね。完全に死人でそうな。」

「いや、おい!? そんな結論出すなよ! それじゃなりたくてもなれねえよ!」

「だねー。・・・そういやさ、安曇^{アズミ}さんから文が来てるよ。」

「って、それを先に言え!」

「ラブレターじゃないよ、きつと。」

「?・・・らぶ・・・?」

「いや、良いや。大丈夫、敏春兄には縁のないものだから。」

「・・・なんだろうな? 少々腹にくるものが「嘔吐?」違う!」

もう良い、と文を読む敏春。机を挟むように向かいに座る亜鬼十は天井を見上げるように寝転び、ゴロゴロし始めた。

「!?!?・・・コ、コレは・・・ッ!?!?」

「何!?!?・・・まさか・・・!?!?」

ゴロゴロしていた亜鬼十は剣幕な顔で起き上がり、敏春の手紙に視線を向ける。

「・・・あ、ああ・・・、そのまさかだ・・・ッ。」

対する敏春も剣幕な顔だ。

「敏春さんと縁のない恋文」そこか！？しかもさっきのソレか！」
「…って、違うんですか？」

嫌だコイツ、ってな感じに見られたよ。

「……。甲斐の虎を知っているか？」

「武田君からの恋文」やめい！」「……。うおえっ！」

「吐くな、アホ！！」

「吐いてないよ。胃の中のもの出してないから。で、何？甲斐の虎って武田信玄でしょ？」

「我が国に攻め入ろうとしておる。」

「・・・は？」

「・・・。」

「マジ？・・・でもさあ、何で？こんな小国一つに・・・。」

「多分、お前かもな。」

「？」

「お前、他国で結構有名になっている。」

「ソレは知ってるけど。何？俺に興味があるの？」

「おそらく。」

「・・・戦、か。暇つぶしになっても、俺は嫌だなあ。」

「当然だ。しかも、あの一揆から一年とはいえ、まだ国としては安定しておらん。そんな状況で戦が出来ようか。」

「じゃあ、『誰がやるか、コノヤロー』って送ってください。」

「お前の名で出してやろう。」

「いやいや、ここは主君の名でしょ？」

「俺はまともに書く。そんな失礼なもの出したら完全に戦だ。」

「その時は君を武田君に突き出してやろう。」

「デメエ・・・ッ！」

「ま！冗談抜きで・・・、『天下に興味ない』ってことと、『中立国』だつてことを書いてやれば良いんじゃない？」

「そうだな。」

そうして、武田軍への文を書き始める敏春だった。

「もし・・・。」

ピタリと筆が止まる。

「もし戦になったらさあ、俺が何とかするよ。」

「・・・面倒とか言って帰るなよ。」

「言うことそれ!?!?!、まあ大丈夫だ。」

「心配だ。」

「任せたぞ、っていうところだっ!」

「任せた!」

「・・・!」

「任せた。お前に、な!」

「・・・ニツ!了解ですよ、わが主君!」

ハイツチを決め、亜鬼十は部屋をヒョイツと出ていった。軽やかな足取りで、その足は城下の良く見える、城の一番高い場所に向く。城下の人たちはあつたかい人ばかりだ。お人好きが多いというのもある。だが、そんな人がいるのも、この国が平和な証拠だ。

「だから、守らねえとな！この国を愛する恩人の為にもよ」

その後、亜鬼十は安曇と共に甲斐へと赴く。

コレが『甲斐の虎』と『鬼姫』の初の対峙となる。

2 鬼姫、そして甲斐の虎

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 》

* *
* 2 * 鬼姫、そして甲斐の虎
*

甲斐は、何故か団子が上手かった。

いや、何故かとか可笑しな表現なんだけどね。
でも、とにかく美味しいよ。

三色団子なんか絶品だね、この店。

「おかわりくださいーい！」

「……。」

「あれ？安曇さん、どうかしたー？」

「……はあ……。」

「何何？敏春兄とそっくりな溜息ですね。」

「呆れている。」

安曇はただそれだけ言った。

あとは目で訴えている。

自分は何のために甲斐に赴いたのか、目的を憶えているか、と。

「甲斐にはお使いできたのは憶えてるんだけどね。いやあ、マジ美味いわ。」

天晴れだね。」

「.....」

安曇は忍。

今回は従者に変装してついてきている。

が、表情豊か、とはいかない安曇の顔はまさに無表情。

まあ、呆れ顔が出来るようになった。

目の前の人物のお陰で。

だが、この目の前の人物がかなりの実力者であることは、自分も知っている

し、実際にその力を見ている。

知識力も半端ではない。

よく知られていない南蛮のことも良く知っているいし、言葉も知っている。

それについては、正直敬意を表するものがあつた。

「そうだ これお土産に持っていこうかな。」

「……。」

普通は自分の土地のものを土産にするものだろう。
なんて、思っけていても言わないのが安曇である。

亜鬼十はそんな事は露知らず、お土産として持っていくことにした。

「『鬼姫』が態々この場に赴くとは、思いもせんことよ。」

大きな部屋で『甲斐の虎』武田信玄と会っていた。

横にあの真田幸村も控えている。

会っていきなり意外そうな顔をしていたが、俺をどんな奴だと思っていたの

だろうか？

少し気になるところだ。

「うーん・・・、嘘っぽい。」

「ん？」

「人の国に忍侵入させといて何言ってるんですかー？」

「！」

安曇は珍しく目を見開いた。

甲斐の忍が??

自分が知らぬ間に・・・?

「知っておったか?これはまいった。」

「そう思うなら戦のことはなかったことにして下さい。迷惑です。」

「って、亜鬼十様!?!あなたさっきから何て物言いなのですか!?!」

相手はあの甲斐の虎なのですよ!と、安曇は慌てて自分の主を非難する。

が、そんな言葉を聞く主でもなかった。

「貴殿らの国は小国である。」

「自覚してますよ。」

「しかし、貴殿らの国の力は、一目置かれるものがある。一揆の中心となり

その後を背負った主君、敏春殿もそれに値する。が、一番は貴殿じや。」

「・・・安曇？」

「いえ、アナタです！」

「はあ。でも、ソレ噂でしょ？俺強くないから。『鬼姫』とか正直意味分か

らんです。」

「ソレが真であつたとして、こちらが戦をやめようと他国は貴殿らの国を攻

撃するであろつ。」

「・・・この場を回避しても、また新たな嵐がやってくるってことか。」

「そついつことになる。」

「・・・俺は、戦が嫌いです。」

「！」

「大嫌いです。誰かが死にます。傷つきます。悲しみます。俺はソレが嫌で

す。主君もそれが嫌です。」

「ふむ。この文にもそのようなことが書かれておった。」

「甲斐の虎殿は、それを綺麗事と笑いますか？」

「笑いはせん。が、この乱世においてその考えは綺麗事であろう。」

「だよねー。でも、俺はその綺麗事を酷く気に入ってたりします。だから、

あの時一揆を手助けしました。」

途中面倒で帰ろうかなあと思っちゃったりしましたけど。

「天下を取れば、和平をいつか……。いつか、なんて……。あ

はは、笑

えるわー。」

「？」

「はじめまして！こんにちは！で始まって、友達になりましょうって言えば

良いだけの話でしょ？皆仲良しになれば、天下とか取らなくても和平は守ら

れるというもの。」

「天下取りにそれだけを求めるものしかおらぬのなら、問題はなかるう。」

「現実はどう、ですか？」

「うむ。」

「・・・くっだんねえ・・・！」

「！？」

「くだんねえよ！天下？んなもん取り合って何が楽しいんだよ？命よりも大

切なモンなんてねえんだぞ。それを承知で、天下取りなんかしてんのか？鹿

か！」

「さ、先ほども、貴殿はお館様に無礼である！」

黙って睨んでいた真田幸村だが、我慢できなくなったのだろう。立ち上がり、槍を亜鬼十に向けた。

「外野は引っ込んでいてください。俺は甲斐の虎殿に話しています。」

「だからこそ、某は黙って聞いていたでござる！しかし、何たる暴言！お館

さまのお志も知らず、なんということを・・・ッ！！」

「コレは俺個人の考えた。非があるのなら、俺が一身に受けよう。俺はそう

思うからこそ、中立でありたい！それ以上でも、以下でもない。お
分かり申

したか？」

「……もし、他国が責めてきた際、いかなさるか？」

「その時は、俺一人で潰す。」

「何！？」

「……貴殿一人で、どうにかなるというのか？」

「大将を潰せば良い話。それに、被害は最小限に限る。」

「……フッフ……。」「

「？」

「ハハハハハッ！ますます貴殿を知りたくなった。戦の申し出は
取り消せ

ぬ。」

「……。」

「亜鬼十様。」

「……あつそ……。だったら、今ここで決着つけませんか？日

を改める

なんて、面倒ですよ。」

「なっ!？」

アナタって人は・・・、と嘆いている。

もちろん、その目から伝わってきたことだ。

と、あちら側から、真田幸村が甲斐の虎の前に立つ。

「お館さま!この場は、この幸村にお任せくだされ!！」

「うむ。良からう!」

「安曇さん、下がってて。」

「はっ!」

「真田幸村、推して参る!」

「エース君登場！つてね　でも、何か勘違いしてない？」

「？」

「誰が殺し合いしようつたよ。」

「??」

「『第一回　鬼姫VS紅き虎！鬼ごっこ対決！！』開催！」

「・・・・・・・・・・は？」

「は？じゃない！夕刻までに俺を捕まえられたら甲斐の勝ち！捕ま
えられな

かったら俺の勝ち！勝ったほうの願いを敗者は必ず叶えなくてはな
らない。

「

どうだ！と目を輝かせる亜鬼十に、この場の誰もが少なくとも呆れ
た。

それに幾分脱力した。

「・・・貴殿の変わりようは噂以上のようだ。」

「だって、俺戦嫌いだし。こっちの方が平和じゃね？」

「・・・。」

「どーするー？」

「・・・行け、幸村よ。」

「お、お館さま!？」

「どんな形であれ勝負に変わりなし!」

「そーこなくっちゃ!あ、あと、武器の使用は認めるけど、バサラ技は認め

ない。OK?」

「・・・南蛮の言葉・・・?」

「了承されましたか?って聞きました。」

「うむ!」

「よし！じゃあ、ゆつきーが鬼ねー！」

「・・・某のことか？」

「そうそう 三つ数えてね。安曇！」

「・・・はい。・・・開始！」

もう自棄になったのか、諦めたのかはさておき、安曇の合図で亜鬼十はその

場から走り去った。

そして、幸村は・・・。

「・・・ひ、一つ・・・、・・・二つ・・・」

律儀に数えています。

「（真面目ですね・・・）」

ある意味呆れてしまう安曇だった。

3 鬼姫、そして紅き虎

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語》

* *
* 3 * 鬼姫、そして紅き虎
*

見事なものだ・・・、あ！筍ッ！！

ご想像通り、只今竹やぶの中。

一応敷地内だしねえ！。

それに、夕刻までって結構時間あるんだよ。
流石にずっと走るの嫌だもん、俺

「この筈持って帰っても良いかなあ？・・・ま！黙ってればいいか
！」

「見つけましたぞッ！亜鬼十殿おおおおおっ！！」

「うげっ！？もうかよ！」

とは言いつつも、亜鬼十はニッと口元に笑みを浮かべる。

「（それにしても早いなあ・・・。）」

この敷地はいうまでも無く広い。
そんな敷地内にたった一人を探し出すのにはかなりの短時間だ。

「ゆっきー！なんでここだって分かったのかなあ？」

「佐助が教えてくれたのだ！」

「なーる、ほどッ！」

「！？」

亜鬼十が放った銀色は、いくつもある竹の一本に突き刺さった。

「君も参加して良いよー 多い方が楽しいモンね？」

「・・・やれやれ、参ったなあ・・・。」

なんで分かったの？というような顔を向けられ、亜鬼十はニッコリと笑って

みせた。

「鬼さんコチラー、手ーのなーる方へー」

「なめてもらっちゃあ困るなー。」

タンツ、と竹を蹴り、上から近づいてくる佐助。
そのスピードもかなりのものだ。
下手すれば捕まってしまう。

だが、それさえも楽しむかのように走り抜く亜鬼十に、全く追いつけない。

「早くしないと夕刻になるよー！ゆっきー！さっちゃん！」

「うおおおおお！お館さまのためえー！この幸村！全力で捕まえてみせ

る！！」

「てか、さっちゃん・・・ッ！？やめてよ、それ！！」

あと一時間といったところだろうか。

徐々に、そして確実に日は落ちていく。

真っ赤に、そして橙に輝く夕日が彼ら三人を照らした。

ただその光景は、武将と忍びではなく、無邪気な童達が遊んでいるように見

えた。

安曇は一人、主人が戻るのを待っていた。
あれから数刻たつが、やはり捕まっていないのだろう。
遠くから真田幸村の咆哮が聞こえる。

「安曇よ。」

「は！」

「お主の主、そして君主である敏春殿を、如何様に思う？」

「お二方は、我が国の誇れる武将。そして、英雄でございます。」

「ほほう。」

武田信玄は興味深げに問い返す。

「一揆が成功したのはあの二人の力故にでございます。」

「ふむ。噂でも聞いておる。が、しかし。わしが聞きとつことはそのような

ことではない。」

「？」

「お主から見た、二人の真の姿じゃ。先ほどの噂と変わらん。」

「・・・私は、二人の真の姿など知る由もありません。しかし、見

たままの

お二人で良いのならば。」

「うむ！」

安曇は静かに話し始めた。

「当主・敏春様は人望に篤く、責任感の強いお方です。政には積極的

に取り掛かり、国を強く想っております。それ故に、敏春様は自らの主君の

横暴さが許せなかったのでしょう。」

ですが・・・。

そこで安曇は言葉を切った。

敏春には人を束ね、協力させる力がある。

だが、正直な話彼には彼自身戦う力を十分に持っていなかった。

「弱くはありません。しかし、突破口となる力がございませんでした。」

「その突破口となつたのが、鬼姫殿であるな？」

「はい。」

忘れもしない。

お庭番でありながらも、自分も主君の横暴な政を許せず、敏春と共闘していた。

そんな中で、突如現れたのが亜鬼十だった。

何処からやってきたのか分からない不審人物でしかなかった。が、

敏春は悟

ったのだろつ。

この目の前の人物こそが、自分達の突破口を切り開いてくれる、と。

「敏春様の直感は見事に当たりました。我々は勢いに乗り城を落とし、前当

主を倒したのです。」

「敏春殿は素晴らしき勘の優れた男であるようじゃの。」

「はい。そして、我が主人・亜鬼十様は突破口となるほどの実力を持った武

将でございます。」

「ふむ！そなたの話を聞き、わしもそう思った。そして今回謁見し、確信し

た。あの者はとてつもなく、強い！そして、純粹故に危険であろつ。」

「・・・。」

亜鬼十は誰よりも純粹だった。
単純とも取れるほどに純粹で、そして残酷だった。

『仲良くしない人は、イラナイよね?』

『鬼姫』と呼ばれる所以はその時にある。

敵と判断したものには、決して躊躇しない。
戸惑いも無い。

無数の屍の上に立ち、敵であつた肉塊を踏み潰し歩く。
血肉に塗れようと、笑顔は絶やすことは無い。

だが、日常での彼は一変した。

まるで別人であつた。

敏春様や自分だけではない。

他の、共に戦つた兵も驚くほど豹変するのだ。

「今も見ての通り。戦場以外ではあいております。敏春様を兄のように甘

えているのも珍しくございません。」

「・・・そうか。だが、もしかしたら・・・。」

「？」

信玄は幸村に『あの鬼姫と友になれるのではないか』と思っていた。

幸村は亜鬼十とは違う純粹さを持っていた。

真つ直ぐな投げることの無い信念を持ち、純粹さを忘れない。
この戦国の世では珍しい者であった。

「決めたぞ。」

「？」

「この勝負で我々が勝った後、同盟を組もう。」

「！？」

「奴の実力に興味はあるが、戦でなくとも垣間見えよう。」

「……。」

甲斐と同盟……。

ある意味どちらが勝っても同じような結果ではないだろうか・・・。

長く一緒だった安曇は、何となく亜鬼十の願いが予想できていた。

きっと、今回もまた・・・。

4 鬼姫、結果

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 《

* *
* 4 * 鬼姫、結果
*

ピューッ!!!

高い音が響いた。
これは安曇の持っている笛の音。

「勝負ありだよ！ゆっきー！さっちゃん！」

「はあ、はあ、はあ……っ！」

「な、何なの、アレ……っ！息も、きれてないじゃん……!？」

「ふふん じゃあ、帰ろう。ゆっきー！さっちゃん！」

「だからさっちゃんはやめて……。」「

ニコニコ笑顔を浮かべている亜鬼十には、汗の一つも見えない。
息もきれていない。

正直悔しかった。

これで、自分達は負けた。

お館様に見せる顔がない。

「・・・？ゆつきー・・・？」

「うおやかたさばあああああ！」

「！？・・・元気だね、ゆつきー」

「そこ元気ですませちゃうの！？」

「ガシッ」

「うおおおおおー！！！！！！」

「ちょ、旦那！？」

悔しさに叫び、幸村は全速力で駆ける。

が、亜鬼十はその瞬間に幸村の背中にしがみつき竹やぶを去って行った。

それはそれは楽しそうに。

「お館さまあ！！」

ものすごい勢いで戸が開いた。

そこには険しい顔をした幸村がいた。

「・・・その様子では、負けおったか？」

「・・・はい・・・。この勝負、決して負けてはならぬと分かっております

た！が、某の未熟さゆえに・・・ッ！」

「ゆっきー、そんなに落ち込むことじゃないって。」

幸村の背後からヒョコツと顔を出すのは亜鬼十。

「！？亜鬼十殿！」

「アハハ 楽しかったー！安曇さん、ただいまー！」

「・・・亜鬼十様、自重ください。」

「丁重にお断りさせていただきます。」

「・・・。」

「でね！おぼえてるか？この勝負に勝ったほうは、一つ願い事を叶えても

らえる！」

「おぼえておるぞ。して、そなたの願いは何だ？」

「フフン・・・俺と友達になってよ！」

「！？」

幸村や後から追って隠れている佐助にとって、その言葉は以外であった。

そして、信玄もまさか自分と同じ願いであつたとは思わなかった。

とはいえ、亜鬼十の『友達』が、信玄の『同盟』という意味なのかというところ

、微妙に違う。

ただ単純に、亜鬼十は友達になりたかったただけなのだ。

「友達……。それが、亜鬼十殿の願いに御座るか？」

「うん 甲斐の皆と友達になりたいなあ。」

「いや、しかし！勝手にそのようなことをしてもよろしいのか？勝負に負け

た身であるが、これは国同士の問題であろう。貴殿の主はソレを承諾してお

るのか？」

「許可？ないよ。」

「！？よ、よろしいで御座るか……。！？」

「うん、問題ないよ。敏春兄は争いごとを好まないからね。あの一揆は、ま

あ仕方ないんだ。争いごとが嫌いだから起こしたんだからね。自分が主君に

なって、二度と争いはしないと民に誓ったんだ。」

とはいえ、攻めてくる国に対しては、自衛する必要がある。
完全に戦なしとはいかない。
それが、この戦国の世なのだ。

「それで、友達になってくれる？」

「・・・そちらに不都合なければ・・・、某は・・・。お館様は・・・？」

「うむ。わしも実は貴殿と友好関係を結びたかったのじゃ。」

「ホント！？良かったー これで断られたら、どうしようかと思っちゃいま

したよ！安曇さん！敏春兄に報告してくれます？」

「？亜鬼十様・・・。」

「俺は今日ここに泊まる。」

「なりません！突然そのようなことおっしやられても困ります！！」

「えゝ！外暗いよー？」

「子供じゃないのですから、少しは場を弁え下さい！それに、宿なら手配し

てあります。」

「・・・しょうがないなあ。折角ゆっきーと枕投げでもしようかと思っ

たのに！」

「尚更です！人様の所でそのような！？」

「・・・こじゅさんみただよ、安曇さん。」

「私はオトンではありません！」

あ、言っちゃったよ・・・。

「それじゃあ、また今度良いかな？」

「ワシらは大歓迎じゃぞ、亜鬼十殿。」

「じゃあバイバイ！玄さん！」

「げん・・・！？つて、大将にまで・・・！」

「落ち着けエ、佐助。わしはそれで構わんぞ。」

「じゃあね、玄さん！あと、俺の事は亜鬼十でいいからさあー！」

今度はうちの名物土産に持ってくるぞ！と、呆れ帰っている安曇に話しながら

ら姿を消した。

その動きはまるで忍のようであった。

「変わった奴でしたね。」

そう言ったのは佐助だ。

それに賛同するように信玄も「・・・うむ」と短く答える。

「でもま！悪くもないかもしれませんね。敵になるよりは・・・。」

「

佐助らしからぬ言葉であつたが、それは真意だつた。

鬼ごつこという、いたつて平凡な遊びだつたが、非凡でもあつた。

自分たちから逃げる彼の動きは忍のようにしなやかで素早い動きだつた。

もし、否、確実にアレが彼の實力というわけではないだろう。

それに・・・。

バサラ者であるはずの奴は、力を見せなかった。

そういうルールだったというのもあるが、きっと使えても使わなかっただろ

う。

それほどまでに見せつけられてしまったのだ。
悟ってしまったのだ。

力の差を・・・。

「幸村よ。」

「！はい、お館さま！！」

「あの亜鬼十なる人物を、如何様な人物とみる？」

「は！一見綺麗事とも取れる言動に見えますが、それを実現できる力をも

つ者とお見受けします！實力については實際垣間見えること叶いませんでし

たが、某たち以上の實力をお持ちとお見受けしました！」

「ふむ。わしも同意見じゃ。實際あの者には隙が一切無かった。そして、遊

びといえど、本気で捕えようと追ったそなたらから、完全に逃げさせたのも

事実。同時に、やり合ってみたくなったのも、また事実じゃ。」

「大将、もしや……。」

「戦は取り消す。が、試合を申し込むことにする。さすれば、文句はあるま

い。」

「……こりゃ、どうなることやら……。」

それがどんな結果を引き起こすのかは、誰にも分からない。
ただそこには、その先の結果ではなく、亜鬼十の實力に対しての興
味だけが

あった。

5 鬼姫、驚愕

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 《

* *
* 5 * 鬼姫、驚愕
*

帰ってみると、そこにさっちゃんがいた。

「ただいまー！あと昨日ぶり、さっちゃん！」

「あはー、そのさっちゃんはやめてほしいなー。」

「やだー」

無言で笑みを貼り付ける佐助から黒い何かが出てきた。それに危機を感じた敏春が「穏便に！」と宥める。

「それで。何用でしょうか？」

「大将から文を預かってきたんだよ。直接敏春殿につてね。」

「・・・亜鬼十。なにか悪い事でもしたのか？」

「え！？何で何で？俺ただ友達になつてきただけだよ　玄さん良い人だった

よ！」

「玄さ・・・ッ！？て、お前なあ！」

「ゆっきーとも仲良くなったのー！」

「それかなり一方的な考えだからね？」

「えー！さっちゃんも俺と友達だろ？」

「俺様は「だろ？だろ？」・・・。」

「亜鬼十、佐助殿が困ってる。」

「えと、旦那？旦那も俺様に『殿』なんてつけなくても・・・。」

「何を言っんですか！忍とか関係ありません！しかもあの甲斐の者を呼び捨てになど！」

「てになど！」

「・・・旦那も結構な変わりモンだね？」

「でさー？何だったの、中身？」

「うむ！」

佐助から受け取った文を広げ、黙読していく。
が、その表情がだんだん曇っていくのが明らかに分かる。

またとんでもないこと要求してきたな・・・。

「佐助殿。コレは真か？」

「そうですよ。」

「何だったの？」

「お前、甲斐と同盟を組んだのか？」

「同盟？・・・ああ、友達になっただけど？」

「戦はなくなった。が、試合を申し込まれた。」

「試合？別に良いんじゃない？死人出ないし。」

「甲斐はお前とやりたいそうだ。」

「俺？」

「ああ。」

「・・・マジでか！？」

「反応遅ッ！？」

驚愕だよ。

大スクープ！マジで？

あの武田信玄が、自分にマジで興味あったなんて、驚きなんですけど！

「んー……。あの人、道場ぶっ壊しそう。」

「あー……。」

確かに、と佐助をコクコク頷く。

甲斐にある道場、よく幸村を鍛えるのに使われている道場も、アレで何代目

だろうか……。

「しかも、これって俺にバサラ技使えってことでしょ？俺、疲れるから使い

たくないのになぁ……。てか、友達に使っちゃダメだよ！絶対、ダメ！」

「まあ、そこらへんは後にしてもらって良い？返事待ってるんだけど？」

「ゴメン、さっちゃん！そうだね！バサラ技云々はあとで考えるよ！！」

「試合、か。まあ、戦よりは……。それに、新兵たちに良い経験になりそ

うだ。」

「じゃあ、玄さんには良いですよって返事お願いしまーす！」

「……ホント軽いね、姫の旦那。」

本当に脱力してしまうような空気にしてしまう亜鬼十に、調子を狂わせられ

る佐助。

その様子をジッと黙ってみる安曇は、佐助を警戒していた。忍として当然の行動である。

それに、彼女は気づかなかった。

甲斐で言っていた亜鬼十の言葉で初めて知った。

他国の忍がこの国に忍び込んでいた、と。

表情には出さないものの、やはり悔しいところだ。

「あ！お土産楽しみにしてるねー？」

「コラ！はしたねえぞ！」

「えー！」

「えー！じゃねえよー！」

「じゃ！俺様行くからね。」

佐助は苦笑しながらその場から去って行った。

「じゃあ、後は頼んだ！亜鬼十！」

「頼まれたよー！」

変な返事を返す亜鬼十に見送られ、自分の部屋へ戻っていく敏春。
安曇と自分だけになった所で、亜鬼十は微笑むのをやめる。

「落ち込むことじゃないよ、安曇さん。」

「!？」

「大丈夫！顔には出てない。ただ、君を知る者としては、何となくそう思う」

「ただだから。」

「・・・いえ、忍として気づかなかったなど・・・ッ！もし、その忍の目的

が暗殺であつたらと思うと・・・。」

「杞憂、だよ。現に誰も死んでないから。結果オーライだよ。」

「・・・。」

「心配することも無いよ。安曇さんがもっと強くなりたいと思うのなら、自

分の好きなように修行すれば良い。でも、無茶はしてもらいたくないだよな

。」

「・・・亜鬼十様・・・。」

亜鬼十は優しい。

平和主義なのは本当だ。

そして、友達になりたいという単純な願いも、本当だ。

だが、戦場での亜鬼十も、また然りである。

「まあ、これからよろしくってことで」

ニヘラと笑う亜鬼十に、安曇は安心するのだった。

6 鬼姫、試合

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 》

*

* 6 * 鬼姫、試合

*

城から少しは慣れた場所に、それなりに広い道場が二箇所ある。
一つは何の変哲も無い、新入りばかりの兵を鍛える鍛錬所だ。

が、もう一箇所はその道場の地下にある。

前のあの暴君が、捕虜となった者、そして気に入らない家臣や兵、
民までも苦しめ、血に染めた場所である。
今では忍たち専用の訓練所になっている。

一揆の後、血のにおいも残すことなく綺麗にし、あの下種が使って

いた者は全て処分した。
そのお陰で、当時の面影など全く無い。

前置きはさておき。

敏春は亜鬼十と共に兵たちの前に向き合う形で話を始める。
横で長い話を聞き飽きたといった感じに欠伸をする亜鬼十。

「！おい！隊長のお前がそれでどうする！！」

「んー？まあ、気楽にいこうよ。みんなもそんな力むな。力んでもいい事ないしねー。」

無礼講ってわけじゃないけどさ。

「それに、敏春兄。緊張しすぎだつて。」

「なっ！？そ、そんなことは・・・！」

「いつもどおりで良いんだよ。俺達は甲斐より優れてるとか、何処よりもいい国とか、見せ付ける必要は無い。そういうのは、自然と出るもんだからね。誇りに思う程度で十分さ。」

「・・・亜鬼十、お前はこの国の主戦力。その自覚はあるのか？」

「主戦力、か。まあそれはおいといて、愛国心はある。俺はこの国が好きだ！」

「・・・。ともかく、信玄公に無礼なことだけは辞めろ。」

「分かつてるつて。」

「・・・『玄さん』はやめろよ。」

「え！？？」

「え！？じゃねえー！てめえ、またそう呼ぶ気だったのか！」

「玄さんが良いって言うてくれたもーん」

「この・・・ッ!」

「敏春様! 武田が参りました!」

「! もうそんな時間だったか。では、全員整列し、待機!」

敏春は亜鬼十を連れ道場を後にした。

お待ちしておりました、と敏春は信玄率いる武田軍を迎える。
まあ、流石に全員連れてきてないけど、結構な大所帯。

迫力が違うよ・・・。

「私が、城主の天松院 敏春と申します。遠路遙々お越しいただき
「久しぶりー、玄さん！」って、ちよつと！亜鬼十！さっき言った
はっかだろぅが！失礼だ、それ！！」

「わっははははは！よいよい、敏春殿。亜鬼十殿は真に面白い！」

「誠に申し訳ない。」

「謝らずとも良い。ワシがそう呼んでよいと言ったのだ。」

「ほらー！」

「ほらー！じゃねえ！！・・・ゴホン。失礼した。さあ、中へ。」

「うむ。」

武田軍は招き入れられ、城の中には信玄、幸村、そして忍び忍びに佐助が入っていた。

やっぱりアレだね。

自分の城でも、大国と小国の差ってやつで座る位置が違っただね。前に座っているのは信玄であり、敏春は亜鬼十の斜め前に座っている。

「小国ながら、誠良き国よ。ここまで立て直すのに苦勞したであらう。」

「はい。しかし、まだこの国は不安定であります。故に、今戦などは……。」

「ソレは承知した。が、どうしても知りたいのじゃ。貴殿もさることながら、この国の英雄殿の力を。」

「……て、俺ですか？」

「そなたじゃ。」

「お言葉なんだけど、俺は英雄じゃないよ。相手が弱すぎただけだしさ。俺がいなくても何とかなったと思うよ。あの一揆は。ソレよりも、敏春兄のほうが英雄だと思うなあ。そもそも俺が始めた事じゃないしね。」

「おお！主君を敬うその心！この幸村感心致しまするぞ！」

「感心？俺に？嬉しいなあ、ゆつきーにそう言ってもらえるなんて」

「って、お前！？ちょっと馴れ馴れしいからな！」

「ゆつきー！」

ガシッ！と幸村に抱きつく亜鬼十。

敏春が絶叫したのは言うまでもない。

「まったく、アナタという人は・・・っ！」

あれから数分後。

女中に変装していた安曇がお茶を持って入ってきた。
結果、その惨状に亜鬼十を説教し始めたのだ。

「大体、あのように他人に抱きつくなど!」

「アレはただの挨拶だよ。南蛮式の!」

「ここは日ノ本です!」

ちなみにここは別室。

あの広間には信玄と敏春が残り、亜鬼十、安曇、幸村、佐助はこの別室に待機していた。

「真田様も、お嫌でしたらお叱りください。」

「い、いや、某は……。」

「ゆっきーは嫌だったのか？」

「嫌、では……。」

「ちよつ、旦那！そんな事言ったら調子乗っちゃうよ！姫の旦那！
！」

「黙ってろ、オカン。」

「オカンじゃないからね！」

「オカン……。」

「安曇、アンタまで……。」

「それにしても、何で俺なんかに？俺より強い奴なんてウジャウジャいるでしょ？この乱世じゃ。」

「……いや、某たちは亜鬼十殿が異質の強さを持っていると思うのでござる。」

「……異質……、ね。」

「是非、お手合わせ願いたいのだ！」

「……。ゆつきー達は俺の本気が見たいの？」

「はい！」

「……困ったなあ……。敏春兄に止められてるんだよね。それに、俺自身嫌だからなあ。」

「それって疲れるから？」

「それもあるけど……」「亜鬼十！」……敏春兄！話終わったの？」

「ああ。今から道場に向かうぞ！試合だ！」

「りょーかい」

異質、か……。

確かに、自分は異質なのかもしれない。

そもそも、この世界にいる自体が、自分が異質であることの証拠だ。

俺は、元々この世界には無かった存在だ。

トリップ、っていうのかな。

俺の世界で、この世界はゲームでしかなかった。

実際俺の場合はアニメで知ったんだけど。

軍人であった俺は、暇つぶしにそれを見てた。

だんだんハマっていつてしまったんだけどね。

だから、実際彼らを見て驚くことなんて無かった。

ただ・・・。

ファンとして興奮したよ！

言っておくが、俺はカタブツな軍人じゃなかった。
結構あつちでもフレンドリーにやってたしね。

といつても、周りはカタブツばっかだったから、浮いた存在だった
なあ。

後輩達には人気あつたけどさ。

特に女性に。

「・・・き・・・、亜鬼十!」

「・・・はいよ?」

「はいよ?じゃねえ!」

・・・あ。

いつの間にか道場の中に入っていた。
整列しコチラに視線を向ける兵達は、鍛錬時のように胴衣を身につけている。

「後は任せる。」

「任されました。」

敏春と信玄は、亜鬼十と幸村の後ろに下がる。
そういえば、敏春兄は剣術しないもんなあ・・・。

てか、嫌いなんだっけ？

「ふう……。えっと、朝お知らせしたとおり、これから試合を行います。その前に、体を温めて起きたいので、準備運動といきましよう。」

「準備運動で、ござるか？」

「はい。簡単です。束になった彼らを、素手で退いてください。」

「なっ!？」

「!？」

「あ、あの……。隊長……。！」

「何ですか？」

「俺達、一言も聞いて「試練だと思ってください。」」

「!？」

「無茶苦茶ですよ!」

「そんな逃げ腰になってどうするんですか？」

「こ、心の準備が……。ッ!」

「・・・君達・・・」

「何甘えてやがる。」

「?!」

空気がガラリと変わった。

あののんびりとした感じが消え、凍てついた空気が流れ始めたのだ。表情も笑みが消え冷たい表情を見せていた。

「心の準備？そんなモン武士になる前に準備しやがれ！こんな時に弱音を吐くな！武士となるのなら、いついかなる時であろうと戦えるようにしておくのが基本！貴様ら今まで俺の指導を聞いてきたのか？寝てたんじゃねえだろうな？」

「寝てませんッ！！」

「当たり前だ！そんな事してたら死人が出てた！」

（じゃあ何で聞いたんですか！！？）

「人の子、いつかは死ぬ。不老でも不死でもない。有る意味弱い存在、だなんて俺は思わん！人間死ぬ気になりやあ、何でもできるッ！そんな事も理解できねえとは情けねえ！テメエらそれでも俺の隊かあ？ああ？？」

別人だ。

あの暢気にヘラヘラ笑っていた亜鬼十はそこにいない。
が、確かにこの人物が亜鬼十であることには間違いない。

「・・・亜、亜鬼十・・・殿・・・？」

流石の幸村もタジタジだった。
が、幸村を見る亜鬼十は、元通りの亜鬼十だった。

「ゆっきー準備は？」

「だ、大丈夫でござる。」

「よし じゃあ、始めようか？・・・返事どうした！」

「は、はいっ！！」

「まさに鬼じゃのう・・・。」

「・・・鬼だ・・・。」

「てか、変わりすぎですって！？アレ！」

「でも、猫被ってるわけではありません。極端なんですよ。感情の起伏が・・・。」

「極端とな？」

「まあ簡単に言うと・・・、『ガキ』ですね。」

だからこそ、アイツは英雄なんだ。

敏春が呟くように言ったその言葉は、確かに信玄の耳に届いた。

7 鬼姫、魅せる

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 《

* *
* 7 * 鬼姫、魅せる
*

この程度で・・・

「この程度でへこたれるとは何事だ！」

亜鬼十の咆哮が響いた。

自称『準備運動』のお陰で、体は温まった。

しかし、亜鬼十の中では兵達の今の状況が納得いかないらしい。

妥当な状況だろうと、誰もが思う。

信玄でさえ、二人の暴れっぷりを見てそう思うし、何より暴れていた幸村でさえ思うのだ。

が、納得できないものは納得できないわけで……。

「テメエら！これ終わったら腕立て、腹筋、素振り100回！！」

（お、鬼だ・・・っ！）

「お、落ち着かれよ、亜鬼十殿。」

「ゆっきーは準備運動になった？」

「じゅ、十分でござるよ・・・！」

「・・・よかったー　じゃあ、全員見学しててくださいね?」

「は、はい!」

これ以上怒らせないようにと、兵達は速やかに道場の端に寄った。

「今回はあくまで試合だからね。ここは妥当な木刀で相手しましょう。」

「某は問題ないでござる。」

「・・・でも・・・、ゆっきーはコレ使っていていいよ。」

ホイッと投げ渡されたのは二本の薙刀。

とはいえ、やはり刃は無く、木製で形作られた物だ。

「そっちの方がいいでしょ？」

「では、お言葉に甘えさせてもらいます。」

「うん 敏春兄、審判お願い！」

「はいよ。・・・両者、前へ！」

亜鬼十と幸村はそれぞれの得物を持って、中央に向き合つ。
相変わらず笑顔の亜鬼十に対し、緊張気味な幸村。

「両者、構え！」

幸村は二つの薙刀を、いつものよう二槍を構えるようにする。
ソレに対し、亜鬼十は居合い切りの構えをとった。
懷に飛び込まれれば、確かに面倒である。

しかし、いきなりその構えをしたことで、最初の動きが分かってしまった。

これは、罠か・・・？

見せ掛けなのか？

それとも、本当に・・・。

「始め！」

ダンッ！

床を蹴る音がした瞬間、幸村の懷に亜鬼十が潜り込んでいた。木刀が一閃される前に、幸村は持ち前の反射神経で体勢を後ろに、大きく跳び下がった。刃物のように鋭い木刀の一閃は、ギリギリで幸村の体に届くことは無かった。

「な、何でござろうか・・・？あの・・・、鋭さは・・・！？」
「さすがゆっきー やっぱりコレじゃ、無理かな。」

再び居合いの構えかと思わせたが、違った。その構えは、突きだった。

「居合いでは、ない・・・？」

「居合い切りは正直好まない。無謀に相手に突っ込むようなことは嫌いだ。」

とはいえ、幸村のような槍使いにとって、懐は死角同然。そこに潜り込まれば不利であり、これほどの弱点は無いだろう。しかし、亜鬼十は突きという攻撃に変えた。

本気でくるつもりだ、と幸村は相手に集中し始める。

（先ほどの居合い切り以上と考えた方がよからう！先ほどは反射的な避けだった。が、それではならぬ！それでは、某は負けてしまうだろう。）

「この幸村！全力でお相手致す！！」

「うん」

「是非そうしてくだ」

「さい」

「ね・・・？」

（背後！？）

流石に避け切れなかつ、完全に突きを食らってしまった。幸村の体はそのまゝ真つ直ぐに向かいの壁に叩きつけられた。

「フェンシング、というものを知ってるかな？南蛮にある剣術みたいなものなんだけど。南蛮の中でも西洋と呼ばれる地域では、刃の使い方が違います。この日ノ本の『斬る』という考えではなく、『突く』・『刺す』という考えがあるんです。フェンシングがまさにソレです。」

幸村は、ふらつきながらも再び力強く立ち、振り返る。

「斬るのではなく、『突く』ことが攻撃となります。」

「!？」

再び目の前に現れた亜鬼十は突きを繰り出す。

「旦那ッ！」

「ぬうおッ!！」

ギリギリと二槍で受けきった幸村。だが、その表情には全く余裕は無い。追い詰められている。

だが、このままでも意味が無いと察した亜鬼十は後ろに跳んだ。

最初の立居地にいる亜鬼十を、荒々しい息遣いで幸村は突進してい

った。

「猪突猛進。．．．でも．．．。」

繰り出された攻撃を亜鬼十は木刀一本で防ぎきる。

「良い突きだね。ゆっきー。」

「ぐっ．．．！うおおおおおー！ーッ！！．．．！」

二槍は空を切る。突く。刺す。そして、流される。

亜鬼十は木刀で軌道をずらし、身を翻した。そのまま回転を利用し、幸村の背中に肘を叩き込んだ。

「ぐ・・・ッ！」

「俺の本気が見てみたいようだけど、それじゃあ見せられないな。残念だけどさ。」

「まだまだ・・・、終わってはおりませぬぞ・・・っ！」

「まあね。ゆっきーが立ってるかぎり終わらないよ。かといって、本気出したらホント冗談抜きで・・・、死ぬよ？」

「！」

「気づいているだろ？俺が実力の半分も出してないことを、さ。」

「・・・っ。」

「別にもう止めようと促してるつもりもないし、手を抜いて続けてゆっきー達が納得できないのも分からなくもない。だから、『一瞬』だけ本気出してあげる。」

「！」

トンッ。

心臓部を軽く押された程度だった。

ただその時驚いたのは、先ほどよりも早い動きに対してだけだ。

そして、幸村の視界は暗転した。

8 鬼姫、詮索

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 》

* *
* 8 * 鬼姫、詮索
*

その動きはゆつくりだった。

先ほどまで燃え上がるように騒いでいたはずなのに、その光景に誰も
もが黙り込む。

あれが、攻撃だったのか？

まずそこで疑問に思った。

速さは凄かった。

忍の自分でも分からないほどで、旦那もこれじゃあ防ぎきれないな、と思った。

ただ、その後だ。

あの居合い切りや突きのように、何かしらの攻撃を繰り出すのだからと確信していたのだが、それが大きく外れた。

本当に、何の音もしないほど、静かに右手を前に突き出した。

そして、『触れた』だけのはずだった。

「……旦那……？」

大将との激しい殴り合いが日常茶飯事である旦那が、ただ触れた程度で倒れたのだ。

立っているのがやっとだった、その結果であつたわけじゃない。見るからに、まだ攻撃できる状態だったはずだ。

「心配ないですよ。気絶してるだけですから。」

亜鬼十は何もないように笑う。

「半日すれば目が覚めますよ。」

「……今のは、一体……。」

「あれが亜鬼十の十八番です。亜鬼十はああ見えてかなり怪力なんですよ。岩の一つや二つ簡単に砕いてしまっほどね。」

「あの細腕のどこに、そんな力が・・・？」

「俺もそれが知りたいんですけどね。本人も知らないことみたいなんで、他人が分かるわけもないってところですよ。」

「うむ。が、それと先ほどの技の関係が分からん。」

「力の凝縮。」

「！」

それに答えたのは、亜鬼十本人だった。

「普通相手を力いっぱい殴ったら、相手は動く。相手が受けきれても、相手にかかった自分の力は変わらない。ただ相手を動かすだけの力は不要。だから俺は、その動かす力も全て攻撃にあてました。・・・まあ簡単に言えば、とんでもない力を一点だけにそのままぶつ

けたという感じですかね。」

「貴殿は何処でその技を？」

「南蛮です。俺、南蛮で武将みたいなことやってましたから。」

「！？南蛮で・・・？」

「それにしても！敏春兄、ゆっきーすごいよ！この人、やっぱり友達になれてよかった」

「ん？」

「この人、ちゃんと心臓動いてるんだ。アレ食らった奴って皆心臓止まるのに！」

実に楽しそうに言った言葉は決して冗談にならないようなことだった。

「あ？お前手加減したんじゃねえのかよ？」

「いやいや、それしたら失礼でしょ。だから、本気でぶつけた」

「ば、馬鹿野郎！てめえ何やって「良いじゃん。止まったら止まっただでちゃんと助けてやったからさ！」そういう問題じゃねえ！！」

なんつうことを・・・っ、と頭を抱える敏春兄に対して、亜鬼十は鼻歌交じりに幸村を見ていた。ちゃんと呼吸している。

規則正しい呼吸が出来ている。

「まだまだ、俺も精進が足りないな。」

俺はまだ強くない。

まだ、道は続いている・・・。

「鬼姫・・・？」

とある小さな国が、一人の男を中心にした一揆により潰された。

それが報告されたのは、その翌日だった。

奥州の近くにあったその国は、小国ながらも横暴な城主のせいで幾度と戦をしていた。

近い内にココとも戦となる予定だった。

が、それまでに農民たちが黙っていられなくなったのだ。

「Ha! その結果がこれとは、笑えるな。それで、その鬼姫って奴が大将か？」

「いえ。大将の名は天松院 敏春。武家の家柄の者です。元々あの国の家臣でありましたが、城主の横暴に耐えかねたのでしょう。」

「じゃあ、鬼姫ってのは何だ？」

「鬼姫。名は・・・、アキト。」

「!」

アキト。

その名に聞き覚えがあった。

それどころか、そう名乗った者が最近この奥州に、青葉城にいたのだ。

いつの間にか抜け出し、姿を暗ました奴の消息は今も不明だった。

「もしその鬼姫が、あのアキトってんなら、確かめねえとな？小十郎。」

「はっ！政宗さま！」

そんなやり取りをしたのが一年前になる。

そんな長い月日をかけても、鬼姫があのアキトであるのか分からなかった。

そして、新たな報告がなされた。

『甲斐と同盟を結んだ』。

政宗や小十郎にとって、それは衝撃的なものだった。

甲斐が何故、アキトと手を結ぶ？

自分達の知る甲斐、武田信玄は決してアキトのような人間を快く思わないだろう。

「それとも、あのアキトじゃなかった、てことなのか？」

「分かりません。あれから幾度と忍に潜り込ませようといいましたが、それが叶わず。」

「・・・Shit!」

もし、あのアキトならば・・・!

政宗は憎悪に燃えた心を抑えながらも、強く拳を握った。
奴に殺された農民や部下達を報いる為に、奴を殺す。

「小十郎！甲斐に行くぞ！」

「はっ！」

甲斐のおっさんに話を聞く。

それが何よりも早く、情報を手に入れられるだろうと考えた。

『すまない……。』

何が……。何が『すまない』だ！

何の罪も無い農民まで殺しておいて、何が……。ッ！！

「アキトオ……ッ！」

キラリと煌く憎悪の炎は、暗闇の中で燦り燃え上がったのだった。

9 奥州、対峙

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 《

*

* 9 * 奥州、対峙

*

幸村が目を覚ましたのは、亜鬼十の宣言どおり半日であった。痛み
に少し顔を歪ませていたが、問題はなかった。

亜鬼十は敏春に頭を押さえつけられながらも謝罪させられた。本人
は全く納得など出来なかった。

「頭を上げてくだされ！天松院殿！！」

「そうだよ、敏春兄ー。ゆっきー困って」「誰のせいだ、誰の！！」
「俺納得いかなーい！」

「いい覚悟だ！テメエ表出ろ！表エ！！」

「助けて、ゆっきー！」

「亜鬼十、テメエ！」

「落ち着いてくだされ、天松院殿。某の未熟さ故の結果でござい
ます！」

「真田殿！コイツを庇うことなどありませんから！」

「いや、庇うとかでは「ゆっきー大好きー！」って、亜鬼十殿！？」

突然抱きついてきた亜鬼十に驚く幸村だが、抱きついた本人は構う
ことなくスリスリと頬ずりしてくる。

「怪我人に抱きつくなー！」

「やーだー！ゆっきー！」

「変な懐き方してんじえねえよ、ゴラァー！！」

「は、破廉恥でござらああああああー！！」

「賑やかだね、旦那達？」

スタッと天井から降りてきたのは、真田忍隊の長『猿飛佐助』だった。

「佐助！？」

「・・・何？姫の旦那ってそっちの趣味？？」

「そっちつてどっち？さっちゃん？？」

「さっちゃんはやめようねー？」

「いーやーだー」

「・・・衆道趣味。」

「さっちゃんが？」

「アンタがだよ、姫の旦那。」

「あははゝ そんな趣味ない！」

「だったら離れろ、亜鬼十！」

「ありや？！」

すきをつかれた亜鬼十は簡単に幸村から引き剥がされた。不機嫌そうにほつぺたを膨らまして、敏春を睨んだ。が、知らんぷりされてしまった。

「そういえば、真田殿はあの独眼竜と好敵手であられるそうぞ。」

「……。」

「うむ！政宗殿は某の好敵手！天下分け目の戦にて合間見たい人物でござる――！」

「天松院の大将、それがどうかしたの？」

「いや。この国のご近所さんだからな。しかもかなり戦力もあるし、少し心配でな。」

「ですが、亜鬼十殿がおられる！心強いでござりましょう！」

「まあ、そりゃそうんだけど、ね。」

「心配ないよ、敏春兄。俺、誰が相手でも負けないから。この国の平和を乱そうならば、その者には極刑を下す。……生き延びようとも、恐怖を植え付け生き地獄を味あわせてやる。絶対にッ。」

「あ、亜鬼十……殿……。」

「フツッ！俺にとってこの国は誇りだ。そして、この国を治める敏春兄は他の誰よりも俺の主君だ！」

「亜鬼十。」

「安曇さんもそうでしょ？」

「はい、亜鬼十様。」

気配もなく後ろに待機していた安曇が答える。

実は佐助と同時に下りてきてたりする。

「敏春殿は本当に良き部下をお持ちでござる。某もお館さまのご上洛のため今まで以上の精進を「それなんだけど、ゆつきー？」・・・」

「ゆつきーってどんな精進してるの？」

「某か？4時から始め、8時まで「ゆつきー、それやり過ぎですよ。」「そのようなことはござらん！これでもまだまだでござる！！」

「いやいや、やりすぎだから。それじゃあ、ダメだよ。やれば良いってもんじゃないでしょ？そういうのって。」

「う、うむ……。だが、どうすれば……。？」

「まずは、休め。」

「……。は？」

「休め。じっくり、三日は槍を持つな。」

「そ、それは無理でござる！！いつ敵が攻めてくるか分かんてござるうー！！」

「武田軍に攻撃しようなんてそう滅多にいないでしょ？それに、玄さんとは話をつけました。しばらくは、ここにお泊りでーす。」

「ここにでござるか！？」

「そうなのー！だから、一緒に枕投げしよ」

「って、姫の旦那……。それが目的だったりする？」

「半分。」

「半分も！？」

「亜鬼十様！自重！！」

「えー！！」

「えー！じゃありません！！いつまでも子供のようなことばかり！！」

「俺の個性だよ。」

「直してください!」

「・・・追々と。」

「・・・はあ・・・。」

「苦労してるね、アンタも?」

「貴方もね。」

忍同士分かるものがあつたようだ。

そんなに仲良くなったら、敏春兄の嫉妬爆発じゃない? 安曇さん??

なんて、口に出すほど馬鹿じゃないから黙ってますけどね。

「さーとッ! そろそろかなあ・・・?」

「？」

亜鬼十は立ち上がり外に目をやった。その行動の意味が分からない敏春たちはただ首を傾げるばかりである。そんな中、亜鬼十の表情は真剣なものだった。

そこに、一人分の足音が近づいてきた。それも、随分を慌てた感じだ。

「報告いたします！大変です！！」

「！？どうした！」

「お、おお奥州の、独眼竜、が！」

「来たみたいだね。」

「は、はい！」

「今何処にいますか？」

「門前にて！鬼姫を出せと！」

「・・・やっぱり俺か・・・。」

「やっぱりとは？」

「ここに来る前に、彼とはちょっとね・・・。」

「亜鬼十、どうする？」

「会つよ。ゴタゴタさせられないから。」

「俺も行くぞ。」

「俺個人の問題だよ？それとも、何々？安曇さんがいるからかつこつけてるんですか？」

「違えよ！！ただ・・・、お前は俺の部下だ！城主の俺が行くのは当然だろう？」

「・・・安曇さん、ここで待機。」

「御意！」

「ゆつきー！ちゃんと休んどくんだよー？」

「あ、亜鬼十殿！」

じゃ！と、敏春に続き部屋を出て行った。

「某も！」

「いけません！！！」

「何故でござるか！」

「主はゆっくりしろとおっしゃりました。主の言葉は絶対です！」

「あらあら、こりゃまた、忍の鏡だね。」

「それに、これはこの国の、少なくとも亜鬼十様個人の問題にございます。他者が関わる必要はございません。」

「そ、それは・・・、そうなのだが・・・。」

「・・・。亜鬼十様は、徒に人を殺めたりはしません。独眼竜と合間見えようと、そこは弁えるでしょう。特に、あなたの好敵手であるのなら。」

「？」

「ねえ、何で旦那の好敵手は特になの？」

「亜鬼十様は、真田様の事を気に入っておられますから。」

「確かに・・・、あれは、ね・・・。」

一方、亜鬼十たちは城門に行き、伊達軍と対峙していた。

「やっぱりアンタか・・・、アキト・・・。」

「久しぶりです。独眼竜。」

嵐の前の静けさは刻一刻と崩れていこうとしていた。

10 奥州、因縁

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 《

*

* 10 * 奥州、因縁

*

亜鬼十がこの国に来る前の事は、敏春と安曇だけが知っている事だった。

話すつもりも無かったが、そうもいかなかったあの時ならば仕方の無いことだった。

が、その内容はあまりにも重く、あまりにも酷いものだった。

「伊達政宗殿。」

亜鬼十を庇うように前に出たのは敏春だった。

「？誰だ、アンタ？？」

「某はこの城主 天松院敏春。突然の訪問について、理由をお聞きしたいのだが。」

「s o r r y・俺達も急いでいてな。探しモンがあっただよ。」

「。。。。」

「探したぜ、亜鬼十。」

「そんなに俺に会いたかった？俺モテモテですね。」

そんな軽口を叩きながらも、内心穏やかではなかった。
その表情もいつもの笑顔が消え、無表情だ。

「ああ、そうだな。会いたくて仕方なかったぜ。んでもって、この
手でテメエを斬りたくてウズウズしてんだ！」

「！お待ちください、独眼竜！！亜鬼十は某の家臣である。勝手な
ことをされても困る！」

「どけ。そいつを庇った所で良い事なんてねえぞ？You See
？」

「主が自分の家臣を庇うことはおかしいと申すか？」

「Ha！Happyな野郎だぜ。アンタ、そんなんじゃ一国の主は
務まらねえよ。そんな甘い考え、捨てるこつたな！」

「甘いだと！」

「それか、その座を捨てる。今のアンタに一国の主は無理だ。」

容赦なく突き刺さる政宗の言葉に、何の反論も出来なかった。

分かっている。

自分の言葉がどんなに甘く、綺麗事であるのか。
今更だ。

今更ながらも、今の自分が情けない。

敏春は悔しさに、グッと拳を握り締めた。

「……ま……れ……。」

背後からかすかに聞こえて声。それは、政宗や小十郎にも聞こえた。何だ？と聞き返そうとした瞬間、何かが爆発した。

「黙れ、独眼竜ッ！」

凄みのある鋭い視線が向けられた。

同時に感じる殺気は、幾多もの戦場を駆けた武将であろうとも、嫌な汗をかいてしまうほどだった。

「俺のことなら、何を言おうが黙って聞き流してやるがな。だが、主君への侮辱は許さぬッ！それ以上続けようものなら、この場で貴様の首を刎ねてやろうッ！」

その言葉にハッタリなどなかった。亜鬼十の瞳は、確かに実行する
と感じられる、強い怒りに満ちていた。

その怒りこそ、亜鬼十の敏春への忠誠心の強さを示していた。

が、逆にそれは起爆剤になってしまった。

我に返った伊達の兵達が、怒りの声を上げてきたのだ。

それに、政宗は背中を押されるように、元の勢いを取り戻した。

「俺の首を刎ねる？・・・H a！」

政宗を刀を一本鞘から抜き、亜鬼十に刃を向けた。

「やれるもんならやってみろ。」

「……死んでも恨むなよ……？」

「デメエがな。」

「……つたく。……亜鬼十才……。」

「？……、……ッ！？」

ゴンッ！！

鈍い音が響くと同時に、亜鬼十の体は地面に倒れこむ。そして、更に地面に叩き伏せられた。

その光景に伊達側も、何事かと隠れて見ていた兵達も目を見開いて驚いた。

「な……と……とし……にい……ッ！」

「悪いな、政宗殿。誤って部下を強く叩いてしまった。戦闘不能ってことでどうです？ 変わりに俺が相手するってのは？」

「!？」

「おい、敏春兄ィッ!!」

「聞こえねえ！」

「グハッ！」

顔を上げられないように、亜鬼十の頭に足を乗せる敏春。

何だ、こいつら？

誰もがそう思う中で、知らずにか敏春は話を続けた。

「俺は確かに甘い。この戦国乱世でこんな考えなんて自殺行為も良いとこだ。だが、それがどうした？ 争いをなくす為に戦う貴殿らと

同じ！俺は俺の方法と考虑で、この争いの世を無くしたい！」

「それが俺の信念だ！！」

そう宣言すると、後にあつたのは沈黙だった。

（こいつは馬鹿なのか？）

だが、この言葉に、この覇気に、この目に、偽りは感じられない。
これが、この小さな国の主 天松院 敏春という男なのだろう。

「オモシレー……。」

そう言ったのは政宗。

馬から飛び降り、敏春の前に着地する。

そして、亜鬼十に向けていたその刃を、今度は敏春に向けた。

「デメエがそいつの主ってんなら、部下の尻拭いぐらいしてみせろ。」

「・・・ああ。」

（・・・何だよ、それ・・・？）

納得できない。

それこそ、納得できないって！

亜鬼十はクラクラする頭で、何とか意識を保っていた。

あの重い拳を二発喰らい、更に足で踏みつけられたのは、流石に亜鬼十もそれなりのダメージを受けてしまった。

体は動かせる、はず。

だが、起き上がれるだろうか？

立てるだろうか？

その後は、動ける、か？

その後は・・・。

その後は・・・、どう・・・だ・・・？

『護れるのか？』

11 奥州、そして小国の王

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語》

*

11 奥州、そして小国の王

*

場所は道場近くの広間。

訓練場として作らせた場所だ。

これを作ろうと言い出したのは亜鬼十だ。

南蛮にいた頃の訓練を、新兵達にさせている亜鬼十に、この広間は必要な場所だった。

そんな場所に二人の男が立つ。

一人はこの城の主。

一人は竜の名をもつ男。

独眼竜 伊達 政宗。

彼の後ろの方には、小十郎をはじめ、伊達軍の兵達が騒いでいる。

「悪いな。道場の方は今使えないから、外になるけどいいかな？」

「No Problem」。

「?・・・えつと・・・??」

「構わねえって言ったんだ。」

「そうか！南蛮の言葉はさっぱりだ。でも、もし貴殿たちとこうしたイザコザがなかったら、亜鬼十の友達になってたのかもなあ。」

「An?」

「・・・いいや、独り言だ。さあ、始めようか。」

「・・・刀は？」

「いらん。俺は素手で戦うのが流儀だ。容赦はいらん。俺は本気で相手することにしたからな。」

「そうかい。上等ッ!！」

政宗は刀を六本一気に抜いた。六爪流。つまり、政宗も本気で敏春を相手にするということだ。

竜の右目 片倉 小十郎は、何も言わず主の背を、そしてその先の戦いを見届けようと、その視線を二人に向けた。

「ホント、何でなんだろうねえ・・・。」

そんな呟きは、誰にも届かず、ただ走る。

二人の男が駆け出した。

（く、くそ・・・ッ！）

敏春のヤロー・・・！

滅多につくことのない悪態をつきながら、亜鬼十は立ち上がろうと

足に力を入れる。だが、途中で視界が揺らぎ倒れてしまう。これで三回目だ。

「思いっきり、殴りやがって・・・ッ！」

口調も素になっている。

それも周りに誰もいないからだ。隠れてた連中は敏春と政宗の決闘を見に行き、亜鬼十はそのまま放置されていた。

（しかも、これを機会に通りすがりに誰かが蹴りいれて行きやがったッ！）

「やべっ・・・！スッゲーイライラする。爆発しそうなんですけど・・・間違つて誰か殺しそうだな、俺・・・。」

「物騒じゃのう、鬼姫殿？」

「!?!?!? 信玄、公……ッ!」

いつから……!?!?

「それが本当のお主か。」

「……本当、もなにもないね。おどけてる俺も、こうしてキレてる俺も、俺でしかないですよ。」

「うむ。して、お主はどうしたい?」

「……とりあえず、敏、いや主君の下へ行き、止める。」

「その体で止められると思うておるのか?」

その言葉は、決して相手を馬鹿にしているものではなかった。現実を見る、と警告しているような言葉。

確かにそうだ、と亜鬼十も思う。信玄に言われる前から、立ち上るうと試みた時から、自分自身それを考えていた。が、答えは見つからなかった。

「とにかく、行く。敏春兄は、関係ないんだ。俺が、俺が逃げたから・・・その結果だから・・・、自分の事は自分でできる・・・ッ。」

「・・・お主に出来ることは、何じゃ？」

「何って・・・。」

「己の主とあの独眼竜の決闘を止める為に、お主にできる事は何かと聞いておる。」

止める方法・・・。

そうだ、一番肝心なことを考えていなかった。ただ、敏春兄の下へ行き、戦いを止めようと考えたが、その方法まで考えていなかった。馬鹿だ、俺は・・・。

「でも、とめなくては……。敏春兄は、あの人は俺の……。家族だから……。ッ。傷つけないし、失いたくないんだ……。」

『護れるのか?』と、自分に問うた。

愚問だった。

護れるとか、護れないとかじゃない。

「俺は護りたいんだ。その為に、俺は逃げない。あの時みたいに逃

げずに、独眼竜と話をする！」

「そうか！それでは急ぐぞ！！」

信玄は何処か満足げに笑って、亜鬼十を横抱きにし広間へと急いだのだった。

さすが、としか言いようのない状況が、そこにあつた。浅いながらもいくつかの切り傷を負い、息を乱す敏春。だが、決して目の前の相手から目を話さなかった。

もし、ココで少しでも目を離したら、自分は意識を失ってしまうかもしれない。

そうなれば、この男は亜鬼十に刃を向けるかもしれない。

身動きの出来ない亜鬼十にそんな事をするかは分からない。
だが、しないとも言いきれない。

敏春は再び立ち上がり呼吸を整える。

「まだやる気か？」

構え直す敏春に政宗は問う。

それに対し、余裕がないながらも口元に笑みを浮かべてみせた。

「負けず嫌いなんだよ。」

「ほう。だがな、アンタにはさっさと倒れてもらっぜ。命はとらねえから安心しな。」

「俺は、だろ？ 亜鬼十は殺すつもりじゃないんですか？」

「・・・まあな。」

「この国にアイツは必要だ。アイツの過去なんて関係ない！ アイツは、黒土亜鬼十は某の家臣に変わりはない。頼む。アイツを殺さないでくれ！」

「無理な話だな。」

政宗は敏春の言葉を切り捨てるように、その刃を高く振り上げた。

赤が舞う。

刃を追うように飛ぶ。

別の紅が視界の端に見える。

その手にある者が大きく見開いているのが、意識の途切れる寸前に見えた。

12 鬼姫、そして竜

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 》

*

* 1 2 * 鬼姫、そして竜

*

刀は容赦なく敏春を傷つけた。

その光景に、亜鬼十は目を見開いた。

来るのが遅かった。

あの時のように、また自分に無力さを感じる。

護れなかった。

自分のせいで傷ついた。

護りたかったのに・・・ッ。

政宗が亜鬼十たちに気づいた。

が、すぐに亜鬼十を斬ろうとしなかった。
隣にいる信玄の目がそれを止めた。

その中で、亜鬼十はゆっくりと、ふらつく足で敏春に歩み寄る。

「敏春兄・・・。こんなところで、寝てたら風引くよ？・・・なあ・・・、起きろよ・・・。」

傍に座り、敏春に視線を落とす。
が、その目に地面に広がる紅を映し、言葉を止める。

「独眼竜、何で斬った？」

「あ？」

「何故斬った？何故俺ではなく敏春兄なのかな？」

「・・・このぐれーしねえと邪魔してくるだろ。」

「そう・・・。そうだね・・・。」

短く答えると、敏春を抱えて木にもたれさせ座らせた。
腰に巻きつけていた水色の布で止血し、自分の上着を敏春の体にかける。

そして、言葉が続く。

「敏春兄はそういう人だよ。どんな最低な人間でも、死んで欲しくなくて助けるような人だ。一揆の時だって、なんだかんだ言っても殺しなんかしたくなくて、だから刀を嫌っているような人だ。だからと言って、俺や安曇さん、他の兵達にそういうこと任せていることに罪悪感なんか感じてる。確かにこれが主じゃ、この戦国乱世でどうにもなんないかもしれない。」

それでも、俺達はこの人についていくことを決めた。
優しいから、なんて理由じゃない。

この人を主と認めただ。

みんな、それぞれの理由で選んだ。

「俺はどっちかっていうと、平和主義者なんかじゃない。この人の言葉を綺麗事だっと思って思うこともよくある。だって俺、現実主義者だからさ。いろんな人間がいる中で、誰でもみんなが仲良くなれるわけない。」

そんな俺だから。

だから・・・。

「この人が必要だった。この人のように夢を見たかった。夢の見方を知れたかった。でも・・・、それは無理そうだな。」

「おい。何の話だ？」

「もう和解の道は絶たれたって事だよ。」

静かにはっきりと吐き出された言葉は、合図となった。

政宗と小十郎の後ろに待機していた兵達の悲鳴が上がったのだ。二人はすぐさま振り向く。

と、そこには氷付けになった兵達がいた。

「じ、これは・・・!？」

「・・・テメエの仕業か？」

「そうだけど、何？」

「テメエ、また「またって？俺がアンタとこの兵を攻撃したのはこれが初めてなんだけど？」

「ざけんな！一年前、テメエは罪もねえ農民と一緒に、俺の部下達を殺しただろ！！」

「？え？？まさか、そんなことになってたの？」

「・・・は、何言ってやがる。」

「俺は農民も、アンタの部下達もこの手にかけたことなんかない。」

「今更そんな嘘ついてんじゃねえ！」

「じゃあ聞くけど。君達は俺が殺したとこ見たのか？」

「！」「！」「！」

殺している光景を、俺たちは見たか・・・。

見たのか？

俺達が見たのは、血まみれで死んでいる奴らの真ん中で、一人立ち
尽くしていた亜鬼十の姿。
見た事のない出で立ちに、無表情の顔。

『すまない。』

感情の読み取れない声で紡がれた言葉。

「俺がどうしてすまないと云ったのか。それは、俺のせいで起きてしまったから。俺が護れなかったから。だから謝罪をした。それだけのことだった。でも、君達はそんな勘違いをしていたんだね？・・・どうりでしつこいと思ったよ。」

「俺達の勘違いだと？じゃあ、何処のどいつがやったってんだ！」

「・・・言わなかったかな？俺、もう和解する気は更々ないんだ。どんな理由でも、原因が自分にあるうとも関係ない。主を傷つけた理由はそれで十分だ。」

長い袖からスルリと姿を見せたのは一本の刀の刃。
ゆっくりと腕を持ち上げ、その刃を政宗に向ける。

「リアリストらしく、俺はあんたらを一掃させてもらうよ。」

その瞬間、政宗たちの目の前には大きな壁が現れた。
が、それが壁ではなく人だと気づいた時、その人物は目の前の相手に話しかけた。

「やめぬか、亜鬼十よ。」

「無理です。伊達軍は主を傷つけた。敵です。敵と友達になるほど俺能天気な人間じゃないんで。」

お互いに交えた武器をガチガチと鳴らす。

「御主の過ちが引き起こしたこの事態を、どう思っておるのだ？」

「関係ない。俺に原因があっても関係ない。敏春兄を傷つけた。理由はそれだけで良い。」

「今の御主は、ただ怒りにかられる獣よ。そこに忠義などありえぬ！」

「忠義？・・・そんなもの、最初からないよ。」

「何ッ・・・！」

「俺にとって敏春兄は、家族だった。城主とか、主君とか、そんなものどうでもいい。ただ、俺は家族を傷つけたことが許せない。」

信玄が押されている。

あり得ないと思ったが、しかし、目の前の光景はまさにそれだった。あの細腕の何処にあんな力があるのか。信玄の体はゆっくり後ろに押されていく。

「それより、玄さん退いてください。友達を傷つけるのは嫌なんです。それにゆっきーやさっちゃんに嫌われたくないから。」

「ならば、刀を納めよ。そして、あの氷から兵たちを解放してあげるのだ。」

「……。」

「……あ、き……ッ。」

「……え？」

後ろから聞こえる弱りきった声は、亜鬼十を止めた。亜鬼十は一旦距離をとって、振り向いた。

「亜鬼十……、やめ……お……ッ！」

「敏春兄。でも、あいつらこの国に攻めてくるよ？きつと、ここで逃がせば後悔する。せつかくここまで築いたのに、壊れるよ？」

「……亜鬼十……、こっち……来い……。」

ふらつきながら何とか立っている敏春に、亜鬼十は急いで駆け寄った。が、亜鬼十は地面に叩き伏せられた。右頬を赤くし目を見開く亜鬼十に、敏春は痛む傷にお構いなく、亜鬼十の胸倉を掴んだ。

「亜鬼十、テメエは誰の家臣だ？」

「！・・・敏春兄・・・だよ・・・。」

「俺は伊達軍を攻撃しろと言ったか？」

「・・・。」

「答えろ！亜鬼十オ！！」

「・・・言っていない・・・。」

「じゃあ、何だ？コレは・・・。テメエは俺の家臣だろ！主君の命令無く他国の大將と、ましてや同盟相手の大將に刃を向けるんじゃないやねえ！！」

「！」

「頼んでもねえのに、俺を理由にするな！そんなモン、ただの自己

満足だ！」

「……、ごめん……っ。」

「……。」

敏春は乱暴に胸倉をはなした。その場に座り込んだ亜鬼十に、自分
にかけられた上着を被せ、政宗たちの方を向き歩み寄る。すると、
その場に座り込み頭を下げた。

「申し訳ございませんでした。家臣の無礼をお許しください。」

「……ッ！」

亜鬼十は息を飲んだ。

また、自分のせいで、自分のやったことで迷惑をかけてしまった。
申し訳ない気持ちと情けない気持ちに視界がぼやけ、俯くしか
なかった。

13 鬼姫、失態

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 《

＊ ＊
＊ 1 3 ＊
＊ 鬼姫、失態

奥州の伊達軍は一時撤退した。

敏春は傷の治療の為、安曇の看病の許自室にいる。

「・・・俺に、何が出来んだ・・・？」

敏春の言うとおりだ。

敏春を理由にして、俺は独眼竜を斬ろうとした。

そして、信玄公にまで刃を向けた。

今更後悔しても遅いし、信玄公も笑って許してくれた。

が、そんなもので許されることではない。

「俺は、ここにいて・・・いいのか・・・?」

また傷つけてしまうのではないだろうか?

また、あのように、主に頭を下げさせてしまうのではないだろうか?

「なーんて・・・！らしくないって、俺。」

こんなことで責任感じる自分じゃなかったはずだ。
だから、今まで自分のしたい事をしてきた。
やりたいように、やってきたんだ。
それを今更、どう変えるってんだよ。

感情移入か？

馬鹿か、俺は。

それに、家族だと？

家族を知らない俺にそんなものが認識できるというのか？

愚問だな。

出来るわけがないだろ。

そうだ、俺と敏春は主従関係。

『敏春兄』なんて呼んで良いわけけないだろ。

「実践離れして平和ボケしたか、俺は……。情けない！」

奴はあくまでクライアント。

俺は軍人。

傭兵。

クライアントとの契約を果たすだけの存在。

そこに家族といったようなものはいらない。

不要だ。

『家族』など・・・、邪魔でしかない・・・。

伊達軍が去って数刻過ぎた頃、信玄は幸村を連れ敏春の自室へと来た。
敏春のこと、すぐに起き上がろうとしたのは言うまでもないだろう。

信玄はそのままが良いというが、それも聞かず安曇に支えてもらう。

「いえ、この程度の傷、何でもございません。信玄公。」

「ならば良いが、無茶はするでないぞ。」

「ご心配お掛けしてすみませぬ。本当にたいした傷ではございません。独眼竜は最初から俺を見ておられませんでしたから。」

「・・・亜鬼十か。」

「はい。」

「敏春殿、お館さまからお聞きしましたが、何故独眼竜は亜鬼十殿を憎んでおられるのですか？」

「・・・その場にいたわけではないので、詳しい話は分かりません。ですが、奴から聞いた話では、これは奴が逃げた結果だそうです。」

「逃げ・・・ッ！？あの、亜鬼十殿が？」

亜鬼十の強さを身を持って知る幸村は、その言葉に驚いた。
亜鬼十に限って逃げるなんて事があるのだろうか？

正直な話、亜鬼十の強さは本物であり、独眼竜をも凌ぐ強さだ。

それが何故、逃げるなど・・・。

「亜鬼十が最初に来たのは奥州にある小さな村だったそうです。南蛮にいたアイツはコチラの生活が良く分からず、その村の農民達にお世話になっていました。その代わり、亜鬼十はその村の用心棒として暮らし始め、それなりに不便もなく生活していたようです、が。そんなある日。とある男が自分を訪ねてきたそうです。」

「とある男？」

「誰かは俺も知りません。本人が教えてくれませんでしたから。ただ、その男は冷酷にして非道。吐き気のするような悪だとか。」

「ふむ・・・。」

「その男は、亜鬼十を自分の仲間にしようと誘ってきました。当然亜鬼十は断りました。すると、男は農民たちを人質にとり、脅し始

めました。それでも、農民は自分が救うといって断り、その後最悪な結末を迎えてしまった。」

『護れなかった……。』

「亜鬼十にとって、農民たちは自分の主であり、家族でした。それを尽く奪われ、絶望しました。」

『おい、そのアンタ！・・・何してやがる・・・？』

『・・・、・・・すまない。』

「コレが独眼竜との出会いです。」

沈黙。

誰も何も言えない。

何を言うべきか、と誰もが思うところだ。
しかし、単純に幸村は言葉を吐き出す。

「その話だと、亜鬼十殿は政宗殿の勘違いで憎まれているということではないか？」

「まったくその通りだ。ココで亜鬼十が違うと言えはよかったのか

もしれない。もしかした状況が変わってたかも知れないだからな。
でも、あの時の亜鬼十は護れなかったことに対して強い責任を感じ、
そのまま死んでしまおうと思ったとかで、殺されることを選んだ。」

でも、結局出来なかったようですけどね。

「奴は抹殺される前に、脱出し姿を暗まし、そしてあの一揆で俺と
会いました。」

「そして、今があるのだな。」

「はい。・・・信玄公、亜鬼十の無礼、お許してください!」

「そのことじゃが、わしは元より気にしておらんぞ。」

「・・・ありがとうございます。」

敏春は忝いとばかりに頭を下げた。が、それに信玄は少し表情を陰しくさせた。

「敏春殿よ。貴殿のそれは癖であるか？」

「はい？」

「貴殿は必ず頭を下げるのう。幸村にも頭を下げて謝ったそうじゃな？」

「・・・は、はい・・・。元家臣故か、板についてしまったようで・・・。」

「なるほど。しかし、一国の主として感心できぬ。」

「！」

「貴殿はもう家臣ではない！民、そして家臣を持つ一国の主であるぞ。そう簡単に頭を下げてはならぬ。」

突然言われて言葉に目を見開くが、すぐに敏春は反論した。

「お言葉ですが、家臣の無礼は主にも責任がございます。」

「一理ある。しかし、その考えが逆に家臣を追い詰めておるやも知れぬ。」

「？」

「貴殿だからこそその気遣いであろう。前の城主の悪評は聞いておる。貴殿の行動は、家臣であった己の経験からなるもの。じゃが、鬼姫と貴殿は違う！」

「！？」

「貴殿が前の城主と違うように、鬼姫も違うのだ。強く尊敬する者が、己の大切な主が、自らの過ちのせいでその者に頭を下げさせてしまったら、どのような思いであろうな？」

「……。」

「知り合ってまだ短いが、亜鬼十は貴殿を尊敬しておる。主としても、そしてそれ以上に家族としてじゃ。」

「……っ。……俺は、まだまだ未熟であります。そのようなこ

とも分らないとは……。」「

敏春は思い出していた。

彼が亜鬼十に何と言ったのか。

一揆で共闘する際に、仲間となった際に交わしたものは何か。

「こりゃあ、間違ってたのは俺の方だな……。」「

「そうでもないよ、敏春兄。」「

「!?!?」「

「亜鬼十、殿……。」「

亜鬼十は『軍服』を身に纏い現れた。

見たことも無い格好にも驚いたが、何より亜鬼十の表情に全員が目を見開いた。温かく感じる笑みを見せていた亜鬼十とは別人に、その瞳は冷たいものだった。

「亜鬼十・・・、戦にでも行く気か・・・？」

ほんの冗談交じりなことを言う敏春に、亜鬼十は苦笑する。

「失礼します。」

「・・・。」

すぐに先ほどの表情に戻し、部屋に入ると、敏春と向かい合うように、肩膝を上げて座った。
その行動に、敏春は見覚えがあった。

「先ほどの勝手な行動についてお詫び申し上げます。」

顔を俯かせたまま、こちらを見ない亜鬼十。ああ、そういえばあの時の亜鬼十はこんな奴だった。

その重い空気に全員が黙ったまま視線を向ける。

「それについちゃあ、もう良い。俺にも非があった。」

「いいえ。元々の原因はこの『私』にあります。君主に頭を下げさせるなどあつてはなりません。それについて、我が主に再び問います。」

「私、黒土亜鬼十はアナタに必要ですか？」

「!？」

「な、何を申しておるのだ！亜鬼十ど「待て、幸村！」・・・お、お館さま・・・?!」

「信玄公、先ほどは失礼致しました。」

「・・・うむ。」

「亜鬼十、その問いについてだが、何故そんな事を聞く？」

「今回の件は、軍人としてあるまじき失態。契約相手の意思に背く

ような行為にございました。私はそのような行為が、国を滅ぼすと知っております。誰も護ることなどできません。天松院 敏春殿、今一度お考え下さい。必要か、不要か。」

「・・・テメエ、それが契約破棄の本当の理由か？」

「・・・。」

「亜鬼十、テメエはいつもフワフワして何やってんだって言いたくなるようなことやってた。先日も人の仕事邪魔しに来やがったしよ。だが、お前は戦場において、右に出る者はいない。戦闘能力だけじゃねえ。その知略はあの毛利や豊臣のこの軍師以上だ。」

「そんなに褒められても照れるだけですよ。」

「だからこそだ。さっきの理由は納得いかねえ。俺にはテメエがこくなることを予め知っていたような気がするからな。」

「!？」

「・・・私は智将じゃない。買被りすぎです。」

「いや、テメエは立派な智将だ。しかも性質の悪い方だ。ガキが無駄に賢いところなるのかねえ。」

「頭の悪い大人よりは良いと思ってますけどねえ。」

「・・・おい、そりゃあ俺の事言ってるのか？」

「え!?! 違うんですか？」

「自然な感じに驚くなよ！否定ぐらいしろよ、否定！！」

「俺嘘だけはつけない。」

「そんな良い子でもねえくせに何言ってやがる。」

「・・・あー・・・、駄目だ。」と言いながら、亜鬼十はいつもの調子に表情を緩め、その場に胡坐をかいた。

「やっぱアンタとはこうピリッとした緊張感保って真面目な話できないな。」

「俺のせいにすんな。」

「だってアンタ、真面目な話とか似合わねえし。」

「テメエさつきから失礼だな！」

「それに・・・、やっぱ敵わねえよ。」

「！」

「いつから気づいてたんだよ？アంత。」

「最初っから、てわけじゃねえが。そうだな、わりと最近だな。地下でコソコソと何してんだよ？」

「・・・俺は、いついなくなっても分からない立居地だ。」

「まあな。」

「しかも、正直な話俺の代行なんかこの国にはいねえ。だから、この時の為に用意しといたんだよ。俺の代行戦力。」

スルリと袖から見せた手には、一つの小さな笛。それを吹き鳴らし、甲高い音を部屋に響かせた。

その瞬間である。

亜鬼十の背後に三人の子供現れた。

「名づけて、『鬼御子^{オニミコ}』ってとこだ。」

亜鬼十は自慢げに笑うだけだった。

14 鬼姫、出立

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 《

*

* 14 * 鬼姫、出立

*

三人の子供はただ、静かに言葉を紡いだ。

「お初にお目にかかります。『鬼御子』シンクにございます。」

「同じく、クロガネ。こっちがマシロ。彼女は口が利けない。よっ

て代弁させていただきました。」

「……（ペコリ）」

赤髪の少年『シンク』は、その幼い顔立ちに反して大人の雰囲気を持っていた。

『クロガネ』少年もまたどこか大人びてはいたが、生意気な子供のようにその言葉はどこかぶっきらぼうな感じだ。

『マシロ』は三人の中で一番年下のように、他の二人のような大人びた所は無く、可愛い少女だった。

「可愛い子鬼たちだろ？ 敏春兄。」

「……まさかとは思うが、こんな子供に武器を持たせろというのか？」

「まあ、アンタは気に入らないだろうね。こういつことはさ。」

「分かっていてやるか？悪趣味だな？」

「それほども　というか、勘違いしないでね？俺は強制した覚えはない。これはこの三人の意思だ。俺に止める権限なんて、あるわけないじゃん？」

「権限とかそういう問題ではない！俺は、こんな子供に武器持たせるような国にしたくないから、だから一揆を起こしたんだぞ。無駄にするつもりか？」

「んー・・・、やっぱ甘いねえ。」

「甘くて何が悪い？」

「何が？だって・・・？アンタの甘さは一見すれば優しさだ。いや、嘘ついてるとかじゃないよ？アンタは確かに優しいんだよ。人の命を簡単に奪う武器を嫌って、あえて体術を習得した。それは並大抵の覚悟じゃなかった。」

一揆の時、刀を振るって兵を殺す敏春の表情を、亜鬼十は今でも鮮明に覚えていた。

本当の平和守護者は、こんな時偽善者扱されるだろう。しかし、亜

鬼十は決してそうは思わなかった。

だからこそ、亜鬼十は敏春と契約した。

「でもさ、あんた一人がどうこうしたところで、変わらない事だつてある。出来ないこともある。そのために兵や家臣がいる。が、その兵や家臣の実力じゃあ、到底やっていけないだろう。俺が何も無く生きていたところで、長続きはしない。次の代で潰れるのは目に見えているよ。」

自覚しているからか、敏春は何も反論しなかった。ただ押し黙って、亜鬼十を睨んでいる。その様子に傍にいる安曇や信玄たちも息を呑んだ。

「願っただけじゃ、何も成せない。何か成し遂げたくば、行動せよ。一揆の時アンタが農民達に言った言葉だ。」

「ああ、確かにそうだな。だが、何故子供なんだ？しかも、まだ幼い子供だろ？？」

「彼らはいずれ立派な大人になる。子供のうちにしこんでおいた方がいいだろ？」

「お前のさっきの言い方は、実際敵が攻めてきたとき真っ先に突撃させるような物言いだったが？」

「猪突猛進、なんてさせない。無駄死になりかねない。それに、俺よりは弱いからな。だから、策を持って行動させる。」

「！」

「ただ、しこむだけじゃ駄目だ。道場で一番の武士でも、戦場を駆け巡った兵には勝てない。そこにある差は、まさに経験。踏んだ場数だ。」

「……。お前の事だ。仕込みもまた半端なもんじゃねえな？」

「フッフ！徹底的に指導させてもらった。そんじょそこらの兵達より強いよ。」

な、なんと！と幸村は驚きの声を上げる。

自分は彼らよりも幼い自分に鍛錬を始めていたが、その年で実践など無かった。いくら努力しようとも限度があるからだ。

そして、元服した後には初陣したのだ。

それに比べ、この三人は明らかに元服していない。

一体どんな鍛錬を組んできたのだろうか？

幸村は疑問に思いながら、亜鬼十に視線をうつした。

「この三人を残しておくからさ。安心してくれ」

「・・・で？お前はお前でケリつけに行くか？」

「まあね。あの時は取り乱しちまったけど、やっぱこのままじゃいけないでしょ？まずは竜ちゃんに会って話つけるよ。」

「・・・死ぬなよ?」

「難しいかもね。」

「命令だ。生きて帰って来い。」

「・・・ホント、どうしようもない人だね・・・。
Y e s , M y
l o r d .」

（生きて帰ってくるよ。）

（アンタとの、約束だ。）

鬼姫、主のもとを去り、過去
の地へ足をのばす。

15 鬼姫、そして奥州

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 》

*

* 15 * 鬼姫、そして奥州

*

翌日。

亜鬼十は奥州へと馬を走らせた。

しかし、あることに気づく。

青葉城へはどうやって入る？

独眼竜と会って、最初に何を話す？

確かに目的は、先日の謝罪と、あの時のケジメをつけることなのだが。

「さて、どうしたものか……。」

そうして立ち寄ったのは、小さな茶屋。
それなりにお客も入って賑やかな店だ。

三色団子を頬張りながら思考に耽っていた。

「すみません、お客さん。相席よろしいですか？」

店の娘さんがすまなそうに尋ねてきた。

亜鬼十は迷うことなく、「いいよ」と微笑んで見せれば、娘さんは嬉しそうに

笑って、後ろの男に席を勧めた。

「悪いねえ、兄さん！」

「いえいえ。」

髪を高い位置に括った、見るからに派手な男は、愛想の良い笑顔を見せた。

「かぶき者」というのが、この男の第一印象だ。

「旅でもしてんのかい？」

「いいえ。奥州に用があつてね。」

「俺はいろんなトコ流れ流れに旅してんだ！奥州も中々良いトコだぜ！」

「そうですね。本当に、いい所だ。」

「俺、前田慶次ってんだ！こっちは夢吉！」

「キキッ！」

「兄さんは？」

「黒土亜鬼十です。慶ちゃんと呼んでいいですか？俺は好きに呼んでもらって

いいですから。」

「良いぜ！そんじゃ、亜鬼十。一つ聞いても良いかい？」

「どうぞ。」

「アンタ、もしかしてあの鬼姫かい？」

「何でそう思うんです？」

「鬼姫ってやつも、『アキト』って名前らしいんだ。それに、姓を持ってる」

とは、それなりの身分がある奴だってことだ。」

「それが理由、ですか。まあ、正解ではあるんですけどね。」

「やっぱそうかい！で？何しにここに？アンタと独眼竜は犬猿の仲って噂だが

？」

「犬猿の仲、か。そうですね。仲が良いとは、お世辞でも言えない事です。」

なら、何でここに？と尋ねようと口を開いた瞬間。

店に一人の男が駆け込んできた。

「悪い。また頼むぜ、志乃さん。」

「全く、またかい？」

溜息混じりに笑う女店主。

突然入ってきた嵐に、亜鬼十と慶次の視線がその男に向いたまま首を傾ける。

どうやらいつもの光景のようだ。ほとんどのお客がその男を見て、いつもの事

だとも言つように、視線を外していく。

「て言つてもアンタ、もうこの店じゃバレるんじゃないのかい？」

「いやいや、そんな事言つてもよ。他の店は門前払いだぜ？あのヤクザ面のせ

いでよ。」

（あれ？ヤクザ？？）

何故か小十郎の顔が浮かんた。

しかし、この世の中ヤクザ面なんていくらでもいるだろう。先ほどまで二人の事を考えていたからだろうか？

（いや、そうだな。）

勝手に納得する亜鬼十。

「どっかい隠れ場所ねえか？」

「まったく・・・。」

「隠れ場所なら此処なんてどうです？」

「お！いいな、そこ・・・って、アンタ誰だよ？」

「よお、万里！」

「前田慶次！？クソッ、何でデメエが・・・。」

知り合い？と尋ねようとしたところで、外の方から走ってくる音が聞こえてき

た。

万里と言う青年は顔を引き攣らせ、亜鬼十の勧める隠れ場所に身を

隠した。

同時に、再び嵐はやってきた。

今度は一人ではなく数人の男達。

「万里は何処だ！」

ヤクザ面、なんて表現はかなり間違っていると思った。

（ありゃ、般若だろ・・・。）

正直そう思っていると、その鋭い目と目が合ってしまった。

（あ、驚いてる。）

「テメエは・・・ッ！」

「やあ、竜の右目。久しぶり。」

「何しに来やがった！それに、前田の風来坊も何でいやがる？」

「俺はたまたまな。」

「慶ちゃんとはさつき知り合って友達になっちゃいましたよ。」

「ほう。相変わらずの偽善面だな？」

「そっちも相変わらずのヤクザ面だね。」

「って、亜鬼十！？」

そのやりとりを目にした時、改めて確信した。

犬猿の仲。

確実に相手が怒る言葉を自然に口にする亜鬼十と、今にもキレそうな竜の右目

片倉小十郎に、横にいた慶次や隠れている万里はヒヤヒヤしながら様子を伺

っている。

だが、意外にも何も起こらなかった。

緊迫した空気は、小十郎の溜息が打ち消した。

「それで、何しに来た？」

「独眼竜と話がしたくてね。」

独眼竜という、この土地を治める主を示す名に、その場にいたお客達も視線を

亜鬼十に向けた。

この奥州を占める独眼竜と話など、普通の人間が出来るわけがない。だが、小十郎とのやり取りから、亜鬼十が一般人でないことがハッ

キリと分か

る。

一方小十郎、先日のこともあり、亜鬼十が報復にやってきた可能性を考え、刀

に触れる。

「こんな所で抜刀ですか？それは勧められないな。」

亜鬼十は席を立つと、お代を机に置く。

「おいしいお団子、ご馳走さまでした。さてと、会わせてくれますか？」

「お断りだ。先日の事を忘れたわけじゃねえだろ？」

「忘れてないよ。そのことも含めて謝罪に来たんだから。」

「……。」

「信用無いのは知ってたけど。どうしようかなあ……。」

うーん、と腕を組んで悩む素振りを見せる。

そして、ニッコリ笑って見せ、小十郎に告げる。

「分かった。勝手に独眼竜と会う事にするよ。」

「!？」

亜鬼十は言い終わると同時に駆け出す。

小十郎と部下達は、いきなり突っ走ってきた亜鬼十に驚きつつ、身構えた。

だが、亜鬼十の体は突然視界から消え、後ろへと抜けられた。

大胆にも、構える人間に近づいた瞬間、滑り込むように足の下をくぐり抜けた

のだ。

驚嘆の声が聞こえる茶屋を後に、亜鬼十は走る。

目に入る目的地、独眼竜のいるであろう城へ。

16 鬼姫、和解

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 》

*

* 16 * 鬼姫、和解

*

実に良い天気を迎えた奥州。
その奥州を統べる独眼竜は、天気とはまた正反対の曇った表情を浮かべていた。
目の前のみならず、部屋中に置かれた白い紙の山に頭を抱えていたのだ。

「Shit！何でこんなにありがんだ！？」

何でも何も、此处まで溜まったのは自業自得の事だった。

コツコツやっていけばこんなことにならなかったのだろうが、そんな性格ではない政宗が改める筈もなく、毎度の事こうして白い紙の山を相手に戦っていた。

「毎回嫌気がさしてくるぜ！」

「そうですね。俺も嫌ですよ。」

「だろう？・・・An？」

一体自分は誰と話をしているんだ？

そう思うと同時に振り返れば、そこには別の白色が座ってニコリと笑っていた。

「独眼竜、お久しぶり。大変そうだね？手伝おうか??」

「余計なお世話だ。それより、何で此处にいやがる！」

「貴方と話がしたくて来ました。」

「俺は何もねえ。」

「でも俺にはあるんです。ケジメはつけないとね。」

「・・・ケジメも何も、テメエは何もしてねえんだろ。」

「・・・そうだね・・・俺は、何も出来なかった。誰も護れなかった。貴方の大切な民を護れなかった。」

「・・・。」

「先日はすまない。」

「・・・いや、こつちも悪かった。アンタの主を斬っちまった。」

「原因は俺だ。俺が何も言わなかったから。」

「それでもねえ。勝手に思い込んで決めつけた俺達も俺達だった。」

それを最後に二人は黙り込んでしまった。

謝罪はした。

どうやら誤解だということも、亜鬼十が言うまでもなかったようだ。

さて、どうしたものか。

この沈黙の中、誰か口を出せる者がいるのだろうか？

小十郎さんがいたら良かったのだが、まだ城についていないだろう。

「他に何かあんのか？」

「……え、あ、いや……！何も……ッ！！」

「何慌ててんだよ？」

「何というか……、最近まで睨みあつてた仲でしょ？それがこう

もあつさりした感じに終わるって、違和感ありまくりです。」

「確かにな。」

「・・・ねえ、独眼竜！」

「？」

「友達になりましたっ！」

「・・・Ah-n？」

何言いやがるんだ、コイツというような目をされた。
だが、亜鬼十は本気でその台詞を放った。

「竜ちゃんと梵ちゃん、どっちが良いかな？」

「おい、その前に友達って何だよ？」

「friend-！」

「違エよ！そうじゃねえ！！」

「冗談ですって まあ、アレだよ。折角蟠りがなくなっただんし、ここは友達になりましようって流れです。」

「蟠りが無くなったら友達になるって流れもどうかと思うがな。」

「ダメかな？」

「・・・何で俺と友達になりてえんだ？」

「何で？友達になりたいと思ったから。それ以外に理由なんているの？」

「・・・そんなもんか？」

「そんなもんだよ。そうだ！俺、コジユさんと友達になりたいんだよ。」

「・・・小十郎の事か？」

「そうだよ！あ、コジユさんよりオトンの方が良いかなあ？」

「プッ！オ、オトンって何だよ。」

「だってアレはオトンでしょ。厳格そうなオトン！」

「くつくく・・・、やべっ・・・、腹イテエ・・・！」

「え？！何で何で？Bestでしょ！？」

「ああ、そうだな……。くくっ……。！」

「笑いすぎです！俺真剣に考えたんですよ？」

「真剣に、考え、ハハ……。ッ、オトンって……。ッ！」

ツボだったようだ。

（竜ちゃんの笑った顔初めて見たかも……。）

最近までのイザコザが嘘だったように笑い合う二人。

数分後、小十郎と万里が政宗の部屋に駆け込んで来るまで、『オト
ン』で笑っていたらしい。

あれから小十郎に揃って説教された。
やっぱりオトンだ、と呟くと、政宗は身震いしながら必死に笑いを
堪えていた。

間違ってもねえよな、と万里が納得すると、小十郎の矛先が万里に
も向き、三人揃って説教された。

終わった頃には足の痺れでその場に倒れこんでいた。

「足、痺れたー・・・。」

「俺でもあんなに説教受けたの初めてだぜ。」

「クソッ、オトンだぜ！アレはよー・・・！」

「止めろ、万里！・・・ま、また・・・くくッ。」

「どんだけツボだったんですか？」

「てか、俺の場合とばっちりだってーの！」

「そつえば、君は？」

共に説教を受けた彼の名前を、まだ知らない。
茶屋でも、ただ顔を合わせ、隠れ場所を勧めただけでしかない。

「俺は黒土亜鬼十といいます。」

「園原万里だ。茶屋ではサンキューな。」

「いえいえ。それじゃあ、バンちゃんって呼んで良いですか？」

「……………、好きにしろ。」

（何だろっ、その間。）

「で？亜鬼十、お前いつまでいるんだ？」

政宗の質問に、そういえばと考える。

いつまでいるのかまでは考えていなかった。

そもそも、こうあっさりと和解になるなど思いもしなかったことだ。

「そうだね……。明日には帰ろっかなあ、てとこですね。ゆっきーのこと玄さんに頼まれたし。」

「真田幸村か？」

「ああ、あの熱血純情野郎か。」

「そうそう。ゆっきー、お馬鹿さんだから馬鹿みたいな量の鍛錬し

て時間無駄にしてるから、俺が鍛錬に付き合うことになってたんだよね。」

「お前が真田のか？」

「ゆつきーはまだまだ発展途上だし、あの年の頃の俺よりは遥かに実力は上だしね。」

「・・・ん？お前、ちなみにいくつだよ？？」

「二十歳。」

「・・・は？」

政宗と万里は、何言っただと言いたそうな目を向けてきた。
そんな二人に亜鬼十は、もう一度「二十歳」と今度は笑顔で言った。

「「嘘だ！」」

「ひぐし？」

「お前が？俺より一つ上！？」

「俺正直同い年ぐれーに見てたぜ。」

「失礼だなあ。ホントに俺二十歳ですから。バンちゃんとはかく、竜ちゃんは年上だと思ってたよ。」

「なんつー童顔なんだよ。」

「もしかして、ゆっきーもそう思ってるのかなあ……。」

「真田だけじゃねえよ、絶対。」

シヨック！と言って落ち込む亜鬼十。

やはりどう見ても自分達より年上に見えない。

世界広しといえど、こつも童顔な顔と性格のマツチした人間はいないだろう。

「まあ、お前が女なら納得できるけどなあ。」

「確かに。」

「……。」

「？」

「俺女顔ですか？」

「ああ。」

「即答！？酷い！こんな色男に！！」

「自分で言ってんじゃないよ。」

「つか、お前そんなキャラなのか？」

よく分からん、と万里は立ち上がり部屋に戻るといつて出て行くとした。
だが、それを政宗に止められた。

「何だよ？」

「亜鬼十、今日は此処に泊まってけ。」

「え！？良いんですか？」

「Sure！万里、お前の部屋に連れてけ。」

「ああ？！何で俺の部屋なんだよ！！」

「バンちゃんの部屋かぁ。見てみたいです！」

「何だよ？！客間あんだろうが！」

「小十郎が納得するかよ。」

「。。。。」

「ごめんね、バンちゃん。」

嫌そうな顔をしながらも、「しゃーねーな」と言っ
て背を向ける。
亜鬼十はニコニコしながら万里の後を追った。

「Friend、か。。。。」

その言葉はあまりにも自分に縁のないものだった。

一人ぼっちではないのだが、昔から母に蔑ろにされ、時には殺されかけた事だってあった。

それでも自分がこうしていられたのは、きっと小十郎という右目のお陰なのだ。

しかし、そんな小十郎との間にあるのは、強い主従関係における絆。友との絆とは違う。

かといって、物足りないわけではない。

自分にはそれで十分だと思った。

思っていたのだ。

亜鬼十に友達になりましたよ、と言われた時、今までに感じたことのない気持ちがかみ上げてきた。

純粹に嬉しいと、思ったのだ。

この何も無い空虚な右目のせいで周りから阻まれて、嫌われてきた自分に友が出来るとは。

こつこつのも、悪くねえな。

政宗は優しい微笑みを浮かべ、再び白い紙の山と格闘を始めた。

16 鬼姫、和解（後書き）

反省してます・・・。

結構急展開気味、ですよね！。

和解早くね？みたいな。

まあ、これで通そう。

一応・・・。

17 鬼姫、御披露目

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語》

*

* 17 * 鬼姫、御披露目

*

奥州・伊達軍は、予想以上に賑やかな連中ばかりだった。

政宗と友達になって数刻すると、万里の部屋になだれ込むように兵達がやってきた。

どうみても兵ではなく、暴走族かチンピラ共に見えるんだが。

万里は不愉快そうな顔をしながら亜鬼十の横に座っていたが、何も言わない。

その変わり、その手に刀が一本握られていた。

「バンちゃん、それ流石に危ないよ。」

「バ、バンちゃん!？」

「あの万里さんに・・・っ!？」

「こいつぁ大物だぜ!!流石筆頭^{ダチ}の友だぜ!!」

「うっせーぞ!全員自害しやがれ!!」

「「「「「すんませんでした――――ッ!!!!!!!!」」」」」

全員が土下座して謝りはじめた。

おもしろいなあ、とクツクツ笑っている亜鬼十だが、万里に睨まれ連中同様に土下座する羽目になった。

「でも、好きにしろって言ったのバンちゃんだよね？」

「……。」

「そうなんスカ！？」

「騒ぐな！言ったがな、そのバンちゃんはどうかしろ。最低限ちやん付けは止める。」

「えー。可愛いのにー。」

「可愛いとか、ふざけんな。」

ヒュンツと一閃する刀。

空気を鋭い刃で切り裂く。

その様子を、瞬時に避けた亜鬼十が「危ない危ない」と軽口を叩きながら見ていた。

それにキレないわけがなく、万里は第二の攻撃を仕掛ける。だが、コレも紙一重に避けられた。

「本当に危ないんで、武器しましょようよ？」

「良いぜ。テメエが大人しくしてんならな！」

万里は手にする刀を振るった。

その鋭い斬撃から、かなりの強者である事が分かる。

そして、政宗や小十郎に敬語も使わない所からしても、万里はこの伊達軍の中でもかなり上の役職なのだろう。

だが、ただの兵でないのは亜鬼十も同様だった。

奥州程でない小国とはいえ、亜鬼十の実力は桁外れである。

「テメエ、斬られる！」

「嫌ですよ！俺そんな趣味ありませんから！！」

素早い攻撃を避ければ、障子は綺麗に切り落とされ、畳は挟られたような跡を作った。

掠っただけでもヤバイ事になることは、容易に予想できる。

一方、押し寄せるようにやってきていた兵達は、万里の強さを知っている為か、此処まで酷くなる前に安全な場所まで離れ、様子を見ている。

そうして、亜鬼十は避けると共に外へと飛び出る。

クルリと宙で回転し、庭に着地する亜鬼十。

だが休む暇も与えぬ万里の攻撃を、袖口から出した小刀で受け止める。

「テメエ、忍かよ？政宗からは武将って聞いてんだけどな。」

「武将か。正しく言えば、軍人ですけどね。幹部ランクのさ。」

「軍人だあ？んなもん、一緒だろうが！」

「いえいえ！やっぱり違いますよ！武将と忍の一石二鳥な感じが軍人ですからね」

「何シレッと自分は万能みたいな事言ってたんだよ！」

「万能なんかじゃありません。戦場のオールラウンダーです」

火花を散らせながら、二人は対話を続けた。

お互いに、相手に対して同じ疑問を持っていた。
そして、同じ解答へと辿り着いた。
間違いない。

お互いにそう確信した瞬間、同時に互いから距離を置いた。

「なあお前、何か秘密でも持ってたんだろう？」

「そりゃあ、人間だからねえ。」

「……。」

「・・・あはー」

「どっかの忍みてえな笑い方してんじゃねえよ。」

「異世界人。」

「それは君も、でしょ?」

園原 万里。

通称『死神』、『奥州の獣』と呼ばれる。

噂では、人間ではない姿になり、無数の刃を身に纏った化け物らしい。

だが、実際の万里は全くの人間である。

何処からどう見ても人型であり、刀を身にまとっていない。
それどころか、刀自体を身につけていないのだ。

だからだった。

この園原万里が、あの有名な死神であるとは気づかなかったのは。

しかし、鞘さえない部屋で、刀だけを手にしている万里を見て、亜
鬼十は何となく思った。

化け物という表現は、きつと間違っていないのかもしれないと。

「なるほど、ね。『デュララ！』及び成田作品は結構読ませてもらった。何だ、そういうタネなんだね。その刀、『罪歌』なわけだ？」

「なるほどな。アンタの世界じゃ、この世界と俺のいた世界は同じような存在ってわけだ。」

「みたいだ。もしかしたら、君にとってなら逆の位置にたつかもされない。」

「まあ、どうでも良いことだ。アンタが何なのか、何か企んでるのがなんてすぐに分かる。」

「『罪歌』ちゃんに乗っ取らせれば？出来るかなあ？」

「ああ？」

「『罪歌』ちゃんの洗脳は誰でもとはいかないってことだよ。」

「……。」

「図星？」

「・・・ケツ！んなもん、やってみねえとわかんねえぜ！！」

キラリと煌く罪歌を手に、赤く光らせた瞳に亜鬼十の姿を映す。

駆け出した。

切っ先は寸分の狂いもなく、真っ直ぐに亜鬼十の体を射抜かんと伸びるように近づいていく。

それでも、やはりこの攻撃はかわされるだろう。
そう確信する万里は、次の手を瞬時に考えた。

「・・・・・・・・・・っ。」

「・・・・・・・・・・は？」

あまりにも簡単だった。

容易に、スルリと、刃が貫かれた。

離れている兵達が息を呑んで驚いているのが分かった。

つまり、見間違いとかではない。

亜鬼十はわざと避けなかった。

あえてその刃をその身に貫かせたのだ。

当然痛みもある。

表情に苦にして、立っている。

動かない。

「デメエ……、何のつもりだよ……っ!」

「……フッフ……。愛してる、か……。告白されちゃいました。」

万里は大きく目を見開いた。

洗脳できない人間も存在する。

あの池袋最強のように。

全く恐怖を感じない人間は、いる。

「しかも、君の罪歌は変り種みたいだね。宿主だけを愛してるなんてさ。」

「・・・お前馬鹿か？洗脳できねえでも、あんたは死ぬぜ？」

「普通なら、ね。」

「!？」

何だ？

この変な感じは???

刀から、水が伝わるように、亜鬼十の血が赤い線を作る。
それはとっくの間に柄にまで達し、万里の手を染める。

（いや、おかしいだろ・・・ッ！？）

何故、血が伝わってくる？

微妙に傾いているかもしれないが、不自然すぎる血の量。
そして何より、その血は『脈打って』いた。
ぬるぬると、手にまとわりついていく。

やばい。

その瞬間、亜鬼十は刀を引き抜き、腕にまとわりつく血を地面に払い、亜鬼十との距離をとった。

亜鬼十は別段動く事もなく、ただ立って万里の行動を見ていた。

「君は罪歌という妖刀を持っている。その身に宿して、それだけで化け物と呼べるのかな？」

「何なんだよ、アンタ・・・ッ！」

「悪魔、かな。みんなにはそう呼ばれてたよ。」

「・・・みんな・・・？」

「やっぱり、周りと違う事が出来るって、恐怖なんだろうね。異端者には厳しいでしょ？みんなさ。」

「・・・まあな。」

「どうです？似た者同志、勝負してみませんか？」

「そうだな。興味深いのはマジだしな。」

万里の体に黒いオーラがまとわりつくと同時に、亜鬼十の体から白いオーラが見え始める。

お互いにオーラをぶつけ合い、その力が互角であることを理解した。

「黒司 亜鬼十、参ります。」

「園原 万里、斬り進むぜ。」

互いに手にした刃を構え、全力をぶつけた。

18 鬼姫、宴

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 《

*

* 18 * 鬼姫、宴
*

奥州・青葉城。

綺麗な三日月の昇る、静かな夜を迎えた。

が、その静寂は一瞬にして打ち破られる。

「カンパーーーーーイツ!!!!」

大きな広場に、無礼講のもと開かれた宴。

亜鬼十への侘びも兼ねた、歓迎会らしいのだが。

その主役はなぜかボロボロである。

苦笑しながら、もう一人の方を見ると、不機嫌そうな顔をして酒を飲んでいる。

昼間。

万里と本気で一騎打ち、するつもりだったのだ。

『てめえら、何やってやがんだ!』

マジで効いたんですけど。

おかげで今でも笑顔がぎこちない。

（痛い・・・。）

「Oh、男前なFaceじゃねえか？」

「あはは、そりやどうも・・・。」

「チッ！」

「バンちゃんの方が男前ですよ。」

「テメエ、喧嘩売ってんのか？」

「もう何でもかんでもそう思うのはどうかと思いますよ、バンちゃん。」

「まったく。お前、女なんだから顔に傷つけんな。You see？」

「そうそう。性格はともあれ、顔に傷はやめときましょ？」

「・・・おい。俺が女って信じるのかよ？」

「違うんですか？」

「……。」

「なあ、いつから気づいてたんだ？」

「会った時からなんとなく。」

「……マジかよ。」

「確信したのは、『罪歌』ちゃんに告白された時だけだね。」

「そうだ。それだけだな、お前傷大丈夫なのか？」

「もう治ってますよ。そういう体質なんでね。」

「……異世界人つてのはみんなそうなのか？」

「さあ。一概にそうだとは言えないでしょうね。バンちゃんは どう思います？。」

「……どうでもいい……。関係ねえ。」

素っ気無く返された。

万里は不満そうな顔しかしていなかった。

途中で決闘を強制終了されたことが気にいらなかった。
実際、亜鬼十もそれについては不満を感じていた。

しかも、殴られた。

「やっぱスッキリしねえ！亜鬼十！表出ろやツー！！」

「！？万里、やめねえか！テメエが本気出したら後始末どうすんだ
！！」

「硬い事言つなよ、小十郎！俺、スッキリしねえ！マジで、モヤモ
ヤしたままは「恋か？」「違えよ！ボケ！！」

「ていうか、慶ちゃんいたの？」

「！ひ、酷くね・・・？」

「だって、全然喋ってないから。存在認識されてないよ？」

「いたから！俺最初からいたからな！」

「うつせー、空気！」

グサリと言葉が刺さり、慶次は落ち込んでしまった。

亜鬼十は夢吉と一緒にナデナデと頭を撫で、ニコニコ笑っている。

「バンちゃん、それ酷いよ。」

「知るかよ！つーか、テメエだって十分酷エ事言っただぞ！！」

「確かに。」

話が脱線するもその度に万里は亜鬼十を表に出そうとするが、亜鬼十はニコニコするだけであり、万里もまた小十郎に強く制止され、全くもって不愉快極まりないとばかりに酒を飲み始めた。

「おいおい、Honey。そんなに飲んだら明日辛くなるぞ？」

「そんなときゃあ、アンタが診てくれんだろ？」

「何だよ？随分と甘えてくるじゃねえか？」

「悪いかよ。」

「・・・バンちゃんは酔うと甘えん坊なんですネ・・・。」

「ああ。」

頬を紅潮させ、政宗にベッタリな万里の姿は、いつもの彼女からはかなりかけ離れた光景だ。

正直可愛い人だなぁ、なんて平和的にも思った。

別に間違っでは無いだろう。

現に、あの政宗もデレデレしている。

「まあ、ラブラブですねー。」

「らぶ・・・？」

「恋してるねーってことですよ。」

「おう！そつだな！恋つてのは良いもんだ！！」

「ちなみに、慶ちゃんはとうなんです？良い女をいましたか？」

「ん？ああ、ちょっと気になつてゐる奴が一人、な。」

「へえ。結婚するんですか？」

「え！？あ、いや、そこまでは・・・っ！」

「・・・慶ちゃん、人の恋を云々言つてゐる暇ないと思いますよ。」

「えと、そ、う・・・かな・・・？」

「うん。」

「そついう亜鬼十はどうなんだい？恋してるかい？？」

「俺は・・・、そつだね。自分でも自覚してるほど疎いからね。よく分からないな。」

「おいおい、そりゃねえって！人には言わせといてよ。」

不満げに言つ慶次は、まるで子供だった。

そんな彼に、亜鬼十はただニツコリと笑ってみせた。

「すみません。俺、悪い子なんです。」

「別にそういうことにはならないだろ？」

「そうかな？」

「そうだって。」

「……ふーん……。」「

クスクス笑いながら、お酒を口にする亜鬼十。

その毒気の抜けるような笑みが、どこか安心できない感じがした。

慶次は、あちこちへと旅して周り、たくさんの人と交流し、見てきた。

だからこそだ。

慶次は相手がどんな人間なのか、人一倍に分かってしまう。

亜鬼十については、正直詳しくは分からないものの、その笑顔が作り物でしかない事は確かであると、茶屋で出逢ったときから見抜いていた。

かといって、亜鬼十の笑みに不自然なものは一切無い。

その証拠に、他の人間は全く気づいていない。

それほどに、亜鬼十という人間は慣れている、ということなのだ。

自分を偽る事に慣れている。

それが日常。

それが、自然なこと。

「なあ、亜鬼十。」

慶次は何を思ったわけでもなく、ただ言葉を零すように言った。

「それって、疲れねえか？」

「・・・フフッ」

全く、分からない。

今、何を思ったのだろうか？

自分の事を、今どんな風に見てる？

（コイツにとって、俺は何処に立っている・・・？）

「それ以上考えない方がいいかもしれませんよ？慶ちゃん。」

「！」

考えている事が分かるのか？

きよとん、とする慶次に変わらない笑顔で言葉を放つ。

「その先にあるのは、不安だけですから。」

「・・・怖いな、アンタ・・・。」

それは不正解です、とハッキリ言われた。

「心外ですね。」

「……。」

「本当に怖い人間というのは、貴方のような人間をいうんですよ。」

「……え？」

返ってきたものは、予想外も予想外な回答。^{コタエ}

慶次は目を見開いて、亜鬼十の言葉を待った。

「人同士の安寧とは、無知からなるもの。理解など、本当はただの破壊行動。慶ちゃんみたいに、そうやって他人を見極めて、理解して、その上土足で踏み込んでこれちゃ、こっちは困ったさん立ち入り禁止令出しちゃいますよ。恐怖のあまり。」

「それって怖い事か？」

「怖い事ですね。とても怖い。俺が一番恐れていること。理解、即ち恐怖です。」

「何でそんなに……？」

「その知りたがりな性格も、恐怖の相乗効果だよ。」

「・・・つまり、詮索するなっということかい？」

「そうですね。」

「分かった。悪かったな。」

「本当です。心臓に悪い。」

「・・・本当、悪いな・・・。」

「そこは『そんな風に見えない』ですよ。ほらー、言ったそばから・
・・・。」

「ええー・・・。」

ちよつとそれは難しくないか？と尋ねる慶次に、亜鬼十は「そんなことありませんよ」とだけ言つて、お酒を飲み干した。

19 鬼姫、そして死神

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 》

*

* 19 * 鬼姫、そして死神

*

夜は更け、遠くの山から日が昇ってくる。

その様子を眺めながら、亜鬼十は城の前にいた。

昨日の宴で伊達の連中は見事に酔いつぶれ、今も眠っている。

本当は彼らが起きてからでも構わないのだが、逸早く敏春のもとに戻らなくてはならなかった。

鬼御子を残してきたとはいえ、彼らは実力のみ、経験のない戦闘兵である。

やはり、心配だ。

「もう行くんだな。」

「!・・・バンちゃん・・・。」

かなり泥酔していたはずの万里が、そこにいた。
が、二日酔いのようだ。
顔色が少し悪いし、現に気持ち悪そうにしている。

「あんまり無理しちゃ駄目ですよ。」

「してねえよ。」

「あ、そうですね。この後竜ちゃんとイチャイチャしながら看病してもらってますよね?。」

「やっぱデメエ斬らせる!。」

「すみません！」

手にした長刀『罪歌』を向け、今にも斬りそうな勢いだっ

しかし。

それよりな、と咳払いして言う万里。

意外にも冷静になった、と思ったのはこの際黙っておこう。

「政宗の野郎は、あの熱血馬鹿をライバル視してる。」

「うん。そうだね。」

「正直、俺にはライバルだのなんだの今まで意識したことがねえ。」

「そうなんだ。実は俺も。」

「だが、今回俺はお前をライバルとして見る事にした。」

「フッフ！それも同感。結構気が合うね？流石ライバル同士。」

「・・・いつか、決着をつけようぜ。」

「そうですね。そして、いつまでも友達でいたいな」

「・・・変な奴。」

「よく、言われます。」

「また、お会いしましょう。」

「その時は決着の時だ!」

二人は口元に笑みを浮かべ、互いにこの先の武運を願った。

『俺はその話に乗る気はない。クライアントに背く事は規定違反だ。』

『人質、か・・・！しかし、ここで貴様に屈する事以上の裏切りはないッ！』

『俺は許さない！絶対にッ！貴様を殺すッ、松永アーーーーッ！
！！』

今でも忘れないものであった。

あのときの事は、鮮明に覚えている。

今日のような満月だった

あの白い絹のような髪に、血のような赤が魅惑的に照らし出されていた。

きっかけこそ好奇心というものではあったが、実際に出逢った瞬間、ゾクリと背筋に感じた。

その高貴な、孤高の姿勢は、どんな宝よりも魅力的だった。

どうしても欲しい。

そして、いつものように、手段を選ばなかった。

しかし、孤高の宝はこの手に堕ちる事はなかった。

その後、彼はとある小国に武将として、名の知れた存在である。
羨ましい事この上ない限りだ。

あんなにも勇ましく美しい宝を、手元に置いているのだから。

最近では、甲斐の虎と同盟を組み、その上奥州とも友好関係を持つ
たらしい。

美しき宝には、やはり人を魅了する力があるのだろう。

「だが、貴殿は私のモノ。今この時も、貴殿を満たすは、この私で
あろう?」

誰もいない暗闇に一人、『松永』はくつくつと笑う。

彼の問いかけに、答える者などもちろんいない。

20 鬼姫、修行前

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 》

*

* 20 *

鬼姫、修行前

*

亜鬼十が帰ってきたのは、夕刻時であった。
離れたのは本当に短い間なのだが、どこか懐かしく思ってしまう。
この地が故郷のように思えるのだ。

確かに、自分は元の世界にこういう思いを持つ事はなかった気がする。

「まあそれより……。ゆっきー、ちゃんと約束守ってるかな・
・・？」

約束とは、此処を離れる前に交わしたものだ。

自分が戻るまで槍を持つな、というものだ。

最初は、納得できていない分幸村は中々首を縦に振ってくれなかった。

だが、お館様こと武田信玄によって、半強制的に首を縦に振らせてもらった。

幸村に限って、約束を破るという事はないだろうが……。

待て、を知らない気もする……。

「って、それじゃあ犬だよねえ……。」

犬。

・・・幸村犬・・・。

（可愛い・・・ッ。）

いやいやいや！

これは失礼だろうッ！！

でも・・・。

お館様あ！と叫ぶ幸村が、柴犬に見えてしょうがないのは、もう仕方のない事だろう。

亜鬼十の姿を見た門番は、うちの一人が主の元へとかけて行こうとしたが、亜鬼十自身がそれを止めた。

深い意味はない。

ただ、そこまでするようなことでもない、と思ったただけだ。

亜鬼十は馬をなおし、城の中へと入っていった。

亜鬼十は、この国の誇る武将である。

同時に、兵達にとっては師匠でもあるのだ。

師の不在中、彼らはどんな鍛錬をするのか、少し不安だった。

（まさか、手を抜いてはいないだろうな・・・？）

だが、敏春や安曇も時折見に行ってくれているだろう。
そう思う事で不安を取り除いていた。

「・・・何やってるのかな、ゆつきー？」

「！？・・・あ、亜鬼十殿！無事戻られましたか！」

屈託の無い笑顔。

ああ、まぶしい。

日輪のようだ。

だが、それよりも・・・。

「ただいまー！それで、なにしてたのー？」

「うむ！亜鬼十殿不在中、某が変わりに鍛錬を見ていたのでござる！もちろん、約束どおり槍は持っておらぬし、天松院殿に頼まれ申した事にござる！」

「・・・敏春め・・・。」

「！えっと・・・、亜鬼十殿・・・？天松院殿は兵達のことも考えて某に頼まれたのだ。某も、何もすることが無く退屈であったのだ。」

「・・・、アイツを責めるのは止める。だが、帰って来た以上、これ以上ゆつきーに迷惑はかけられない。」

「迷惑などとは！」

「良いかい？ゆつきーに必要なのは十分な休息なんだよ。」

「そ、某・・・、納得できないでござる！」

「むー！ゆつきーは考えるより実際に体感した方が分かるんだから、大人しくしとくべきなの！！」

「しかし、三日も休んでは腕がなまってしまいまする！！」

「三日しか休んでないのになまるか！ゆつきーの今までの馬鹿みたいな鍛錬でソレって、どんだけ馬鹿なことしてんだよ！？」

「ば、馬鹿とは失敬な！」

「お馬鹿です！十分に馬鹿です！！」

「うるせえなー。どうし・・・って、亜鬼十！？お前無事だったんだなあ・・・。」

嬉しそうに笑う敏春。
だが、そもその原因である敏春に、亜鬼十は不機嫌全快でぶつかっていった。

「んだよ？兵達にも良い刺激になるじゃねえか。」

「なるよ。十分になるよ。現に怠けてないしね。でも！ゆっきーにはゆっきーの鍛錬があるの！」

「槍を持たない事だろ？その何処が鍛錬になるんだよ？」

「この脳みそ筋肉馬鹿が。」

「あんだと、亜鬼十！」

「ゆっきーは、筋肉を酷使しすぎてるんだ。」

「筋肉だあ？」

「詳しい説明して理解できるとも思っていないから、黙ってたんだけど。」

「馬鹿にすんな！」

「ゆっきーは難しい話わからないでしょ？」

「ぐっ……！まあ、……。」

「さっちゃん！！」

突然呼ばれた佐助。

本来なら出るべきではないのだが、亜鬼十の雰囲気にもまれ出てきてしまった。

「服。」

「？」

「さっちゃん、服を脱げ！」

「？！何言ってるの！？ちょ、姫の旦那ア！！？」

佐助は困惑しながらも、亜鬼十に押し倒され、慣れた手つきで上の服を脱がされた。

「破廉恥でござらあああああ！……！」

「何でだよ！男の裸だろーが……！」

「その男の裸を何で見せる必要あんのさ……！」

「ん？参考。」

「何の……？」

「いいですか……？」

完全に佐助の言葉を遮る亜鬼十。

佐助の腕をガシッと捕み、道場の中にいる全員に注目するようにつに言
って見せる。

「忍つてのは、仕事柄こうした細身の体型が基本。そして、女に変装する必要も時にはあるから、筋肉質じゃダメなわけだ。しかし、忍が全くのひよろい肉体であるかと言えば、そうではない。さっちゃんを見れば一目瞭然でしょ？忍の連中の修行は、必要な部分だけを鍛えるという、まさに計画的な鍛錬と言えます。」

「・・・それと真田殿とどう関係があるんだよ？」

「そうですね、亜鬼十殿！某は忍ではござらぬ！..」

「黙れ、お馬鹿！」

「また馬鹿つて・・・！？」

「忍には忍の鍛錬があるように、その人間にあつた鍛錬がある！戦術だって、槍使いと刀使いじゃ結構違うでしょ？」

「そ、それは・・・。」

「ゆっきーの場合は、その鍛錬に行く前に休息という下ごしらえが必要だったの！つまり、これも立派な鍛錬だったのだ！分かった？」

「う、うむ・・・。」

「・・・はあ・・・。」

「ねえ、もう良いかなー？」

「あ、うん。」

ズボツと服を被せて着せる。

佐助の顔が引き攣っているが、この際気にしない方向でいく。

「ゆつきーは今我慢の時なんだから、大人しく、ね？」

「わ、分かり申した……。」「

「……。さてと、敏春兄も早く書類とにらめっこに戻った方が良
いんじゃない？」

「……。そうだな。まあ、お前が無事戻ってこれた。これで一安心
だ。」「

「鬼御子がいたでしょう？」

「ばーか！そうじゃねえよ！お前のこと、皆心配してたんだぜ？独
眼竜に手打ちにされてねえか。」「

「竜ちゃんたちとは和解したし、友達になってきましたから大丈夫
ですよ。」「

「竜ちゃんって、お前なあ．．．。」

「さあさあ、戻った戻った！」

「分かってるよ！じゃあな！」

敏春は乱暴な口調で去るも、その表情は笑っていた。
先ほどの安心したと言っ言葉は、決して嘘ではなかったのだろう。

「全員整列！」

幸村と佐助が残る道場で、亜鬼十は号令をかける。
兵達はみな素早く整列した。
乱れ一つ無い動きだ。

「全員、基礎体力は十分についた今、次の段階に進みます。さっき言ったように、忍や武士、武士の中でも使う武器によって鍛え方が違います。そこで、明日は刀以外を握ってもらい、後に分かれて鍛錬してもらいます。」

「分かれて、ですか・・・？」

「体術と剣術は基本的にやらせていたが、人によって得意不得意ってモンがあるから。それに、体術や剣術は接近戦でしか発揮できない。戦となった時、それでは何も守れません。・・・いくら中立を謳おうとも、攻めて来る奴らはいらるだろうからね。」

将来、部隊を作る必要がある。

全員が刀と体術では、将棋でも勝ちはない。

剣の才ある者はそのまま続けても良いが、ない者は別の武器を持たせるのが妥当だろう。

刀、槍、弓。

近距離、中距離、長距離。

この三つの戦力は、戦でなくとも、自衛には必要となる。

「以上！今日はこれで解散！！」

「ありがとうございます！！」

兵達は騒がしく道場を出て行った。

21 鬼姫、修行前夜

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 》

* *
* 21 * 鬼姫、修行前夜
*

夕餉を食べ、幸村は湯浴みを済ませた。

真夏ではあるが、夜はとても涼しい。

ここに来てから、決まって縁側で涼むようになった幸村は、今日も同じ場所で涼んでいた。

「旦那。湯冷めしないようにね？」

「分かっておる。」

「なら良いけど。」

「ゆっきー！」

「！何で、ござるか・・・？」

縁側に座り涼む幸村と佐助の所に、気配も無く現れた亜鬼十。

「明日、槍使いとして素質のありそうな人間を見てくれるかな？」

「え？」

「実際に使っているゆっきーの意見を聞きたいんだよ。」

「別に良いでござるが、よろしいのか？」

「良いも悪いも、俺は槍専門じゃない。手広く武術はやってきたが、

やはり専門にしてるゆっきーには及ばないからね。」

「・・・分かり申した！この幸村、協力させていただくでござる。」

「よろしくねー」

ニコリと笑う亜鬼十に、幸村たちも笑って応えた。

「亜鬼十殿は笑っててくださいね。」

「ん？」

「亜鬼十殿には笑っていてほしいでござる。」

「・・・旦那・・・。」

「？どうした、佐助？？」

「ゆっきーさぁ・・・、天然タラシだよね・・・。」

「なっ！？何ゆえそのようなっ！？」

「だって、何かさっきの・・・、告白みたいだよ・・・？」

「・・・・・・・・・・。」

「こ・く・は・く。」

「は、ははは、は、破廉恥でござるうあああああああああああ
ああッ！！！」

「まあ、俺としては構わないけどねー」

「やっぱアンタ衆道なわけ？」

「違うよ。女に衆道はあり得ないでしょ。」

「まあそっただけださ・・・、あれ？」

「？」

「んー？どうしたの？」

「えっと、姫の旦那って、男だよね？」

「見た目はね。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・えへ！」

「・・・・・・は!?!」

「敏春兄や安曇さんも知ってる。」

ついでにいうと、兵達も知っていることである。

「お、おおおお、おな、女子!?! 亜鬼十、殿、が・・・・。」

「驚きすぎだよ、ゆっきー。」

「いや、驚くよ。」

「しかし、女子のそなたが、何故・・・・?」

「南蛮と日ノ本の違い、かな。まあ、南蛮にもいろいろあるけど、俺がいた所は、男女平等でね。女武将なんか普通にいたわけですよ。少なかったけど・・・・。」

「そうでござったか。」

「格好は相手がナメるからだね。兵たちも最初俺が教えることに抵抗を持ってたからさ。見た目だけでも思ってたね。」

「でも、やっぱり男にしか……。」

「サラシを巻いてるのもあるかもね。まあ、女らしくするつもりはないから良いけど。」

「なるほどねー。だからウチの旦那も平気なわけだ。」

「な!?!、さ、佐助!」

「ああ、ゆつきーは女性に免疫ないでしょ?」

「その通りなのよ、姫の旦那。いや、旦那じゃなくて、姐さんかな?」

「旦那で良いよ、さっちゃん。」

「……、分かったよ。アンタそれで通すわけか……。」

それ、とはもちろん『さっちゃん』という呼び名である。
まだ諦めてなかったようだ。

だが、しかし。

幸村は思う。

情けない話、女とともに会話をした経験のない自分にとって、亜鬼十と会話をするというのは、まさに初めてのことであった。今、女であると聞いても、自然と焦りが無い。

流石に最初は焦ったが、今では平常心を保っている。

見た目、の問題なのだろうか。

「それじゃあ、湯浴みしてこようかな。ゆっきー、湯冷めしないように気をつけてね?」

「大丈夫でござる! 佐助と同じ事を言わないで下され。」

「俺も心配だからね。じゃ!」

ヒラヒラと手を振りながら、亜鬼十は去って行った。

男装していたのは、此処に来る前からそうだった。

もうどのぐらいの年月を、男装して費やしたのだろうか。

始まりは、兄の死がきっかけだった。

兄は、家族に愛されていた。
成績優秀。

運動もそこそこできるし、容姿も良かった。

けれど、病弱だった。

学校にもあまりいけず、家にいる事が多かった。

一方自分は、平凡だった。

体も健康体で、成績も悪くない。
体を動かす事が好きだった。

けれど、両親に愛されなかった。

特に母は自分を嫌っていた。

理由は分かってる。

自分の髪と目の色だ。

俗に言うアルビノというもので、生まれつき色素が平均より少ないのだ。

そこから始まったのは、疑惑。

アルビノ体質の人間は、両親どちらの家系にもいなかった。
もしかしたら、自分の子ではないのかもしれない？
愛人でもいるのか？

父のちょっとした疑念は、意外にも本人の中で無くなっていく。

けれど、母は違った。

そう思われていると察知した母は、疑念の無くなったその時まで
疑われていると思い込んだ。

それが、母と自分の間の溝を大きくしていった。

深く、深く。

そんな自分を救ったのは、他でもなく兄だった。

兄は家族の誰よりも自分を可愛がってくれた。

彼女の知る愛情は、兄からの愛情のみであった。

体の弱かった兄は、やがて病院に入院した。

年に何度も続いた。

その間、家で彼女はいないも同然の扱いだった。

会社の重役に就いた父は、家にまともに帰ってくるのが少なくな
った。

同時に、母はそれを嘆いて酒を飲む毎日だ、
時折、暴力も振るう事だつてあつた。

そんな中迎えた、兄の死。

両親は強い悲しみを受けた。

だが、一番に悲しんだのは、妹の彼女であつた。
唯一可愛がられた兄が、もう傍にいないのだ。

この先、どうすればいいのか分からずにいた。

途方にくれる彼女に、母は自分の悲しみをぶつけるように暴言を吐
き、何度も暴力を振るうようになった。

抵抗も出来ない自分。

何も出来ない中で、必死に考えた。

どうすれば終わるんだろう？

どうすれば、楽になれるのかなあ・・・。

そして、彼女は自分を捨てた。

名前も、過去も、全て、全部……。

それが、『黒土 亜鬼十』の誕生だった。

22 鬼姫、選別

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 》

*

22 鬼姫、選別

*

翌朝。

道場に集まった兵達は、新たな段階へと進むこのときを緊張して待っていた。

此処で、自分達の道が決まるのだ。

ある意味、試験のように思っても間違っではないだろう。

「さてと。武器を持たせるのはまだ早いから、とりあえずこつちを手にしてもらうぞ。」

用意されたのは薙刀である。

幸村が試合に使ったソレである。

一人一本ずつ手にすると、全員初めてのことに少し興奮気味だった。

まあ、普通そうなるだろうなあ・・・。

「まずは、基本の動きを見せる。その後、3人ずつその動きをやってもらおう。別に完璧にする必要は無い。そこまで求めてはないからな。以上!」

予め幸村に頼んでおいた型をやってもらった。
流石使い慣れているだけあって迫力がある。

兵達もあんぐりと口を開いていた。

「アホ面晒してんじゃねえ！」

「！す、すみませんッ！！」

「次はお前らだ。出来る限りで良い。」

そういつて、最初の3人以外は後ろに下がらせた。

サッと頭を下げ、同時に見よう見真似でやってもらった。
予想通りにぎこちない動きだ。

「次！」と、亜鬼十が言うと、次の3人が前に出て同じように礼をする。

手元の紙にメモをしながら、それらを繰り返した。

「どうかな？」

「うむ。・・・この者はどうであろっか？」

「ああ、彼ね、確かに彼には良いかもしれないね。この彼は思うかな？」

「この者も筋がいいと思いまする。」

途中相談もしながら、全員を何とか見終わった。

全員で50人。

兵士の数にしてはかなり少ない人数だが、今のこの国では仕方ない、ギリギリの人数なのだ。

甲斐や上杉のあの大群に攻められれば、一発だろう。

そのための戦力である亜鬼十なのだが。

それに、こうして鍛錬させるのも、あくまで戦の為ではない。自衛が最大の目的だ。

そうして一行は、一度外に出る。

遠くに的がある。

「次は弓です。まずは一連の動きを見せます。」

亜鬼十は弓と矢を持ち前に立つ。

弦に矢をつがえて、上に持ち上げると、ゆっくりと弦を引き、弓を下ろしていく。

狙いを定め、軽く手を離す。

パンッ！

的のど真ん中に命中する。

「肩に力をいれると、矢はあまり飛ばなくなるから注意するように。」

では、3人！前に！」

槍の時と同様に三人ずつ見せてもらう。

弓についてはぎこちなさというのは見えにくいだが、やはり矢の飛距離が短い。

届いても的に刺さるものはいなかった。

だが、それは今回求めている事ではない。

才あれば、あとは鍛錬次第なのだ。

才無くとも努力次第、というのも同様に。

全て終わった時には、昼時だった。

一旦休憩を入れ、亜鬼十と幸村は城の中にある一室に向かった。
メモしたことをもとに、分けていく中で、幸村は口を開いた。

「亜鬼十殿は、コレを体感してもらいたかったのか？」

「何かな？」

「先ほど、某の槍ではなかったが、体が軽く動きも前よりキレが出ていたでござる。気のせいで、ござるうか？」

「・・・それなら成功だよ・・・。」

「！成功とは、やはりコレは気のせいではなかったのでござるか！？」

「まあね。」

「でも、何で休んであんなに結果がいいの？」

「！？さ、佐助！」

「よ！さっちゃん！！その答えはだね、ゆつきーはあの馬鹿みたいな鍛錬しまくって、肉体を酷使していたんだよ。そのお陰で丈夫なんだろうけど、年取ったらボロが出てたよ。今回休息を取ることによって、筋肉を休ませ疲れをすっかり取れた。結果がこれなの。」

「ふーん。旦那、結構疲れてたんだね？」

「某、全く疲れてなかったのだが・・・。」

「慣れたよ。それが当たり前みたいに感じてたから、気づかなかったんだよ。」

「なるほどねー。」

「亜鬼十様。」

そこに鬼御子の一人シンクが現れた。
子供ながらも、佐助が見た限りでも忍の動きだった。

「何かな、シンク？」

「クロガネとマシロが、サボってます。」

「・・・シエスタだよ。」

「すみません。南蛮語は理解しかねます。」

「お昼ねだよー。今日は良い天気だからね。」

「・・・。」

「えっと、起きないと？」

「はい。」

「・・・放っておいていいよ。」

「御意。」

「良いの！？それで？」

「良いんだよ。まだ子供だからね。それに、やる時にやってもらえれば十分だよ。シンクも寝てていいんだよ？」

「いえ、仕事がございますので。」

「そうかい？無理しちゃだめだよ？」

頭を優しく撫でる亜鬼十に、シンクは少し顔を赤くして姿を消した。

「さっちゃん、彼らのお世話頼んでもいいかなあ？」

「え？俺様！？」

「さっちゃん、武田のオカンでしょ？だからできるよ！」

「オカンって、何！？オカンじゃないよ、俺様は！！」

「それに、忍には忍から教わった方が良いじゃない？」

「・・・同盟相手とはいえ、そこまでする気は俺様ないんだけど。」

「それ言ったら、俺がゆっきーの鍛錬つける義理ないんだけどね。」

「た、確かに・・・っ！佐助！頼むぞ！！」

「って、旦那！？」

「別に術を教えるとは言わないよ。安曇さんにまかせてるしね。さっちゃんには彼らに躰をしてもらいたいんだ。」

「しっけ？」

「俺や安曇さんはあくまで戦闘術とかだからね。躰はしてないから、ちよっと問題なんだよね。弟や妹の世話だと思ってお願い！」

「・・・はあ。しょうがないなあ。」

「ごめんねー」

「心にも無い事言わないでくれない？」

「思ってるよ、ちゃんと！じゃあ、いつてらー！」

やれやれ、と深い溜息をつきながら、佐助はその場から消えた。

一方で、幸村は何やら考え込んでいた。
選抜の事ではないようで、視線は別の所にあつた。

「どうかした、ゆつきー？」

「い、いえ！ただ、シンク殿たちはまだ子供。親もおるはずでござ
ろっ？それとも・・・。」

「ちやーんと生きてるよ。」

「そ、そうでありましたか！すみませぬ。このような不躰な事・・・。
」

「シンクもクロガネもマシロも、親の事情で見捨てられた子なんだ
よ。」

「な、なんと・・・！？」

「まあ、そんな珍しい話でもないよ。世の中がこんなじゃ、しょう
がないってトコだね。まあ・・・、平和でも・・・変わらないも

のは変わらないけどさ。」

「え？」

「いや、こつちの話」

「・・・それで、亜鬼十殿が拾ってきたと？」

「そういつこと。」

昨年。

一揆が終わって一カ月後。

亜鬼十は城下の更に外の村々を偵察し始めた。
前の当主の横暴な政策に、田畑のほとんどは枯れ、人々の顔には絶望すら感じられ無い程、表情がなかった。

そんな村々で、彼ら3人は生きていた。

とても貧しく、厳しい環境の中で生にしがみついていた。

「・・・っ。」

「ゆっきーが悲しむ事でもないよ。そんな親、何処にでもいるからねー。」

「そ、そのような事はありません！親なれば、我が子を愛さぬわけありません！」

「・・・そうだね・・・。ホントに、そうあれば良いのにね。」

「・・・亜鬼十・・・殿・・・？」

「戦乱の世というものが、その原因であればいいのに。そうすれば、みんな幸せなのにね・・・。」

微笑みながら言う亜鬼十は、どこか儚かった。

まるで消え入ってしまうような、どこか脆い存在に見えてくる。

彼女は言うまでもなく強い。

幸村も手が出ないほど、きつと幸村の知る武将たちでさえ敵わないかもしれない。

そんな強者の姿が、この時だけ弱く見えてしまった。

「ゆつきーの両親って、どんな人なの？」

「某のござるか？」

「うん。」

「母は某が生まれてすぐに亡くなってしまいました。父からは、とても綺麗で優しい母であつたと。」

「美人さんなのは本当だろうね。男の子は母親に似るって言うしね！ゆつきーが女装したら可愛いんだろうね？」

「は、はは、破廉恥なッ！？」

「ふふん で？お父さんは？」

「父上は某の憧れでござる。もちろんお館様の事も慕っております！しかし、それとは別に父上には、父上への強い敬意を持ってるでござる！」

「ゆつきーは幸せ者だね？」

「あ、いや、まあ……。それより、亜鬼十殿の両親はどうなのでござろうか？」

「俺の？俺の両親は、とっても愛してくれたよ。これ以上にないくらい、俺を愛してくれてたよ。」

「ならば、亜鬼十殿も幸せ者でござるな！」

「ただ、妹がね。」

「妹？亜鬼十殿には妹君がおられるのですか？」

「うん。病におかされて死んでしまったんだけどね。」

「！・・・申し訳ござらん・・・。辛い事を・・・。」

「ううん。妹は、幸せだったよ。幸せそうに笑ってたんだ。」

「笑って？」

「うん。」

「きっと、大好きな家族と最後まで一緒にいられたからでござるよ。」

「そうだね。そうあって、ほしいな・・・。」

悲しそうな笑顔を见せる亜鬼十。

幸村は一瞬言いかける言葉を飲み込んで、立ち上がった。

「厠に行ってくる」と言い残し、その部屋を去って行った。

「先に行ってるね」と、亜鬼十は幸村の背中に向かって言う。

『泣かないで下され。』

そう、言いそうになった。

23 鬼姫、修行開始

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 》

*

* 23 * 鬼姫、修行開始

*

この日、兵達の鍛錬は弓と槍、そして刀と分けた後、軽く型をを教えて終了した。

軽く、と言っても慣れないことをしたのに変わりなく、全員疲労が顔に出ている。

そんな彼らに厳しい一言を放った後、解散させたのだった。

「さてと、次はゆつきーだよ。」

「おお！待っておりましてぞー！！」

「うん　じゃあ、一度かるーく槍を振って調子を整えようか。」

亜鬼十も槍（薙刀）を持ち、幸村と共に振るう。

あまり槍を使う事がない彼女だが、動作に一切ぎこちなさ等なかった。

それに幸村も、さすがと感心した。

そうして、少し体が温まった所で、彼女はこれからの鍛錬について説明する。

「まずは時間ね。兵達の鍛錬が終わった後だから、今の時間に初めて夕餉までだよ。最初、軽く手首をほぐして、この城の周りを軽く3週。この間に体をほぐす為に、ちょっと変わった動作を入れるよ。」

「？」

「太ももを上大きく上げる。これを左右交互に速くやってみよう。」

ます。タイミングは一周終わる度に、左右あわせて10回ね。3週したら、道場横の広場に移動して、短い距離を全力で走ってもらって3往復ね。」

「亜鬼十殿、それには一体どのような意味が・・・？」

「敵を素早く倒す為だよ。槍の射程距離に素早く敵を入れることで、攻撃における速さが上がるのです。」

「な、なるほど・・・！」

「次いくよ。道場に入り、腕立て、腹筋、背筋、各30回。後に、槍の素振りをするんだけど、コレに制限はないから。ゆっきーのやりたいようにしてもらって構わないから。あと、今日は次にする実践から始めるよ。」

「分かり申した！」

「組み手みたいなものだから、力まないようにね？」

「はい！」

早速やろうか、と道場の真ん中に立つ。

離れた場所から、幸村が真剣な表情で槍を構えている。

「来なよ」と合図すると、幸村は闘志とともに突っ込んできた。いきなり槍の連続攻撃である。

だが、亜鬼十は簡単に避けていく。

しかも、その場からあまり動いていない。

元の位置から後ろに、数ミリも動いていないのだ。

「良いかい？ ゆつきー？？ こういう攻撃は、相手の動きを瞬時に見抜き、射抜くんだよ。相手が避ける先を予想して攻撃する。それが、狙いに相手を追いやるように攻撃する。それが重要、だよっ！」

ガシツと槍を掴まれた瞬間、亜鬼十はその槍の上で体を翻し回転させ、幸村に蹴りを入れた。

幸村は一瞬崩れた体勢を立て直す、すでに遅く、亜鬼十の槍が腹部についていた。

ドンツとくる力に、体はそのまま後ろに叩きつけられた。

ズシンとくる重い攻撃だったが、試合の時の突き程ではなかった。

その証拠に、叩きつけられた壁にヒビ一つ入っていない。

「ゆっきー、本当丈夫だから教え甲斐があるよ」

「そ、そつで、ございますか……。」

「……大丈夫？」

「！大丈夫でござる！！この幸村まだまだ余裕にござる！！！」

「それは良かった　コレで音をあげられたらどうしようもないからね。」

「では、参るッ！！」

「どうぞ。」

鍛錬は亜鬼十のいうとおり、夕餉まで続いた。

終わったときには、ゼエゼエと呼吸を乱す幸村が大の字になって倒れている状態だった。

体には擦り傷と打撲がいくつか見える。

あの丈夫な肉体といえど、亜鬼十の攻撃は確かにダメージを与えるものだった。

本人は相も変わらずといった様子で、幸村のそばに胡坐をかいた。

「ゆつきーに宿題だよ。俺にどうして槍を掠める事も出来なかったのか。自分なりに答えを出してください。期限は明日、ゆつきーの鍛錬までに、ね？」

「・・・わ、分かり、申した・・・っ。」

「ひ、姫の旦那ー！！！」

「?!」

「さ、佐助・・・？」

そこに佐助が降りてきた。

正確には落ちてきた、という表現が正しいかもしれない。

「ちょっとアンタ！この子達にどんな教育してんのさー！！？」

「？」

亜鬼十が首を捻ったと同時に、クナイが佐助と亜鬼十の間に飛んできた。

「猿飛佐助！覚悟ッ！！」

「うわっ！？」

「・・・。」

「シンク、どうなったのかなー？」

説明が途切れ、何がなんだか分からない亜鬼十と幸村に、シンクは簡潔に状況を説明した。

何やら、鬼ごとをしていたらしく、遊び方が若干間違っているようだ。

そっだね、鬼ごとは鬼を倒す遊びじゃないよね。

「しかも武器使って、穏やかじゃないなあ。」

「そう思うなら止めて！姫の旦那ッ！！」

「二人ともそこまでだよー！」

「・・・。」

「チッ！」

「舌打ちが聞こえたぞ、クロガネ。」

「あー、助かったー・・・。」

「全く、二人とも。遊びに武器何か使っちゃダメでしょ？あと、鬼ごとは鬼から逃げる遊びだからね？決して鬼退治する遊びじゃないありません。」

「こっちの方が面白いんで。」

「（コクコクッ！）」

「すみません、賛同します。」

「まあ俺もそれは思うけど。」

「ちょっと！？」

「でも、遊びだからね。イジメじゃないからね？」

「しょうがないなあ。」

「亜鬼十さんがいうなら、そのように。」

「（コクリ!）」

大人しく従う3人に、佐助は内心驚いていた。
初めて相手をするとはいえ、こつも違うとは・・・。

やはり、この3人は忍なのだろう。
きちんと自分達の立場が分かっている。
上の人間に忠実だ。

「さあ、夕餉をすませましょうか。今日はシンの好きな煮物らしいですよ。」

「本当ですか・・・?」

「ホントホント 安曇さんがシンクは頑張り屋さんだからって!」

「／／／。」

「（クイクイ）」

「マシロの好きな玉子焼きはないけど、良い子にしてたら作ってくれるよ。」

「めんどくせー・・・。」

「クロガネは一生でないかもねー」

「うっ！」

「うっそー」

「なっ／＼／！？」

「まだまだだな、クロガネ。」

「んだと、シンク！」

「（あたふた）」

楽しそうにしている亜鬼十に、それを囲む鬼御子三人は、本当の家族のように思えた。

あの3人に辛い過去があることは、亜鬼十からの話でそれなりに察

しはついている。

しかし、それが嘘であるかのように、幸村にはそう思えたのだった。

24 鬼姫、そして赤御子

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 《

*

* 24 * 鬼姫、そして赤御子

*

どうでもいいことなんて、世の中腐るほどあると思う。

現実主義者としていうのであれば、どうでもいいと思えるかどうかなんてのは、人それぞれであつて。

ならば、たくさんの人の考えを集めたら、最終的に全てがどうでもいい事に類するのではないだろうか？

亜鬼十からすると、この考えも、ただ一人の考えでしかないわけで、これをどうでもいい事だと正直思うわけだ。

三人は同じように『どうでもいい』と答えた。

もちろん同じ質問に対してである。

それが彼らの答えならば、それで良い。

そもそも、この質問に正解も不正解も存在しないのだから。

シンク。

本名　くれは。

小さな村に住む、貧しい家の長男。

まだ小さい弟二人を抱え、親の手伝いをしていた。
物心ついたところから、当たり前前の日課であった。

だからこそ、貧しさに不満を持った事はない。
強いていうなら、それもまだ分らない弟二人にもつと飯を食べさせてやりたい。

それだけだった。

両親はそれを知らない。

くれはが、子供ながらに自分達よりも大人であった事を。
その為、くれはから見た両親は大人気なく見えた。
一度として、両親に誇りを持てなかった。

そんなある日。

両親は今年の不作にご機嫌斜めであった。

この家だけでなく、他の家も不作であり、仕方の無い事といえば仕方の無い事だった。

だが、この不作を誰かのせいしないではいらなかった。

「・・・っ。」

朝。

一番末の弟が、死んでいた。

飢え。

それが一番の可能性。

だが、くれはは分かっていた。

これが、他殺である事を。

くれはは、両親を自分達の命を脅かす存在としてみるようになる。
残った弟を、決して離さなかった。

だが、今度は予想外な事で弟を失う事になってしまう。

「……………」

人柱。

連続の不作に、村全体が村はずれにある祠に祭った神へ、生け贄を捧げようとした。

そして、弟が選ばれた。

あの二人は、実の息子を勧んで差し出したのだ。

くれははもちろん反対した。

だが、大人たちは聞く耳持たなかった。

他の子供達は、自分達が犠牲にならぬように何も言わなかった。

「にいに・・・？」

やっと言葉を覚えた。

これからいろいろな事を学ぶはずであった弟を、村の大人達は殺したのだ。

村の子供達は、見殺しにしたのだ。

くれはは思う。

この村には、まともな人間はいないのだと。
いや、奴らは人の皮を被った鬼だ。
化け物だ。

生きていく糧を失ったくれはの瞳は、死んだ人間のように虚ろであった。

白い鬼に出逢った時。

この時も、彼は生きていながらも死んでいた。

死にかけている子供なんてそこらじゅうにいたが、くれははある意味異常だった。

顔色も、体つきも、何もかも他の子と変わらない。けれど、全く違う。

その瞳は虚ろにして、強い悲しみを持っていたのだ。

「俺は亜鬼十。君は？」

目の前にいるのは、見た事のない顔の大人だった。そして、初めて見た真っ白な髪と赤い瞳に、彼は『鬼が現れた』と思った。

「俺を喰っても、うまくない、ぞ．．．。」

すると、目の前の白い鬼は目を見開き、次に大きな声で笑い始めた。何を笑っているんだ？とその鬼を見ると、鬼は優しく微笑んでくれはの頭を撫でた。

「悪いが俺に人の肉を食う趣味はないよ。」

「鬼は、人肉を喰う。」

「なるほど！でも俺人間だからさ。」

「……。」

今考えればかなり失礼な事だった。けれど、そんな失礼な自分に、とても優しくかった。

「ねえ、君は何を失ったんだい？」

予想もしない質問に、くれは目を見開いた。

何故、そんな事を聞くのだろうか？

俺が何かを失ったと、どうして分かるんだ？

そんな疑問を持っていながらも、くれはは二人の弟の事を話した。

鬼は、全く表情を変えない。

悲しまない。

同情しない。

けれど、鬼は確かにくれはを救った。

「くれは君の親かな？」

「！」

親も同様に思っただろう。

白い髪に赤い瞳を見て、鬼だと。

そんなことを知ってか知らずか、何もないように言葉を紡いだ。

「君達親にとって、子供って何なのかな？」

その質問に、親は答えない。

目の前の異形に、恐怖を覚えた二人に、声を出す術などなかったのだ。

何も言わない親に、鬼は言う。

「俺は黒土 亜鬼十。この国の新たな主の命により、村を偵察しに来たのだが。この子供、くれは君の才を見込んだ。そこで、この子供をお譲り願いたい。」

「?!」

「もちろんタダではない。それなりに金もある。」

銭の入った袋を一つ、親の目の前に置いた。
すると、今まで恐怖に混乱していた彼らは、一気に表情を緩めた。

「足りないならもつと用意しよう。」

「い、いえ！そんな・・・ッ！どうぞ、うちの息子を使ってください！」

金にものを言わせる人間を装い、わざとそんな事を言ってみせた。

結果がコレである。

この結果が間違っている事を、くれはは分かっている。

しかし同時に、あの両親ならあり得ると納得もしているのだ。

亜鬼十はその金を受け取った親を、一瞬にして視界から消した。
つまり人間ほど、見るにたえないものはないだろう。

くれはの手を握り、帰路につく。
帰り道を歩く中で、くれはは何も聞かなかったし、言わなかった。

「くれは君。君は、親元に帰りたいかい？」

「え．．．？」

「買った本人のいう事じゃないけど、子供は親元にいるべきだとも思うんだよ。そこで、君を買ったお金は返却しなくても結構だ。君が帰りたいと思うなら、この道に戻るがいい。」

「．．．俺にとって．．．。」

「？」

「あの二人は他人ですから。家族はもう、とうの昔に死にました。俺は、独りです。」

「．．．。」

「あなたのそばにいて良いなら、俺はついていきます。」

「いいのかい？この道を行けば、君はきっと命の危険に曝される。一度や二度じゃない。楽なんてものはない。それでも、ついて来るか？」

「はい。あなたがそれを許すのなら。」

亜鬼十はその答えに満足気な顔をしていた。

くれはも、自分の答えに間違えはなく、自分の意思を伝えた。
後悔などしない。

そして、今。

あの方のそばにいられることを、誇りに思っている。

後悔などあり得ない。

一生、あの方についていく。

それが、くれはを捨て、シンクに生まれ変わった少年の決意である。

25 赤き虎、探索

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語》

*

* 25 * 赤き虎、探索

*

幸村は考えていた。

亜鬼十の出した宿題の答えを、一晩かけて考えても分からず、今に至ってしまったこの状況。

あと数刻すれば、期限となってしまう。
どうしたものか・・・。

昨日だけでなく、その前にも、亜鬼十は自分の攻撃を意図も簡単に避け、反撃に移し変えてしまう。

あれでは亜鬼十に傷一つ負わせる事などできない。

「いや！某は別に亜鬼十殿を傷つきたいわけではないッ！……！」

誰もいない空間で、一人弁解する幸村。

佐助は、今日も鬼御子の世話で近くに控えていない。
彼も彼で、あの三人に苦勞しているようだ。

特に、クロガネだ。

亜鬼十以外には全く懐かない。

そもそも鬼御子の三人が人に懐かないのだ。
その中で特に懐かないのが彼の少年である。

決して不器用でもないし、正直世話上手な佐助が手を焼くなど余程の事なのである。

「と、いかん！某、佐助の心配をしている場合ではないぞ。」

どうやってよけたのか考えなくては・・・。

しかし、答えは浮かばず。

「どうしました、真田殿？」

「天松院殿！」

執務を終わらせた敏春が、内輪をパタパタさせてやってきた。
その様はすっかり慣れた感じである。

最初の頃はあんなにも緊張して、幸村にも畏まっていたというのに。

「アイツの鍛錬はどうです？」

「はい！とても素晴らしいと思います！しかし・・・。」

「？」

昨日の宿題について話すべきだろうか？

幸村は悩んだ。

が、急に黙り込んだ幸村を心配した敏春は、その横に座って相談してみろと言わんばかりに尋ねてきた。

それに押し負けるように、幸村は重い口を開く。

「掠める事も出来なかった理由、ね。」

「はい……。」

「うーん……。正直な話、俺はあいつと違って頭を使うのは好かん。だが、奴の鍛錬は確かに力になる。その答えが分かった時、大きな成長を見せられるだろう。」

「そうでござろうか？今まで槍を振るい、鍛錬を積んだ某には、亜鬼十殿のする鍛錬があまりにも違い過ぎてしまい……。」

「なるほどな……。真田殿。」

「何でござ……ッ!？」

突然拳を叩き込もうとした敏春に驚きつつ、幸村は紙一重でその拳を掴んだ。

「な、何を!？」

「こういう事なんじゃねえか？」

「・・・え・・・？」

「人つてのは、何かを見る時反射的に動作をする事がある。さっきみたいに、殴られそうになって俺の拳を掴んだ。戦の時だって、真田殿は刀を受け止めるか、避けるかするだろ？その時、避けようと考えるから動くか？勝手に動く事はないか？」

敏春の問いに、幸村は今までの戦いを思い起こす。

確かに、自分は反射的に避けていることがある。
意識して避けるなんてことはあまりない。

不意打ちであるなら、尚更あり得ない。」

「反射で、ござるか……。」

「まあ、俺の意見だ。参考程度にしてみればいい。」

「ありがとうございます、天松院殿！」

「良いつて！気にしなさんな！」

鍛錬頑張れよ、と敏春はその場を去って行った。

反射。

一つの答えである事は分かる。

しかし、本当にそれだけだろうか？

試合の時、自分は亜鬼十の攻撃を反射的に避けていた。だが、避けきれなかった。

亜鬼十の攻撃の速さに、その理由はあると思っている。

だから攻撃を素早く繰り出すことでどうにかなると思った。

「・・・他に・・・、何か・・・。」

ふと、目の前を通った佐助と鬼御子三人に視線がうつる。

昨日の続きのようで、鬼ごとをしている。

武器はもちろん持っていないが、ところどころ体術を駆使している。

が、さすが佐助。

三人の連携をいとも簡単に避けている。

やはりまだまだ半人前なのだろう。

しかし、中々の動きである。

下手すれば当たりそうなものだ。

「・・・そうか・・・。」

幸村は一つの答えを導き出した。

佐助と鬼御子の間にある力の差。

それは埋めようの無いもので、亜鬼十が前に言っていた事でもあった。

兵達の鍛錬が終了し、亜鬼十は幸村を待っていた。

まだ答えを出していないのだろうか、と考えながら自分の愛刀『鬼牙』を振るっていた。

『鬼牙』は普通の刀の半分の長さしかない、短刀とも言い難い長さの刀である。

いつでも隠し持っているソレは、一揆の時から相棒である。

敏春が仲間になった証にくれた大切な刀。

まさに、自分の宝物でもあった。

「・・・来た。」

聞こえてきた足音に、亜鬼十は動きを止め『鬼牙』を再び服の中に隠す。

同時に、幸村が道場に入ってきた。

その表情は、答えを導き出し自信を持ったものだった。

「答え、出たみたいだね？」

「はい！昨日の問いの答えは、まさに経験でござる！-」

「・・・。」

「亜鬼十殿は、某よりも戦の経験がおりなのでしょう。その経験を糧とし、某の攻撃を反射的に避けていた。これがこの幸村の答えにござる。」

「・・・経験則による回避・・・。うん、良い答えだね。」

「！では・・・！」

「うん、正解」

すると、幸村は立ち上がり「うおおやかたさまあああああ!!」と雄たけびを上げる。

亜鬼十はニコニコしながら耳を塞いでいた。

「ゆっきーの言うとおり、俺が回避できたのは経験による反射だよ。まあ、ゆっきーの攻撃が真っ直ぐすぎるのもあるけど、一番は経験だね。経験する事でいろんなものを習得するのは、何も戦いだけではないからね。ということで、今日の鍛錬を始めましょう。最初は城を三週だよ。昨日言ったとおりだからね。」

「うおおおお!この幸村ッ!全力で走りとおして見せまする!!」

「頑張つて」

バサラ技並みに燃える幸村に、亜鬼十は感心していた。

無理するところや、お馬鹿なところを抜けば、今の新兵達に見習わせてい所なのだ。

このぐらいのやる気を見せてほしいのだが。

今度玄さんに相談してみよう、と思う亜鬼十だった。

26 鬼御子、そして両親

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語》

* *
* 26 * 鬼御子、そして両親
*

幸村の鍛錬は順調に進んだ。
本人のやる気と才能による賜物である。

「玄さんと決めたこの一ヶ月で、大きく変わるだろうなあ。」

それは予想ではなく、確信だ。

佐助が鬼御子三人と作ったというお団子を食べながら、残りの期間どう鍛える

か、メニューの調整をしていた。

そういえば、鬼御子も佐助と結構仲良くなっている。

最初の頃は、仲が悪かったわけではないが良いとも言えなかった。

まあ三人の性格やら何やら考えれば、いか仕方のないことではあるのだが。

と、そこに。

慌てたように走ってくる足音が聞こえた。
一瞬幸村かと思ったが、よく聞くと違う。

「亜鬼十さんッ!」

「どうしたのー?そんなに慌てて?」

「農民が、農民が・・・、門に・・・ッ!」

「？」

少しは落ち着け、と言ったものの。

亜鬼十自身、少し嫌な予感がしてきた。

何だ、気持ち悪い。

亜鬼十は兵と共に門へと向かった。

なるほど。

納得だ。

どうしてこうも不快な感じがしたのか。

門の前にいたのは、一度会っただけの二組の夫婦だった。

「息子を、返せエ!!」

「私の息子を盗らないでえ!!」

「それでも国のお偉いさんだかあ!!」

溜息が出る。

「その誤解つむようなこと言つの止めてくれませんか?」

「!」

「お、鬼め！ウチの子供何処にやっただあ！！」

「そんなに叫ばなくても聞こえている。というか、今更何しに来たんです？」

「子供取り返しに来ただあ！」

「ほう。それで？返せ、と??」

「大人しくけえせ！」

「・・・返すも何も・・・、連れてって良いと言ったのはあなた方だろ？」

「金で言わせて何を言うだあ！！」

「つまり。俺が金出さなかったら渡さなかったと？」

「そうだあ！」

「・・・寝言は寝て言いやがれよ。」

「！」

『鬼の形相』。

まさに、この言葉が当てはまった。

冷たく見下すような瞳には、怒りの炎が灯っていた。

それに農民達は怖気づき、後ろに下がった。

「俺は何も強制してない。金は渡したが、最終的に子供を差し出したのはお前

達だ。それに、本人達は俺のもとにすることを、自分の意志で望んだ。無理に

帰らせる気は、俺にはない。」

「う、嘘だあ！子供がそんな事分かるはずねえだ！」

「脅しただか？オイラ達みたいの脅しただかあ！！」

「誰が脅したよ？テメエらが勝手に怖がってただけじゃねえか。」

反論が止む。

当然だ。

本当に脅した事なんてないのだから。

お歸りを、と促す亜鬼十に、夫婦達は恐れながらも睨みつけた。

歸る気はないらしい。

正直面倒だな。

これで会わせれば今以上に面倒な事になりそうだ。

（まあ、十分面倒ではあるが・・・。）

「亜鬼十殿！どうなされたのだ？」

「あ。」

騒ぎが気になったのだろう。

幸村と敏春がやって来て、これはどういふことだと尋ねてくる。

どうもこうもない。

凄く面倒な状況としか言えない。

「もしま、前にお話下さった鬼御子の……。」

「……」名答……。」

「で？何だよ、これは……。」

「……。」

「子供を、子供返してください！」

「は？」

「何も分からんオラ達ん子供盗ってっただあ！！！」

「亜鬼十殿、そのような事を……！？」

「してないよ（即）。」

「お前、それ犯罪だぜ？」

「だから違う（即）。」

「……じゃあよお、子供に会わせてやれば良いんじゃない？」

「……。それしかないか……。」

「ああ。面倒そうだな……。」

仕方ないか。

気が進まない中、亜鬼十は小さな笛を吹き鳴らす。
すると、数秒遅れて三人が現れた。

鬼御子三人衆。

シンク。

クロガネ。

マシロ。

「く、くれは・・・っ！」

「黒羽あ！」

夫婦達は自分達の子の名を呼んだ。

しかし、一切反応を返さない子供の様子、目の前の親達は全く気づかない。

もう、彼らに自分達の入り込む隙間がないという事を。

「亜鬼十様、鬼御子ここに参上いたしました。」

「うん。早速だけど、シンク。そしてクロガネ。二人のご両親を名乗る者が来

ています。」

「・・・。」

「・・・。」

「君達に会わせるとしつこくてね。」

「恐れ入りますが、このシンクに親などございません。」

「!？」

「な、何を言うだか・・・?」

「俺も同じく。」

「ということで、帰ってください。」

「お前が・・・、お前が何かしただあ！」

「鬼め！この化け物があ！！」

「元に戻せえ！！」

「この悪魔があ！！！！」

「いい加減にしろ！貴様らアツ！！」

「！？」

叫んだのは、以外にもシंकだった。

いつも冷静にことを運ぶ彼が、珍しく怒りを露にしていたのだ。それに、亜鬼十も少し驚いていた。

「今更親だと？！どの面下げて言えるのだ！」

「親に向かって何を・・・ッ!？」

怒る親の頬をクナイが飛んだ。

ツーと血が流れ、顔色を一気に青くさせた。

「いい加減にしろと言ったはずだ。」

「子供に何を・・・!」

「あんたらが言えた義理かよ？」

「!？」

「忘れもしねえ。この身に受けた屈辱を、俺は一時も忘れた事はないッ!」

やはりこうなったか。

内心溜息をつく亜鬼十だが、正直どうでもよく思っていた。
あの夫婦共々が子供にした事は、決して許されるような事ではない。

ここで子供に殺されたとしても、自業自得といったところだろう。

まあ見てる側は、いい気はしない。

それに、このまま殺させるのは亜鬼十にしても不本意だ。

「はいはい！理解できたかな？命が惜しいなら帰りなさい。今すぐ、二度と

彼らの前に現れないように。」

「こ、こんなところで・・・、子供が親殺せるわけがねえだ！！」

「・・・ええ、そうですね。」

「！」

「シンク！」

「あなた達など、殺す価値もない。なぜなら、生きる価値さえもないのだから

。」

「キビシーお言葉だねえ、シンク。グツサリくる一言だ。」

「シンクに賛成だ。俺も、あんたら相手にしてる暇あったら、猿男相手にして

「た方が良いな。」

流石に効いたのだろう。

さっきまで勢いのあった夫婦達の目には、絶望がうつった。

そして、フラフラとその場から去っていったのだった。

27 赤き虎、そして鬼御子

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語》

*

* 27 * 赤き虎、そして鬼御子

*

幸村は分からなかった。

彼らがどのような過去を持っているのか。

何故、実の親にあそこまで言えるのか、理解できなかった。

「俺様から姿消したと思ったら、そんな事になってたの？」

「ああ。某、ああなることが理解できぬ。いくら恨んでいようと、
実の親であるう？」

「でもさー、旦那。そんなだけ恨まれるって事は、それだけの事をし
たってことじゃないの？」

「うむ……。だが、シンクたちはまだ子供。親元にいる事が、幸
せではないだろうか？」

「幸せなんかじゃないよ。」

「!？シ、シンク！」

いつの間にか後ろの方い正座しているシンク。

そして更に後ろで、クロガネとマシロがそれぞれの位置でくつろい
でいる。

二人の目も、幸村の方に向いている。

「亜鬼十様は、一度として無理強いなどした事はございません。我
々に何度が戻りたいかと尋ねてこられます。」

「その答えが、ここに残る事にござるか。」

「はい。」

「・・・っ。」

「亜鬼十さんの言うとおりだな。」

「？」

「アンタ優しすぎるぜ。その上甘いしょ。」

子供に言われてしまった。

だが、幸村の考えは変わらない。
これが正しい形だとは思えないのだ。

「シンクも俺もマシロも、親と呼べる親なんかいないねえ。」

「マシロに関しては、親の顔も知らないのです。」

「亜鬼十殿から少しだけ聞いている。しかし、それでも親でござろ

う？」

「そうですね。確かに、生まれてきた以上、それは変えられようのない事実です。」

「だが、それだけだ。事実だろうが何だろうが、俺は絶対エ認めはしねー。死んでもなッ！」

「何故そこまで拒むのだ？ 一体何が・・・??」

「うるせえ！ アンタなんかに関係ねえよ！！」

「おい、クロガネ！」

「（あわわっ！）」

クロガネは吐き捨てるように言って部屋を出て行った。
その後をマシロは慌ててついて行った。

「・・・失礼いたしました。」

「いや、某も聞くべきではなかった。」

「・・・分かっているのです。」

「？」

「自分達がどう足掻いた所で、親は親。子供に親が選べない以上、致し方がないこと。ですが、我々は抗っているのです。あのどうしようもない過去に……。我々にとって、親とはそんな過去の産物なのです。」

「。。。。」

それでも。

それでも、理解しきれない。

幸村はただ表情を険しくさせるだけだった。

日課となった涼み。

自分を落ち着かせ、一人考えていた。

自分はどうであつたか。

そうして分かるのは、鬼御子と自分が相容れぬほど違っている事のみだった。

きつと、これ以上考えようと理解できない事なのかもしれない。そう思い始めていた幸村の横に、湯浴みを済ませた亜鬼十が座り込んだ。

「彼らのことかい？」

「亜鬼十、殿……。亜鬼十殿は、どうお考えでござるか？」

「親を拒む子供について、かな？」

「うむ。どうしても、理解できぬ。」

「……普通の事がどうかって、多数決の結果なんだよ。」

「・・・。」

「一般に考えられてる事も、常識も、知識の正誤も、所詮多数決で決めたものだ。親元にいる事が正しい、それもただの多数決。人の数ほど、考えというのは存在するものだ。」

幸村は何も言わず、黙って聞いていた。

亜鬼十の言う多数決の説が、正しいのかどうか。

正直正しい気がしている。

人それぞれに考えがあるのだ。

同じであるわけがない。

この戦乱の世も、皆が和平を望む中で、自分達各々の信念を持っている。

だからこそ、戦が起こる。

自らの信念こそが正しいとでもいうように、自分達は戦う。負ければ、その信念とともに死に逝く。

それが戦乱の世の理なのだ。

「とくにクロガネが受けた傷は、とても大きい。三人の中で一番傷ついている。シンクほど大人でない故に、マシロほど幼くない故にね。」

「・・・。」

「クロガネは、誰よりも両親を信じていたんだよ。」

だからこそ、その傷は大きかった。

シンクのように親を敵視する事もせず、ましてやマシロのように親を知らないわけではない。

「それを、クロガネの両親は最悪な形で、その信頼を踏み躪った。」

「一体、何を・・・?」

「くわしくは教えられない。彼の誇りを汚したくないからね。」

「・・・。」

「ゆっきー、これ以上彼らの過去を詮索しちゃダメだよ?」

「分かった。そうするでござる。」

「ありがとう。」

亜鬼十は優しく微笑み、その場を去って行った。

彼女もまた、何かを抱えている。

だからこそ、分かるのだろう。

自分とは違って、彼女にはあの三人の気持ちが、痛いほどに・・・。

詮索するな。

それは、自分の事も含まれていたように、幸村は思えたのだった。

28 鬼姫、憎悪

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 《

*

28 鬼姫、憎悪

*

今まで生きてきて、誰かを憎んだ事はない。

両親に対しては、どうでもいいと無関心だったから。

あとは、普通に友達作って楽しんでいたし、それなりに幸せだった。

でも、一度。

ただ一人だけ、今でも凄く憎い人間がいる。

松永 久秀。

今でも鮮明に覚えている。

奴が燃やし、奪っていった村。

消え逝く命の灯火を。

忘れる事のできない罪悪感と、あの時感じた無力感。

決して忘れはしない、この憎悪という黒き炎。

闇は、今でも俺の心を支配している。

俺は今でも、過去に縛られている。

嫌な夢を見た。

それも、最近見なくなっていた夢。

あの時以来見なくなっていた、元の世界の夢。

コレを見るということは、ロクでもないことが起きる前触れだ。

それも、冗談にならないほどの事が、起きようとしている予兆。

呼吸を整え、亜鬼十は部屋の障子を開けた。

まだ月が昇っている。

位置からすると、今は深夜だ。

誰も起きてはいないだろう。

「・・・水・・・。」

無性に喉が渇く夜だ。

嫌な夢を見たせいかもしれない。

一人廊下を歩きながら考える。

この先、何が起こるといふのだろうか。

あの時のような、自分の無力さを思い知らされるような事、起ころうとしているのか。

亜鬼十は思わず唇を噛んだ。

今でも忘れられぬ罪悪感は、時間と共に消える事などなかった。

あの時、どうすべきだったのだろうか。

奴の言うとおりにしていれば、良かったのだろうか。

しかし、分かっている。

言うとおりにしたところで、あの男が何もしないわけないのだ。

きつと、俺の知らぬ間に村を襲っていただろう。

結局、救えないのか。

俺が無力である事に変わりないのだ。

助けたかった。

終わってしまった今でも思う。

親も嫌ったこの髪と瞳を、全く怖がらなかった彼ら。いつも、笑いあってくれた、家族のような存在。

それなのに・・・、俺は・・・っ！

「悔やむ事ではないわ。」

「！？」

聞き覚えの無い女の声に、一瞬驚き後ろに下がった。

そこにいるのは、黒いフード姿の女。

金髪の綺麗な長髪。

青い瞳。

どう見ても南蛮の人間である。

「こんな夜更けに、不法侵入ですかー？」

いつもの調子で笑って見せると、南蛮の女も綺麗に微笑み返した。その笑顔は、まるで少女のようでもある。

だが、亜鬼十の内なる感覚は警報を鳴らしている。

気をつけろ、と。

「What person is it? (誰だい?)」

「It is not as much as the intr
oduction, too.

(名乗るほどの者ではありません。)

「Do I have an occupation? In or the master?

（俺に何か用かな？それとも、敏春兄にかな？）」

「Myself don't have an occupation to the noble woman. It of it was asked from some man. Saying it deprives this country of the noble treasury.

（私は別に何も無いの。でもね、ある人に頼まれたから。貴女を、連れて来いって。）」

「noble treasury...なるほど、今回の口くでもないことっていうのはこの事か...。」

「...。」

「松永久秀、だな？」

「...。」

「今更日本語が分からないってわけじゃないでしょう？」

「...。」

「だんまり、ねえ。」

亜鬼十は軽い口調で提案した。

「It goes, being selfish if letting me know a place. It is the meaning that it is possible to save the labor that you take it. Doesn't it think that it is a good idea?

(場所を教えてくれたら勝手に行くよ。それなら君の手間も省ける。良いアイデアだろ?)」

「I, too, agree. However, it doesn't think that it is labor. (そうね。でも、手間なんかじゃないわ。)」

「?」

「だって貴女、私より弱いもの。」

「玄さんじゃないけど、驕りはその身を滅ぼすよ?」

「私からしたら、驕ってるのはあなたの方よ。孤独な鬼姫さん。」

「おっと、そうなのかい？」

「ええ、そうよ。」

「そっか」

ここで人が怒るのは普通の事だ。
だが、亜鬼十は全くもって冷静。
平常心を保ったまま、笑っていた。

その変化のなさに、相手は笑うのを止め無表情になった。
続いて大きな溜息をついた。

「・・・、あなたって扱いにくいわ。」

「君は人間関係において不器用な人だね？」

「あなたみたい壊れた人間に言われたくないわ。」

「そりゃどーも。」

「・・・松永は、あなたを気に入っているわ。何故かしら、とずっ
と思ってたの。」

「俺はあの男に気に入られてる事に、ものすごく不快感を感じるよ。」

「同感。同情しますわ。」

「ありがとう。」

「いえいえ。・・・それより、彼の居場所だったかしら？」

「うん 教えてくれるかな？」

「その必要が見出せないわ。」

「？」

「言葉のままよ。・・・黒土・・・ さん・・・。」

息を呑んだその瞬間。

視界が暗転した。

29 鬼姫、不明

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 《

* *
* 29 * 鬼姫、不明
*

城が騒ぎ出したのは、皆が起床してから数刻たった頃だった。
一人の武将が、忽然と姿を消してしまったのだ。

「くそ！一体どこに行きやがったんだ？」

「申し訳ございません。忍隊、鬼御子、全員で搜索いたしましたが見つかりませんでした。」

鬼御子を率いた安曇の報告に、敏春は眉間に皺をよせた。

今まで自分に黙って何処かへ行くなど、したことがない。
必ず一言はあるものだが、今回は何も無い。

かといって、何かしらの事件に巻き込まれたというのもない。

忍の報告では、昨晚から明朝にかけて静かなものだったらしい。

「何らかの理由あって、自ら出て行かれたのでしょうか？」

「分からん！だが、やはり納得いかん。奴が俺との契約を自ら破る
とは思えねえ。最近奥州との事もあって、結構大人しくしてたしな。」

「あの、天松院殿。」

「！真田殿・・・、すまない。鍛錬の途中であつたのに。」

「いえ、それより、某何やら嫌な予感が致します。」

「嫌な、予感？」

「先ほど、勝手ながら亜鬼十殿の部屋に失礼させていただきました。これを……。」

「……『鬼牙』……、俺があいつにやった刀だ。」

「亜鬼十殿は鍛錬中もこれを隠し持つておるようなお方にございます。城の外へ出て行くとなれば、この刀も身につけていくはず。」

「不自然、だな。」

「もしや、何者かに連れ攫われたのでは？」

「！買いかぶるつもりはねえがな、アイツが誰かに攫われるようなたまかよ？」

「ですが……、万が一のことも……っ！」

「今の所は、外部に流れぬように。亜鬼十には他国の方に出ている事にする。余計な混乱は避けなくてはならない。真田殿も、このことは他言無用としていただきたい。」

「分かり申した。しかし、こちらでも亜鬼十殿の搜索を手伝わせていただけないだろうか？ 亜鬼十殿は、友人であると同時に我が師でござる。お願いいたす。」

「……頼みます。」

そうして、鬼姫失踪の事件は、上層部、そして甲斐の一部の人間のみの知る事となった。

何も知らぬ兵達は、突然のことに驚いてはいたが、鍛錬を怠るには至らず自分の精進に励んでいた。

もし本当の事が分ければ、敏春の言つとおり混乱を招く事態になるだろう。

（亜鬼十殿、一体何処へ・・・？）

「お！幸村ー！」

「！・・・ま、前田殿！？」

縁側に座っていた幸村に声をかけたのは、前田の風来坊 前田慶次であつた。

何故か城壁に這い上がっている状態で、慶次は手を振ってきた。

「何故そのような所に？」

「いやー！ちよつとよる程度つていうかさー！亜鬼十に会いに来たんだけどいるかい？」

「亜鬼十殿と知り合いでござるか？」

「ん？ああ、奥州でな！それで、亜鬼十は？」

「あ、亜鬼十殿は・・・。」

言葉に詰まった。

亜鬼十殿の消息が掴めないという事は、他言無用という事になっている。

だが、慶次に対して信頼できないわけではない。いろいろな人脈を持つ慶次になら、もしかしたら亜鬼十を見つけられるかもしれない。

逆に、他国に知れてしまう可能性も出てしまう。やはり、ここは黙っておくべきだろう。

「亜鬼十殿は今出かけられております。」

「何処にだい？」

「某もそこまでは。天松院殿に使いを頼まれたらしく。」

「へー、亜鬼十も大変だねー。」

「慶次さん、正門から入った方がよくありませんか？」

見慣れない女が、慶次と同じような姿勢で顔を出した。

「・・・前田殿、そちらは・・・？」

「おお！俺の奥さん！」

「！？お、おおお、奥方殿であつたか！？」

「！え、えと・・・ッ、ま、まだそん、な・・・ッ！」

顔を真っ赤にする彼女に、慶次は笑いながら頭を撫でた

。

「婚儀はまだなんだけどさ、亜鬼十にも紹介しようと思ってな！」

「そつでござったか。」

「冴、と申します。」

「某、真田源次郎幸村と申す！」

「・・・あの、幸村様・・・。」

「？」

「嘘、ついてますね？」

「！？」

かなりストレートに言われてしまった。

すみません、と慌てて謝る冴。

しかし、慶次の方も幸村が嘘をついていることを分かっていたようだ。

その目が、真実を知りたがっている。

「・・・他言無用と、約束ある故・・・。」

「・・・それなら仕方ないか・・・。よし！探すか！！」

「！？前田殿！探すとは・・・？」

「冴、頼めるかい？」

「はい！私も、その亜鬼十さんに会ってみたいです。」

「しかし、どうやって・・・？」

「その様子だと、アレかい？亜鬼十が行方不明、ってことか？」

「！・・・う、うむ・・・。この事はこの新兵達は知らぬ。他国にも漏れてはならぬ事ゆえ。」

「妥当ですね。」

「ああ。」

「では、呼んでみますね。」

「頼むよ。」

「？呼ぶとは??？」

よく分からない幸村をよそに、慶次と冴はそのまま城壁を越えて中に入ってきた。

そして、慶次は縁側の方に行き、冴は真ん中に立った。
何をするのかと見ていると、冴は口に指を添え、思いつきり息を吐く。

高い音が鳴り響く。

音は木霊し、遠くまで響き渡った。

と、その時。

遠くの空から何かの群れが飛んできた。

近くからも小さな小鳥達が冴に近づいてくる。

その様子を目を丸くして驚く幸村に、慶次は笑いながら説明する。

「冴は動物と共生する白狼一族の末裔なんだ。さっきのは『獣笛』
っていうらしい。」

「しかし、鳥を集めて一体何を・・・？」

「白狼一族は、動物の言葉が分かるらしくてな。きっと何か分かる
かもしれねえぜ？」

「おお！それは頼もしいでござる！」

「慶次さん！幸村様！亜鬼十さんの行方が分かりました。」

「真か！？」

「で、何処なんだい？」

「ここから離れた場所にある、古い寺へ入って行った、と。」

「何故そのような？」

「そこまでは。ただ、夜更けに亜鬼十さんは一人でそこへ歩いて行
ったらしいです。」

「・・・。」

嫌な予感がする。

部屋に残された刀といい、その寺といい、何故そんな夜更けに行くのだろうか？

次々にわく疑問に、幸村の表情は険しくなっていく。

それを見ていた慶次は、何を思ったのか幸村にこんな事を聞いた。

「恋でもしてるのかい？」

「！？な、何を！今そんな話では・・・ッ！」

「いや、何か幸村さ、亜鬼十のこと心配してるだろ？」

「して当然ではないか！亜鬼十殿は某の友にござる！！」

「本当に友達だからなのかい？」

「は？」

「亜鬼十のこと、好きなんだろ？」

「！す、好き、などと・・・ッ！！破廉恥でござるウー！！」

「相変わらず純情熱血馬鹿だな。」

「！？？」

と、そこに立っていたのは『奥州の鞘』 園原万里だった。

何故ここにいるのか尋ねかけたが、奥のほうから敏春とある二人組が歩いてきた。

一人は『竜の右目』 片倉小十郎。

そして、『独眼竜』 伊達政宗。

幸村の一番の宿敵であった。

「よお、真田幸村！」

「政宗殿！何故ここに？」

「Honeyの夢見が悪かったからな。」

「Honeyじゃねえよ。」

「万里殿……。」

「亜鬼十は俺の宿敵、ライバルだ。他の野郎にやらせはしねえ。それだけだ。」

「それでは、亜鬼十殿は・・・っ！」

「生きてはいる。怪我もしてねえ。だが、危険な状況だ。場所までが掴めないだが・・・。」

「それでしたら、冴殿が見つけたぞ。」

「ホントか！？てか、誰だ？」

「冴と申します。」

「前田殿の奥方にござる。」

「マジか！？冴さん、コイツはやめとけ。ぜってー浮気するぜ？」

「ちよっ、しないから！なんてこというんだよ！」

「Honeyの言うとおりだぜ。」

「独眼竜！？」

「それで、場所は何処なんです？」

「私が案内します。」

「天松院殿。」

「分かっている。俺はここを離れられねえ。代わりに、頼みます。」

「お任せくだされ！天松院殿！！」

こうして、亜鬼十の救出に向かう幸村たち。

しかし、この先に待ち受けるものは、何処までも暗い闇であった。

30 鬼姫、そして過去

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 《

*

30 鬼姫、そして過去

*

兄さんには、ずっとずっと幸せでいてほしい。

それが、幼い頃からの、妹の、亜姫の願いだった。

「さすが亜鬼十ね。オール5なんて凄いわ!」

「大丈夫よ、病気はすぐに治るから！」

「亜鬼十。あなただけよ、私の子供は。」

母は、いつでも亜鬼十しか見なかった。

「本当に、俺の子なのか？」

ちょっとした不安。

父はただ、確認したに過ぎなかった。
疑っていなかった、とは言えないが、すぐに亜姫も自分の子であると認識して

、普通に接していた。

けれど、母は・・・。

母は亜姫を避け始めた。

「あんたの顔なんて見たくもない！」

「私の子？アンタなんか知らないわー！」

母からは、一度も名前で呼ばれなかった。

母の口から出るのは、いつでも亜鬼十。
兄の名前だけ。

しかし、亜姫は一度として兄に嫉妬した事はない。

なぜなら、亜姫にとって兄 亜鬼十は、自分の世界そのものだった。
世界は兄を中心に回っていた。

だからこそ、亜姫には両親が愛情をくれないことを、どうしても良い
事に思ってた。

いた。

そんなある日、兄の病気が悪化した。

そして翌朝、眠るように死んでしまった。
兄の死に顔は、とても幸せそうだった。

亜姫はそれに安堵した。

悲しくないわけではない。

それどころか、亜姫は家族の誰よりも悲しんでいた。

それでもあえて、彼女は涙を流さなかった。

こんなにも幸せそうな顔をしているのだから、せめて笑って送り出したい。

だが、そんな思いを知るはずもない両親は、ぎこちない笑顔にもかかわらず、

彼女の気持ちを一切汲まなかった。

「お兄ちゃんが死んで嬉しいの！？お母さんの宝物がなくなっ
てそんなに嬉しいの！？」

「やめないか！」

「やめないか！」

「違・・・う・・・」

「アンタは悪魔よ！化け物よ！！」

「おい、お前・・・！」

「アンタなんか・・・、生まれてこなければよかったの・・・ッ
！！」

ベタな台詞だった。

けれど、その言葉は亜姫を傷つけるのに十分な言葉だった。
少し期待していたのかもしれない。

兄が死んだら、両親は自分を見てくれるのではないかと。

最低だ。

最悪だ。

醜い・・・。

亜姫は自分を自分で罵っていた。

母から受ける暴言と暴力の日々の中で、それらを全て肯定し、さらに自分で蔑

んでいった。

だが、それはとても苦しい事だった。

学校には行つても、殆どサボっていた。
友達との関わりも、いや人との関わり事態が少なくなっていたのだ。

「どうすれば・・・。」

どうすれば、良い？

私はこの先、どうすれば良い・・・？

彼女は考えて考えて・・・、考えて、見つける。

自分を捨てる。

名前、過去、全てを捨てるという道。

高校入学前から、彼女は『黒土 亜鬼十』として過ごし始める。

兄の口調、仕草、趣味、成績も、全てを自分のものにした。
兄は、ここに生きている。

亜鬼十は生きている。

それは、徐々に自分を失わせていった。

高校生活の青春は、男としては普通に過ぎていった。

成績優秀、スポーツ万能。

そして、顔も性格も良く、周りからは人気者だった。

母も、暴言や暴力の日々を一転させた。

とても優しい母が、そこにいた。

一度として見せなかった、優しい顔。

けれど。

母から『亜鬼十』と呼ばれる事が、とても不快に思えてきた。

高校卒業後。

家を出た。

母は悲しんだが、どうでも良かった。

気づいたのだ。

今自分がしている事は、くだらない家族ごっこでしかないのだと。

弱い自分が許せなかった。

家を出て、海外に住み始めた。

言葉も意外とすんなり覚えられた。

だが、それではダメだ。

人は極限状態となったとき、大きな成長を見せるものだ。

これでは強くなれない。

弱いままだ。

だからこそ、心身共に厳しい環境を望んだ。

一年後。

軍人になっていた。

しかも、気づけばトップクラスの幹部にまで上り詰めていた。

唯一の女幹部として有名であったし、実力も申し分ないと、上司からも気に入ら

られていた。

そこに、自分の求めた環境がなくなってしまうていた。

そして、再び思った。

自分は、もう大丈夫なのではないだろうか、と。

昔捨てた自分を拾い上げた。

もう一度、亜姫に戻ってみよう。
自分に、戻ってみよう。

「俺は、私は母と向き合う必要がある。」

亜姫は確信した。

母と向き合う事が、自分を変える一番の方法なのだと。

「あああああああああああ——————ッ!!」

帰国後。

久しぶりの我が家で迎えたのは、耳を劈くような母の叫喚だった。

亜鬼十ではない亜姫を見た瞬間、母は狂いだした。

玄関からリビングへと逃げるようにして行ってしまった母を、亜姫は追いかける。

だが、その先で見たものは、未だに叫喚する母。

その手に持つ、果物ナイフ。

ナイフは凶器となって煌く。

グサッ！

避けられた。

本当なら、避けきれるほど。

そのまま、ナイフを叩き落す事もできた。

けれど、それをしなかった。

亜姫は、失望したのだ。

「亜鬼十は何処！？亜鬼十、助けてーーーーッ！！！！！」

母は、壊れていた。

ガラクタだ。

こんなガラクタに、自分を成長させられるものか。

同時に、亜姫はこの先に何もないことを悟った。

ならば、ここで終焉を迎えるのも良いかもしれない。

ガラクタに殺されるなんて真っ平だが、この先、生きていくのもつまらない。

何も感じられないほどに、亜姫は母親に滅多刺しにされた。

このまま、死ぬはずだった。

可哀想・・・。

覚醒する意識の中で、声が聞こえた。

それは、廊下に立っていたフード姿の女の声であった。

「・・・おはよう、であつてゐるかな？」

「・・・。」

「それとも、お昼だったりする？」

「そうね。もうお昼よ。」

「そっかー 寝すぎた。」

軽口はこの状態でも健在である。

この状態。

岩壁に枷で両手両足を拘束されている状態。
絶体絶命である。

「・・・可哀想、だと思う。」

彼女は再び言う。

「ん？」

「あなた、可哀想。」

「・・・そうかい・・・？俺に悲劇の主人公はに合わないよ。」

「そうかしら？」

「そうだよ。」

「・・・そうね。亜鬼十は悲劇の主人公じゃない。幸せそうな死に顔をした死

人に悲劇の主人公なんて似合わない。でも、亜姫はピッタリ。そのままきちん

と型にはまる。」

「亜姫は昔死んだ妹だよ。亜鬼十は俺。そして、生きてる。」

「それが、可哀想だというのよ。」

スタスタと近づき、その手が亜鬼十の頬に触れる。
氷のように冷たい手をしている。
そのせいか、背筋に氷を入れられてような感覚がした。

「あなたは、決して亜鬼十にはなれない。なぜなら、あなたはあなたでしかない

いのだから。」

「俺は俺だよ。亜鬼十である以上、亜鬼十という人間でしかないよ。」

「いいえ。亜鬼十は死んでる。あなたは、亜姫。誰にも愛されなかった、可哀

想な人。」

「俺は「亜姫よ。」・・・っ。」

「どんなに否定しても、あなたは亜姫という人間。誰も見てくれなかった孤独

な妹。自分の運命から逃げた臆病者。」

だから、弱い……。

「だから、誰も護れない。」

「……ッ！」

「過去も、今も、そしてこの先の未来も、ずっと……。」

おかしい。

どうして否定できない？

彼女の言葉が正しく思えてくる。
自分が、弱く感じる。

いや、本当に弱いのかもしれない。

強いとは思わない。
驕るつもりはない。
自分は、弱い……。

「だから皆、あなたから離れていく。あなたの前から消えていく。」

誰もあなたを必要としない。

そうか、これか・・・。

自分の本能が警告した危険とは、こういうことか。
彼女の言葉は、絶対に聞いてはいけない。

しかし、それが分かった時には全て手遅れだった。

31 鬼姫、墮落

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 《

*

* 31 * 鬼姫、墮落

*

松永久秀は、目の前の至高の宝に口元を緩めていた。

織田の魔女の手を借り、ようやく手に入れた彼女。

女だと知った時は驚いたが、その美しさを見た時納得した。

用意した黒を基調とした着物がよく似合っている。

思ったとおり、あの綺麗な絹のような髪が映えている。

「これで、そなたは私のモノだ。誰にも渡さぬ、亜姫よ。」

虚ろな目をしている亜姫は何も答えない。

松永も、コレには少し残念に思っている。

自分に向けるあの視線が、今では味わえないのである。

百戦錬磨の武士をも震わせる、あの鋭い瞳。

あの夜、その瞳にとりつかれた松永は、亜姫の容姿以上に欲していた。

だが、背に腹は変えられない。

こうして手にするには、これしかないのだから。

「コレでいいのかしら？」

「ああ、十分だ。礼を申すぞ、織田の魔女。」

「いらないわ、寒気がする。それよりも、上がうるさいわ。」

「光に集まる虫共であろつ。」

「……。」

魔女は無言で背を向けた。

彼女にとって、この先何があろうと関係なかった。
自分はやるべき事をやったのみ。

上で騒ぐ連中が松永を殺した所で、何も関係はしない。

「というか……、光に集まる虫は貴方もじゃなくて？」

その言葉は本人に届かない。

魔女はただ、暗闇に姿を消していった。

幸村たちが例の寺についたのは、城をたつてしばらくした後であった。

もう誰も来なくなってしまったような、今にも倒れそうな寺の前。そこで、幸村たちは異様な空気を感じた。

「Hey! 真田! どうやら、歓迎されてるみたいだぜ。」

「そのようでごさるな。」

全員が身構えると同時に、草むらから数十の敵が出てきた。黒い布で身を隠す敵からは、なんの闘志も感じない。

この感じは、過去に経験がある。

金で雇われただけの傭兵。
戦いにおいて、何の意味も持たない者たち。

「松永久秀・・・ッ！」

「Shit！何処までもいけすかねえ野郎だぜ。」

「俺は奴が苦手だ。反吐が出る。」

「ここは、私が残ります。」

「冴！？」

「なら俺も残るぜ。可愛い奥さん残して行けねえ。」

「慶次さん。」

「前田殿！冴殿！かたじけない！」

「早く行ってください。亜鬼十さんを必ず助けてきてください！」

「Of course・まかせな！」

幸村の一点突破により、寺の中へと突入した。

その後を追おうとする敵だが、その道を一人が阻んだ。

「悪いねえ！」

「ここから先は行かせません。」

「前田慶次！罷り通る！！！」

「白狼の名において、エモノは決して逃がさぬ！」

寺の中は、外見同様に荒んでいた。
誰かがいるような気配もなく、埃臭いところだった。

「どうなってやがる？前田の女は此処だっ行ってたけどよ？」

「……。何もねえし、ただ汚いだけだな。」

「ここではないのか？」

「政宗様、これを。」

何かを見つけた小十郎。
全員がそこに目を向けると、扉があった。
警戒しつつも、扉を開ける。

「……。階段か……。」

先は暗く、何も見えない。

このまま進むのは危険である。

と、万里が蝋燭を見つけた。

「Niceだ、Honey!」

「Honeyじゃねえ。」

「では、参ろう。」

幸村を先頭に、政宗、万里、小十郎の順で階段を下りていった。

「誰もおらん。」

「罪歌が、奥の方にいるってよ。松永と亜鬼十だ。」

「亜鬼十殿……。」

幸村たちは警戒を解かず進んだ。
他に誰もいないといえど、何処に罠をはっているかも分からない。
今までの経験から、このような場所に何も仕込んでいないはずが
ないのだ。

しかし。

その予想は大きく外れてしまった。
何処にも罠などなく、簡単に先へ進んでしまったのだ。

そして、二人のいるという部屋にたどり着いた。
左右に別れ、中の気配を伺う。

バンッ！

勢いよく蹴破った扉は、大きな音をたてて倒れた。

「よくぞ、参られた。独眼竜に竜の右目、奥州の鞘。そして甲斐の赤き虎。さすが、私の見込んだだけの宝よ。」

そこには、松永と亜鬼十の姿。

松永は大人しく座り込んでいる亜鬼十の前に立っていた。

「亜鬼十殿！」

「・・・貴殿らは知らないか。この宝の秘密を。」

「こつも再会したくねえ人間も珍しい。罪歌もアンタを嫌ってる。」

「くくくつ。」

「亜鬼十殿を返してもらつてくれる！」

「返す？それはおかしなことを言う。」

「何！？」

「この宝は、私のモノだ。あの時から、彼女が私を殺したがっているかぎり。」

「あの時・・・？まさか、奥州で農民殺しをしやがったのはデメエか！」

「はて、どの村の事だったかな？」

「最悪だな、あの男。てか、亜鬼十！デメエ、そんなところに大人しく座ってんじゃねえ！！」

「・・・。」

万里の声に全く反応しない亜鬼十。

それに怒りを覚える幸村たちは、松永を睨んだ。

松永は不適に笑っている。

「亜鬼十殿に、一体何をした！」

「何もしてはoirん。ただ、魔女が手を出してしまったただけのこと。」

「魔女・・・？」

「あの者のおかげで、宝は手に入った。瞳の輝きが失われてしまつて、実に残念だがね。」

「松永ア！」

「おっと。私は卿らの相手をしている暇はない。まだ、この宝を愛でてはおらんなのでな。」

松永はニヤリと笑い、指を鳴らした。すると、上から何人もの黒い影が落ちてきた。

姿かたちは足軽だが、そもそも人間ではない。真つ黒な人の影が、不気味に動いている。

「魔女が残していった人形が、卿らの相手だ。」

「何だ、こいつら！？」

「人じゃねえ。罪歌が言ってる。」

「物の怪か！」

正体不明の影を目の前に、四人は武器を手になぎ倒していった。

しかし、その不気味な影は、簡単に真つ二つになるが、同時にすぐに治ってしまうのだ。

それはどんな大技であろうと聞かない。

木っ端微塵になったところで、すぐに再生してしまう。

「Shit! きりがねえ！」

「これが人間なら、一気に済ませられるのによオ！」

「何か方法は！」

「術者を倒すしかねえ！」

「でも、その術者もいねえんだぜ！まさか、その術者も人間じゃねえわけねえよな？」

「知るか！・・・ぐあっ！」

「小十郎!!」

「片倉殿！……うおっ！！？ぐっ……！」

徐々に体力だけが削られていく中、影達は全く動じる事はない。
容赦なく四人を襲ってくる。

その様子を、亜鬼十はただ眺めるようにしているだけだった。
虚ろとなった赤い瞳は、何も感じていない。
作り物のような、本物の人形のように、冷たい無機物となっている。

「くっそー！亜鬼十のやつ、正気に戻ったのー！！」

「万里！」

「何だよ？」

「お前の刀で、何とかするんじゃないか？」

「……なーる。かもな。だが、この障害をどうにかしねえとよ！」

「ならば、某が道を作りましょうぞ！」

「松永は俺達でひきつける！」

「OK！んじゃ、行きますか！！」

幸村は槍を構えなおし影を蹴散らしていった。

その道を、影が再生する前に走り抜く奥州三人に、松永が刀を抜き立ちふさがる。

が、双竜と呼ばれる二人の武將に足止めされ、一人『奥州の鞘』が走り抜ける。

「目を覚ましやがれ！亜鬼十オーーーーーッ！！！！」

万里は罪歌を亜鬼十に突き刺した。
背中に貫通するほどに、深く深く、真っ赤な血を滴らせた。

32 鬼姫、暴走

《戦国BASARA》 白き鬼姫物語 《

＊ ＊
＊ 32 ＊ 鬼姫、暴走
＊

「亜姫・・・ッ!？」

松永はその光景に息を呑んだ。
彼からしてみれば、大切な宝に傷をつけられたのだ。

隙のできた松永を、政宗と小十郎は見逃さず、全力で攻撃をぶつけ

た。
攻撃を受けたからだは、そのまま後ろの壁へとぶつか意識を失った。
同時に、影達も消え去っていき、身動きの出来ずにいた幸村も自由になった。

「亜鬼十殿！」

「万里、どうだ？」

「・・・っ！？」

「おい、万里！？」

「罪歌が、拒絶されてる・・・ッ！」

その時、亜鬼十の指が動いた。

それに気づいた四人はそれぞれ、亜鬼十と声をかける。
だが、返答はない。
ただ、黙って頭を上げるだけだった。

「亜鬼十殿・・・？」

「・・・。」

「?!」

その瞬間、万里の体が勢いよく後ろに吹き飛ばされた。
その拍子に刀も引き抜かれた。
傷口からは止めどなく血が溢れ、着物を濡らしていく。

「亜鬼十殿！」

「ダメだ！そいつから離れろッ！！」

万里の声が聞こえる。

反転し、亜鬼十の姿が遠ざかっていく中で。

幸村、そして双竜の二人は、目に見えぬ力によって吹き飛ばされてしまったのだ。

「何だ、今の!?」

「分かりませぬ・・・!」

「亜鬼十殿、何を・・・?」

何が起きたのか分からぬまま、立ち上がり自分達に視線を向けた亜鬼十を見た。
相変わらず感情のない目をしている。

だが、幸村はその目を知っている。
稀に見せるその瞳。
失望しかった、悲しい瞳。

「亜鬼十、か。」

「？」

「別に構わないんだ。俺は別に良い。構わない。そう思ってた。」

「何の話だ？」

「俺は、きっと羨ましかつたんだろうね。誰かに名前を呼んでもらえる事が、誰かに見てもらえる事が、とってもとっても羨ましくてだから、俺はなろうとした。愚かな考えだと分かっているがそうした。」

「亜鬼十、殿。」

「結局、俺は一人なんだね。元の世界でも、ここでも……。それならいっそう、最初から何もなければよかったのに。そうしたら、俺は何も求めなかったのに。」

だんだん気温が下がっていくのが分かった。
吐き出される空気が白くなる。
この部屋全体が凍りついていく。

「何も、いらなかったのに。」

「（亜鬼十のバサラか・・・！？）やめろ！！これ以上気温が下がったら、お前死ぬぞ！？」

「・・・君のことは、結構気に入ってるんだ。俺とは違って、最初から人間を嫌っているから。何も求めていなかったから。すごく、楽だと思う。」

「・・・楽、ねえ・・・。それでもねえさ。」

「？」

「これだけは言えるぜ！テメエはただ逃げてるだけだ！！人から何もされなかった。何ももらえなかった。だから何だっただ！それが怖いなら勝手に優しくするな！期待するな！人のせいにして、逃げ回って、そんな卑怯者をライバルなんて認めねえ！！」

「・・・。」

「亜鬼十よお？最初にやりあったとき、俺の過去『見て』楽だっただか？ふざけんじゃねえ！どの世界いこうともなあ、生きてりゃいろいろあるんだ！楽な人生なんてどこにもねえ！！それでも、俺達は生きてんだ！！！」

「そうやって、無理して生きていくのって、疲れない？」

「！」

「ここで終われば、もう苦しまなくて良いんだよ。」

「ざけんな！」

万里は闇を纏わせた罪歌を振るう。

黒い影は、雷のような轟音と共に亜鬼十へと奔る。

クリーンヒットした攻撃は、派手な爆発音と爆風を巻き起こしたが。

晴れていく土煙の向こうにはボロボロになった着物のみであった。
どこだ、と万里は辺りを見回す。

「バンちゃんは……。」

「!？」

「容赦ないなあ」

「MAGNUM STEP!」

「おっと」

亜鬼十は軽々と攻撃を避け、離れた場所に着地した。
ワインレッドの軽装は、まさに戦闘中の軍人である。

「軍人つてのは、嘘じゃねえってか？」

「現役だからね。戦争だつて何度も行つたよ。行く度にいろんな人を殺したんだ。敵だけでなく、敵国の一般人も、片っ端からね。」

「!？そ、そのような事、亜鬼十殿に出来るわけがありませんね!!
あんなにお優しい貴殿が、非道の限りをつくしたなど!」

「俺はそういう人間だよ。上官の命令は絶対。必ず遂行するのが、
軍人なのだから。変な話だよね？戦つてもない人間を殺さなくちゃ
いけないんだから。くだらない事に労力使つて、効率が悪いと思ひ
ませんか？」

「亜鬼十殿、それは・・・本心にござるか・・・？」

「嘘はついてないよ。」

「Ha! 何にせよ、テメエは俺らを殺すってんだな？」

「そういうこと。」

「なら、遠慮しねえぜ。此処で倒れるわけにはいかねえ。」

「やめてくだされ、政宗殿！亜鬼十殿も、このようなことを本望であるなど、ありえませぬ！」

「君は理想主義者なんだね。でも、それはゆっきーがいろんなもの持ってるからだよ。」

「！」

「神様つてのがいるなら、きっと神様は不公平なんだろうね。こうして、持ってる人間と持っていない人間をつくったんだから。」

「うぜえ。マジでうぜえ！そういう屁理屈ばっか並べて逃げてるな
んぞ、胸糞悪イぜ！」

「女の子がそんな言葉使っちゃダメですよ。コジユさんにまた怒られちゃいますよー？」

「テメエは俺が止める。」

万里の瞳は赤く輝く。
体の支配を半分罪歌に任せた。

「間違った方向を正してやるのも、友達の役目だろ？」

「そういう変な正義感、俺は嫌いなんで・・・、徹底的に捻り潰します。」

「やってみやがれッ！卑怯者がよお!!！」

「偽善者は黙ってください!」

傷口から流れ出る血が、生き物のように動き出た。
スツと上げた亜鬼十の腕に纏わりつくように上り、剣の形となって固まった。

その瞬間、万里の目の前に現れ斬りかかった。
反射的に刀で受け止めるが、そのまま後ろに吹き飛ばされてしまう。

「うおっ！」

「！」

吹き飛ぶ中で体勢を立直し地に足をつけた。
そのまま踏み止まり、顔を上げた万里だが、再び亜鬼十の斬激が迫っていた。

紙一重で避けると、万里は反撃に入る。
しかし、それは簡単に避けきられてしまう。

「やっぱり凄いのはその刀ですね？『奥州の鞘』とは、よく言ったものだ。」

「！？」

刀を握る右手首をガツシリと握られ、そのまま亜鬼十の左足が腹部にきまつた。

「これが俺との差ってやつですね？」

「・・・は！」

万里の左ストレートが、亜鬼十の右頬にはいった。

「油断してんじゃねえよ！」

よろめく亜鬼十は、万里の腕を放し後ろに下がる。
だが、そのチャンスを逃すことなく、万里の第二撃を腹部に決まった。

「俺も、かいくぐつてきた死線は伊達じゃねえ！」

「・・・みたいだね・・・。」

「!？」

腹部に入っただけの拳は、亜鬼十の足に受け止められていた。

「経験の差ってやつ」

「うっわ、ムカつく・・・ッ。」

その瞬間互いに動いた。

拳を踏み台にした亜鬼十が、もう片方の足で万里の顔面を狙った。

万里は寸前で身を引き、掠めた。

だが、思いつき蹴った勢いで背を向けるかたちになった亜鬼十に、隙ありとばかりに刀を突き刺そうとする。

キンッ！

亜鬼十の剣が罪歌を受け止めた。

「後ろに目でもあるのかよ！」

「まっさかー！」

激しいぶつかり合いと共に散る火花は、二人の攻撃の凄まじさを表していた。

二人の攻撃の隙のなさに、政宗たちはただ見る事しか出来ない。

幸村も、槍を握り締めるものの、人とは思えない身のこなしに見入ってしまった。

亜鬼十とはこの一月ほど鍛錬をともにしていた。

組み手であろうと、一度として勝てたことがない。

そんな彼女が、今万里とやり合い、本気を見せている。

もしかしたら、まだ本気でもないのかもしれない。

「万里！！」

「!？」

思考に耽った幸村だが、政宗の声に我に返った。

「園原殿!!」

「万里ーッ！」

「ガッ・・・！」

地にたたきつけられ、口から血を吐く万里。

「不良の喧嘩では、強いんだろうね？」

「な、にが、言いてえ・・・！」

「殺しと喧嘩は全くの別物って言いたいんだよ。」

万里は手から離してしまった罪歌に手を伸ばした。

だがその瞬間、その手に激痛が走った。

万里は燃えるような痛みにか喚する。

手の甲は、亜鬼十の剣に貫かれ地面に突き刺さっていた。

「亜鬼十、テメエ・・・ッ!!」

「やめてくだされ、亜鬼十殿ッ!」

「何がどうなってんだ!?!」

「前田殿! 冴殿!」

「慶ちゃんも来てたんだ? おひさー。」

亜鬼十は剣を引き抜き、万里の胸倉を掴んだ。

多大なダメージに動けない万里は、そのまま抵抗も出来ず投げられてしまった。

その先で、政宗が受け止め万里の名を呼ぶ。

うるせえ・・・、と言う万里だが、その声はかなり弱々しい。

「亜鬼十、何やってんだよ？こんな・・・！みんなお前を助けに来たんだ！」

「助け？」

「そうだ。皆、お前が心配で・・・！」

「・・・違うよ。誰も、『私』を見てくれない・・・。」

「・・・？」

「慶ちゃんは、とても上手いよ。人の本質を見極めるのが、とても上手い。そんなあなたなら、何となく分かるんじゃないですか？」

「・・・。」

ニコニコと笑う亜鬼十。

その笑顔には何か黒い邪気を感じる。
とても冷たく、とても怖い……。

対して慶次は、背筋が凍る思いをしながら、一切亜鬼十から目を離さなかった。

「俺は……俺はお前の過去とか、気持ちとか、はつきり分らない。でもさ、あんたはこんな事望んでやってないんだろ？」

「何言ってるのかな？俺はこの世界にあるもの全てを消したいと思ってる。」

「嘘だ！アンタはそんな事思っちゃいない！」

「……。」

「アンタは、勘違いしてる！アンタを見てる奴は、たくさんいるじゃないか！アンタが鍛えた新兵も、鬼御子も、忍の姉ちゃんも、敏春も、ここにいた奴らも、みんなお前を見てる！」

「……。」

「亜鬼十殿は、どうして自分が一人であるを思っただ？前田殿の言うとおり、亜鬼十殿を見ておる者はたくさんおりますぞ！」

「……違う……。」

「違いますね！某たちが今見ているのは、貴殿でござる！」

「違う、違うんだ……っ！」

「亜鬼十殿！」

「それは全部、兄さんのものだから!!」

「!？」

兄さんは生きてる。

生きてる。

俺だから、亜鬼十は俺だ。

俺が、亜鬼十。

死んだのは、私。

死んだ。

死んだ。

昔、ずっと前に、死んだ。

兄さんが生き残った。

母さん、喜んだ。

兄さん生きてたから。

私が死んだから。

私が戻ったら、母さんは叫んだ。

母さん、殺す。

私、殺された。

何度も、殺す。

何度も何度も何度も……、何度も刺した。

殺した。

血がなくなるまで、刺した。

痛みがなくなっても刺した。

死んでも殺した。

何度も殺した。

繰り返す。

『亜鬼十』という仮面を被る彼女は、繰り返し言い聞かせる。

頭の中で、繰り返し続ける。

それが真実であるとも言つように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0964q/>

戦国BASARA ～ 白き鬼姫物語 ～

2011年4月9日11時46分発行